
IS 《インフィニット・ストラトス》 - オーストラリアの代表候補！？

ゲニル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS - オーストラリアの代表候補!?

【Nコード】

N9849X

【作者名】

グニル

【あらすじ】

ISが開発されて10年・・・ISとまったく関係ない生活を送っていたオーストラリアの普通の女子学生。なのに女子全員が受けるIS適性検査でいきなりA判定!?そして代表候補生として日本に!?!?!

本来は存在しないオーストラリア代表候補生、カルラ・カストの視点でISの世界を描いてみようという無謀な試み!

原作を読むか、またはアニメを見てからご覧することを強くお勧めいたします!

そねでほぶひんそー！

0・0(前書き)

ご覧いただきありがとうございます。とりあえず本編へどうぞ！

序章

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要として運用され始める。

ISの核となるコアは完全なブラックボックスとなっており製作者の篠ノ之博士しかコアの製造を行うことが出来ない。

しかし篠ノ之博士はISのコアを467個を作った時点でそれ以上の製造を止め、行方を眩ませる。

故に現在ISの絶対数は467機であり、専用のISを持つ事が許されるのは政府や企業の関係者の中でも、選ばれた者のみである。

そのため、新しいISを開発する際には既存のISを一度解体し、コアを初期化せねばならない。

しかもISは何故か女性しか起動させることが出来ず、理由は製作者の篠ノ之博士すら分かっていないらしい。そのため世の中には必然的に女尊男卑が浸透していくことになる。

『ISが出来てからの歴史』、第一章冒頭より

「ぶじ…」

もう何度も読み返し、ボロボロになった本を閉じて私は目を閉じる。

今は日本へ向かう政府専用旅客機の中だ。

先ほどまでの眼下に広がっていた青い海は無くなり、既に旅客機は空港への着陸態勢に入っている。

本来は本にあるとおりISを扱えるのは、ISを扱っている大企業や保有している国家であり一般人は触れることさえ許されない。

それなのに1年前までただの女子学生だった私がIS学園に入学だなんて…運命なんていうのは分からない。

『本気はまもなく着陸致します。お立ちのお客様は席に戻ってシートベルトをお締めください』

うん、既に腰には少しきついくらいにシートベルトが締めてある。というより飛行機が離陸してから一回も外していない。

どうしても飛行機は好きになれないのだ。あの巨大な鉄の塊が飛ぶと考えるのは未だに信じられない。

まだISの方が空を飛ぶのは分かると言いたい位だ。

着陸の衝撃に備えて少し体を強張らせる。

『本機は着陸しましたが、完全に停止するまでお席はお立ちにならないようお願いします』

「あ、あれ？」

いつの間に着陸したんだろう？全然揺れを感じなかった。

「ははは、この機のパイロットは我が国でも最も腕のいい者を選出したからね。初めての人は驚くのも無理はない」

「はあ…あ…！」

隣からかけられた声に思わず生返事をしてしまった。

「す、すみません！」

「いやいや、そんな畏まらなくても大丈夫だよ」

正面にるのは付き添いで来てくれている黒いスーツ姿の男の人。政府のIS関連の第一人者さんだ。

名前は…あれ？覚えてない……あ、あとで名刺見て覚えておかなきゃ！

そうこうしている内に飛行機が完全に停止する。

シートベルトを外して席を立とうとすると、足が動かなかった。

「あれ？」

どうしたんだろう？

「あー、離陸してからずっと足を動かさなかったでしょう。そのせいで筋肉が硬直しているんですよ。荷物などはこちらで運んでおきますので動けるようになったら出口までおいでください」

「あ、わざわざすみません」

「いえいえ、今時分はあなたのような女性のほうが珍しいですよ。では」

そう言いながら要人さんは出て行った。手で足を伸ばしつつ少し椅子を倒す。

「ん…」

あの人の言っていた通りみたい。感覚のなかった足が痺れてきている。

いくら緊張してたとはいえ恥ずかしいところ見せちゃったなあ。こういう時は政府専用機っていうのも他の人に見られなくていいかも…

先ほどあの人が言った言葉を思い出す。

ISは本にも書いてあったとおり、何故か『女性にしか反応しない』。

そして現行、世界最強の兵器はそのIS。つまり世界のパワーバランスはISの保有数とそれをより高い技術で操れる担い手、すなわち女性の数で決まる。

となれば必然的に女尊男卑が当たり前になってしまう。かつては女性に人権を認めず、あらゆる弾圧に屈しなかった宗教国家でさえ、宗教の根本から覆されるほど。

かつての男性優位の国家はISを保有していない国ぐらいだろう。

そしてそうなれば必然的に横行な女性も増える。自分の周りにはあまりいなかったが、それでも街のマーケットでは奴隷のように男性を使う女性を見かけたこともある。

必要とされているのはISを使える人であって一般の女性ではない。

関わっているから言えることだが、本来ISなど無い方がいいと思う。

ISはどこまで追求しても『兵器』だからだ。『兵器』とは敵となった目標を殺傷、破壊するために使う道具。つまりは人殺しの道具だ。

今はスポーツみたいに扱われているが、使い方を間違えればそれは簡単に人を殺傷する道具になる。

最も懸念されているのは第三次世界大戦……いや、『第一次IS大戦』だ。これはISが登場した10年前から頻繁に話題になる。

ならば本来こんなものは全世界的に排除して元に戻したほうがいい、というのが自分の考えだ。

でも作られたもの、更に言えば便利であるものを人は捨てることは出来ない。

さらに言えば、ISがあることで世界の技術力は飛躍的に上昇している。世界経済もISの開発、ということによって雇用を生み出し非常に安定している。

デメリットを消せないならせめて今あるメリットを享受するしかない。

なら自分は自分に出来ることを…

そう思っただけ結局私はISを使っている。

「偽善…だよな…」

自然と独り言がでてしまった。

足の痺れも取れてきた。

うん、これなら歩けるかな。

立ち上がると足はしっかり床を捉えてくれた。

CAさんに案内されて出口へ向かう。

外に出ると既に迎えのリムジン車の前にさっきの人が待っていてくれた。

階段を下りていくと気づいたみたいでこちらに手を振ってくる。

「すみません、お待たせしました！」

「いえいえ。さ、お手をどうぞ」

右手を取られて車へ案内される。車の中は広い。今は慣れているけど一年前は本当に落ち着かなかった。

それでも…うー、やっぱり慣れないなあ。小さい普通の乗用車のほうが温かみがあって好きなんだけど…

車が静かに音を立てて発進する。離陸前の説明では今から大使館へ向かい入国兼入学手続きを行うらしい。

そんなに時間はかからないらしいから日本を見学できるといいんだけどなあ…

「カスタ様、右手にIS学園が見えますよ」

運転手に促されて右を見ると海上の一つの島丸々使った巨大な施設が見えた。

あれが…IS学園…

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される日本の教育機関。

「大きい…」

漠然とした感想だけどそれが一番だ。対岸のここからでも把握できないほどの大きさがある。

「楽しみ…というより不安かも…」

あわわ…手が震えてきた！どうしよう！

0・0（後書き）

初めまして。作者のグニルと申します。

ユーザから入ってもらえれば分かるとおり、作者は『ネギま!』の二次創作もやっています。

この作品はその過程で息抜きで書いていたものなのですが、何故か原作第一巻分が出来てしまったので折角だから破棄するのももったいない。という作者の考えから投稿した作品です。

主人公のプロフィールは次回のがきに書きます。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

してもらえたら作者のテンションが『ヒヤッホイ!』しますw

こんな作者ですがよろしくお願いします orz

設定

名前、カルラ・カスト

性別、女

身長、155・6cm

容姿、長く淡い赤髪を右側でサイドテールにしている。瞳の色はオレンジ

体型は上からB76/W56/H75

趣味、節約、読書、銃器集め

詳細、

IS学園一年一組所属、オーストラリアの代表候補生。

本人は争いごとが嫌いなため一度代表候補になるのを拒否したが、考えを改め守るための兵器としてISを使うという条件で協力することを決意しジャクソン社に所属。IS学園に入るまで本国で試験パイロットとして基礎操作を学んでいた。

争いごとは嫌いなのだが銃器集めという変わった趣味を持っている。

集中力が高く、一つの物事に熱中するタイプ。そのせいで周りを見ていないこともシバシバ。集中してるところに話かけられると「ひゃい！」と言ってしまふ癖がある。（本人は「はい」と言ってるつもり）

普段は物静かなのだが、自分が大切に思っているものを傷つけられたり馬鹿にされるのが許せない性格で、そういう時は普段以上に感情をむき出しにする。

学校の寮で一人暮らしをしていたので料理の腕などは上手い。強気な人に非常に弱いため、織斑千冬はほぼ畏怖の象徴と化している。両親はどちらもジャクソン社員

オーストラリア

詳細、

保有ISは25機とかなり多い。内訳は22機が第2世代IS『デザート・ウルフ』、3機が第3世代試作型IS『デザート・ホーク』

理由として周囲が海に囲まれ進入が容易なことから防衛として多く配備されている。

これを認める代わりに国際IS委員会の取り決めにより、オーストラリアは南シナ海までの周辺諸国の海上警備、周辺諸国への一定状況下のISの貸し出しが義務付けられている。この取り決めにより含まれる国々は赤道に近いことから赤道連合と呼ばれている。

また、そのことによりオーストラリアだけが有利にならないように、オーストラリアのIS関連の企業には防衛している国々から一定人数以上技術者を雇い入れること、また国家IS代表者、代表候補生も他の国から選出することを義務付けている。（技術が見合わなければこの限りではない）

赤道連合への参加国

オーストラリア、インドネシア、マレーシア、フィリピン、パプアニューギニア、ニュージージーランド

ジャクソン社

詳細、

オーストラリアに存在するIS専門の国営企業。

基本的に赤道連合のISは全てこの企業に属していることになっている。

第2世代をほぼ自国の中で研究しつくし、現在は第3世代ISの実験開発の段階に入っている。

技術者、開発者、パイロットなど様々な人材を出身国、階級などで差別せず（半分以上条約によるものだが）、能力だけで判断する特異な体系を取っている。これにより他の国、企業よりも一般人に近い身分の人たちの割合が多い。その分様々なアイデアを取り入れてきたため他の国に見ない武装が多い。機体名と武装名の統一感がないのも様々な国家の人が関わっているからである。

一つのベースを作りそれを強化していくのが特徴。現在開発している第3世代IS『デザート・ホーク』も3形態まで強化装甲が考パッケージえられており、状況によっては型番後に『改』などをつけ、特殊兵装の実験配備を行っている。

IS

専用IS『デザート・ホーク・改』

詳細

オーストラリアのジャクソン社製第3世代型ISの試作改良版。

オーストラリア第2世代型IS『デザート・ウルフ』を基盤に機動性を重視。安定性と稼動効率に特化させられており、防衛任務に適している。また、試作機であるのに即実戦投入が可能に設計されている。

本領を發揮するのはパッケージを付けた際の極地戦闘。

パッケージ無しだと扱いとしては『デザート・ウルフ』の強化版、つまりはどんな状況でも対応できるマルチロール機であると思なされ、実験的にエネルギー兵器、ビーム兵器を搭載して入るが、他国からはあまり重要視されていない。

武装を量子化できるISとしては珍しく複数の武装を常備装備として採用してある。これは相手に高速切り替え戦闘を持ち込まれた際の対応策であり、基本は量子化された兵器を呼び出して戦う。

また、それらの常備装備は隠し武器的要素が強く作られており、一見すると装甲や装飾と見間違えられるように偽装され、あらゆる体勢からも攻撃が出来るように装着されている。

オーストラリアISの兵装

・18mm突撃銃『ラングリズニ』

命中率よりも連射力を重視し、面での制圧を主とする。セミオートとフルオートの使い分けが可能。

・24mm対空散弾銃『ラングニスト』

射程距離は短い分、射程内には多数の弾丸をばら撒く。ミサイルや弾丸の迎撃、近距離の敵への牽制などに使われる。

・70mmグレネードランチャー付22mmアサルトライフル『ゲリユ』

銃身下部に一発限りの高威力グレネードと22mm弾を採用。18mm突撃銃よりも一発の破壊力を重視しているため連射力や面性圧力は劣るが命中率と破壊力で勝る。

・10,5mm 回転式機関銃『フローキ』

オーストラリアの砂漠環境に適したミニガン。銃自体の重量が重く銃身が大きい。ため取り回しが悪いが、最も高い連射性を誇る。

・6連発回転式グレネードランチャー『フェンリス』

連続発射可能なグレネードランチャー。リボルバーを採用しているため連射力が高いが一回の戦いで6発が撃てる限度。

・46mm対装甲ライフル『グルファクス』

6連発回転式グレネードランチャーに次ぐ破壊力を持つライフル。反動が大きく連射は出来ないが高い威力と命中率を誇る。射程が最も長い。

・ヒートランス『ブリユナーク』

ジャクソン社が当初から採用しているIS近接戦闘の主武装。2m程の両手持ちの槍で本体は実体槍として機能する。

槍の先端から強烈な熱量を噴射することにより融解による貫通能力を持つ。

『デザート・ホーク』が開発されてからは柄の部分強化され、高速回転させることで弾丸、ビーム兵器を弾くことができる。

『デザート・ホーク』専用兵装

・両手首上部、10mm2連装ショットガン 『ドラウニプル』

両手を自由にするため手甲上部に仕込まれた小型のショットガン。口径が小さく、装填数は少数、射程距離は短いと使いどころが非常に難しい。

だが罅迫り合い時からの近距離射撃は非常に脅威。また、他の武

装とも共有が可能。

・両手首下部、仕込み鞭 『グレイプニエル』
本機最大の特殊武器で、手甲の下部に仕込まれている。使用者の意思で手甲から射出できる超弾性鋼の鞭。

柔軟性に富み、叩きつける以外に、相手の一部や武器を絡め取ったりそのまま自分に引き付けたりする事も出来る。

常人が気絶する程の高電圧を流し込むことが可能で、相手のシールドエネルギーを削り、IS操縦者にも直接ダメージを与えることが可能となっている。また、相手の武装にこの高電圧を流し込むことで武装自体を破壊することが出来る。

両手の武装との共存が可能で、この武装で相手の攻撃を止めつつ攻撃するという事も可能。

・両膝両足、仕込み短剣 『スレイヴニル』
両膝の前部、両足先端についている鋭い突起のような武装。端から見るとただの飾りだが、取り外しが可能。

それぞれ装甲内部には小型の実体短剣を備えており、膝は主に投擲し牽制に使用、足は蹴りの時に展開することが出来る。

・両肩部エネルギーブーメラン 『ヴェルフエルム』
実験的に装備されたエネルギー武装。普段は『スレイヴニル』と同じくただの飾りに見える。

一度投げれば機体と連動して確実に自分の元に戻ってくるため、相手の位置を誘導できれば相手の不意をついた攻撃を行うことが可能。

手に持ってナイフのように近接武器として扱うことも出来る。

・エネルギーソード 『レヴァテイン』

エネルギーブーメランと共に実験的に装備されたエネルギーソ

ド。

展開時は1m60cmの西洋剣のようになる近接武装。ブーメラ
ンと違い実体剣としても使用できる。エネルギー形成時には実体剣
の周囲にエネルギーが形成され、刃が赤くなる。

出力が高くエネルギー消費が激しいため、連続展開時間は1分。
再起動まで30秒かかるため使いどころは非常に難しい。非使用時
は腰部にマウントされていて呼び出す必要がない。

・左手、煙幕弾、ジャミング弾内臓複合盾『アイギウス』

絶対防御機能のついたISには珍しい大型の盾。盾内側に一回き
りとはいえ煙幕弾が装填されていて、不意をつくことが出来る。

また空中待機型の小型ジャミング兵器を合計3機打ち出すことが
でき、ISのハイパーセンサーを狂わすことも可能。ただしジャミ
ングが強力すぎるため範囲内にいると自身のハイパーセンサーも使
えなくなるため注意が必要。

煙幕弾と同時に使うことによつて相手から完全に身を隠すことが
できる。

設定（後書き）

前回の後書きで主人公のプロフを書くと言いましたが、まとめてやった方が作者としても読者としても理解しやすいと思いついて設定として上げました。

パッケージですがもう設定は決まっていますが登場毎に追加していきます
なのでお待ちください。

本編は今日中に上げます。

1 - 1 (前書き)

連続投稿2話目！

IS学園、一年一組

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶です」

あつという間に入学式を迎えた私の前には、黒板の前で小柄で胸の大きいメガネの女性、山田先生が自己紹介をしている。

やまだまや…上から読んでも下から読んでもやまだまや。この人の名前を聞いた人は絶対この印象を受けるはず。私だけじゃないよね!?

第一印象がこれなんだけどうしよう…でもやさしそうな先生かな?

「あ、あれ?え?」

こっちが反応しないことに戸惑ってるみたい…というよりみんな他のことに興味が有るといったほうが正しいと思う。

かく言う私もある無しに関わらず見ることになってしまう。

本来女性しか使えないIS、よってIS学園に通うのは必然的に女性になる。その中の異端。

受験時にISを偶然起動させ、世界で唯一ISを動かせる人にな

った男性。

全世界規模でお茶の間を騒がせた張本人。

名前は確か…織斑一夏…さん。

出席番号は名前順なので才の次は力。必然的に私の目の前に織斑さんの背中がある。

こういう時は自分の苗字を恨むしかない。

山田先生が必死に施設のことなどを説明しているけどやっぱり沈黙だ。なにか答えてあげたほうが良かったかな？

でも、恥ずかしいし…

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あ、涙目になっちゃった。やっぱり返事くらいすればよかったかも…
も…

ア行から始まるので自分の番はすぐだ。しかも織斑さんの後…うう、やりにくいよう

「では次は織斑君。お願いします」

あれ？織斑さんどうしたんだろう？

なにか考えてるのが俯いたまま返事がない。

「織斑君！織斑君！？」

「は、はい！？」

「あ、大声だしちゃってごめんなさい！でも…自己紹介、“あ”から始まって、今“お”なんだよね。自己紹介…してくれるかなあ？だめかなあ？」

うーん、山田先生は優しいというより私みたいに引込み思案なんでしょうか？それはそれで教師として問題があるような。

「えー…織斑一夏です、よろしくお願いします…」

うわ！皆の視線が痛い！

私に向いてるのじゃないって分かってるけど背中にヒシヒシと伝わってくるよ〜。

席替えてもらえないかなあ！？

簡単な自己紹介過ぎて皆が次の言葉を期待してるのがすごい分かる。

織斑さんもその空気を感じ取ったみたいで深呼吸をすると…

「……以上です！」

ガタガタガタっ！という音と共にクラスの大半が椅子から転げ落ちた。

私はというとポカーンとしてしまったのだが……でもみんなの反応も分からないこともない。なにか言うのかと思ったから当然といえば当然だよな。

と思つたらいつの間に教室に入ってきたのか、黒いスーツ、タイトスカート、長身で鋭い吊り目の女性が立っていた。

その女性が手の出席簿を振り上げて……周りを気にしている織斑さんの頭に振り下ろした。

風を切る音共に振り下ろされた出席簿が気味のいい音を立て、それと共に織斑さんがうずくまる。恐る恐る振り返った織斑さんが声を上げた。

「……ってげえ！関羽！？」

あ、また叩かれた……痛そう……いや、最早痛みを通り越してその出席簿の振り下ろす速度に感心してしまいました。

で、織斑さん。なぜそこで三国志の英雄の名前が出てくるんですよ？

「誰が三国志の英雄か、バカものが」

「織斑先生、会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「いえ、副担任としてこれくらいはしないと」

その女性は軽く山田先生と会話を交わすと黒板の前に立った。

ん、あれ？そういえば織斑って、同じ苗字？

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。だから私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は若干15歳から16歳までを鍛えることだ。だから逆らっても良いが、私の言う事だけは聞け、いいな」

そう言った瞬間教室が割れるような嬌声に包まれた。思わず耳を塞いでしまう。

「キヤーーーーー！！ 千冬様！ 本物の千冬様よ！！」

「私、ずっとファンでした！！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に入学したんです！ 北九州から！！」

「お姉さま！オランダに移住して結婚してください！」

「私、お姉さまの為なら死ねます!!」

ああ！そうか、この人が！

織斑千冬さん。

モンド・グロッシン

第一回IS世界大会の総合優勝および格闘部門優勝者。その実力から『ブリュンヒルデ』と呼ばれる事実上最強のIS操縦者。

非公認だけどあの『白騎士事件』の当事者というのがもっぱらの噂だ。

確かにIS学園で教師をしているというのは聞いていたけどまさか担任がその本人だなんて…

「毎年、よくもまあこんな馬鹿者共が集まるものだ。私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生がそう呟くけど…多分どこも同じなんじゃないでしょうか？世界中でファンクラブがあるみたいですし。

「…で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は…っ」

織斑先生の手によって織斑さんが机に叩きつけられた……分
かりづらいから今から織斑さんは一夏さんと呼ぼう。

もちろん面と向かつては恥ずかしいから言えないけど。

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「…はい、織斑先生」

苗字が同じでこれだけ親しいということは恐らく、いや十中八九実の姉弟なのだろう。周りもその関係に気づいたようでヒソヒソと声が聞こえる。

織斑先生が机を叩いただけでそれを沈めた。

「時間も無いことだし次の者、自己紹介を」

「は、はい！」

立ち上がるると同時にちよつと足を打った…うう、皆には気づかれてないみたいだけど、痛い…

「か、カルラ・カストです。オーストラリアから来ました。若輩ながら代表候補をやらせてもらっています。これから1年間、よろしくお願いします」

「ほう、お前がオーストラリアの代表候補生か。確か、元は一般の女子学生ということだったが」

「あ、はい」

「またも周りがざわつくのを感じた。うう、今度は私への視線が痛い…」

「人から注目されるのは苦手なのに…ああ、なんか緊張してきた！」

「元が一般人であろうと私は容赦しないからそのつもりでいる。いいな」

「…はいい…」

「返事はしっかり！」

「ひ…は、はい！」

「うむ、では次の者」

「うう、これでは注目されてるのも一緒ですけど…」

「…え？私以外にも代表候補生がいるんですか？しかもイギリス？ほっ、どうやら私だけが注目されるという自体は避けれそうですね。」

「それにそもそもこのクラスには一夏さんがいるんですから私より目立つのは確実ですね。」

「自己紹介が全員終わったら授業の前の小休憩。それから授業だ。」

「さあ、いつまで騒いでいる！ S H Rは終わりだ。諸君等にはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか？ いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。以上だ」

鬼教官という言葉が頭に浮かんだのは私だけではないはずだ。

それでも周りのクラスメイトたちは阿鼻叫喚になっているけど…

こんなので一年間大丈夫かなあ…

1 - 1 (後書き)

というわけで本編第一話。一夏との会合でした。

前書きで書いている通り、原作1巻分までは出来ているので10話前後まで連続投稿します。

内容で言うと鈴が出てきてゴレム倒す辺りまでですね。

それ以降はまた2巻分が出来たら連続投稿、という形をとりたいと思います。よろしくお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1 - 2 (前書き)

連続投稿3話目!

この学校は珍しく入学初日から授業がある。織斑先生だったら全寮制なので気にしないでもいいって言われそう。

一時間目はほとんど入学時に貰った参考書に書いてあったことだつたしあまり聞いてなくても・・・

とと、織斑先生がいるんだ。ばれたらさっきのツール・ハンマー（命名私）が私の頭にも振り下ろされかねない。集中しなくては！

「先生」

「はい、織斑君」

「ほとんど全然分かりません」

ほえ？

自分の正面から聞こえた声に思わず顔を上げてしまう。

それは山田先生も同じだったみたいで何を言っているか理解できないみたいでした。確かに男性はISに関係ないので私たち女性と違ってそもそも基礎知識から違うのは分かるのですが、今やっているのは入学前に配られた必読の参考書に載っている基礎の内容のほ
ず。

一夏さんも貰っているはずなので分からないはずはないのですが・・・？

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「あの分厚いやつですか？」

「そつだ、必読と書いてあつたら」

「いや、あの……」

もしかして……

「電話帳と間違えて捨てました」

あ、やっぱり……私も最初は電話帳かと思ったもんなあ。面白かったからすぐ読んじゃったけど。

うわ！出席簿で横類を殴られた！バシーンっていったバシーンって！

「表紙に必読と書かれてあつただろうが馬鹿者！後で再発行してもらうから、一週間以内に覚えろ、いいな？」

「い、いや……一週間であの厚さはちょっと……」

「……やねと言っている」

「・・・・・・・・はい、やります」

鋭い眼光でにらまれて一夏さんが頷いた。

というよりそれ以外の返事は許さないという目だ。あれでもう一回でも反抗したらおそろくあのツール・ハンマーが振り下ろされるのだろう。

あれは弟だからなのだろうか、それとも他の人にもあんな風にやるのだろうか。

もしあの人の前でへまをしたらああなっちゃうんだらうか・・・

あわわわわわわわ・・・

「カストさん？」

「・・・・・・・・」

「カストさん！」

気づくと山田先生に呼びかけられていた。

「ひ、ひゃい！」

「大丈夫？何か顔が青いみたいだけど」

「だ、大丈夫です！問題ありません！」

「そつ？ならいいけど」

いけないいけない。また悪い癖が出てたみたい。気をつけないと。

休み時間

教室の外には一夏さん目当てに他のクラスからすごい数の人が押しかけている。まるで客寄せパンダだ。

お手洗いに行くため廊下に出るのも一苦労してしまう。

かく言う私もさつきまで自分の席から離れてわざわざ遠巻きに見ているんだからその中の一人に変わりは無いんだけど・・・

一夏さんがパンダの気ぐるみを着て机に座っているのを想像してしまった・・・ふふ、なんだか可愛いかも。

授業開始ギリギリに教室に戻ると一夏さんと金髪のクラスメイト、確かイギリス代表候補生の（自己紹介のときそこだけすごい強調してた）セシリア・オルコットさん、だったよね。

その二人が何か言い合いをしていた。

言い合いというかオルコットさんが何か一方的に怒ってるように見えただけ。

その時休み時間を終えるチャイムが鳴り響いた。

「くう！話の続きはまた改めて！お逃げにならないように！」

「逃げるってなんでそんな必要があるんだよ」

なんの話をしていたか気になるけど・・・でも一夏さんに直接聞くのも恥ずかしいし・・・

「はい、皆さん。授業を始めますから席についてください」

そんなことを考えていると山田先生が入ってきた。そういえば一夏さんってさっきの休み時間にも篠ノ之さんにも話しかけられてたなあ。

っと、織斑先生が入ってきた。集中しないと！

今回の授業は織斑先生が担当みたいでそのまま教壇の上上がる。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

そこまで言っただ織斑先生が思い出したように切り出した。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦と代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席：まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事が無い限り一年間変更はないからそのつもりで」

なるほど、つまり委員長のような存在というわけですか。これは私が出る幕ではなさそうですね。というよりも・・・

「はい！織斑くんを推薦します！」

「あ、私もそれがいいと思います！」

「私も織斑くんで！」

「お、俺！？」

必然的にこうなるのが分かってるのでそこまで焦る必要はないと
いっかなんというか・・・

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっと待った！俺はそんなのやらな・・・」

「自薦他薦問わないといった。他薦されたものに拒否権などない選ばれた以上は覚悟しろ」

有無を言わせずとは正にこのところだろう。

まあでも流石にこれで一夏さんも諦め・・・

「だ、だったら俺なんかより相応しい奴がいるだろ・・・えっと・・・カストさんとか」

「え・・・」

一瞬思考が停止した。

え？一夏さんは今なんていいました？すみません思考が全く追いつかないので誰か説明をお願いします。

「ふむ、では織斑とカストで投票ということでもいいな？」

はい！織斑先生簡潔かつ明快な答えをありがとうございます！

「あの・・・拒否権って・・・」

「当然なしだ」

「ですよー。織斑先生にまったく表情を崩さずに言い切られました。」

「こ、これが切り捨て御免というやつなのですか。日本人はもつと遠まわしに物事を言う人たちだと聞いていたのですが。織斑先生に常識は通用しないみたいです。」

「あ……なんかごめん……そこまで嫌だったなんて」

「ぐすつ……いいんです、諦めました……」

涙が出そうになってしまいましたが相手が推薦されている以上推薦し返すというささやかな仕返しさえできない。それに多分選ばれるのは一夏さんでしょう。

「よし、ではこの二人で……」

「納得いきませんわ!」

バン!という音と共に聞いた声が教室に響いた。振り返るとオルコットさんが怒りに肩を震わせて立ち上がっている。

「そのような選出は認められません! 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ! このセシリア・オルコットにそのような屈辱を

一年間味わえと仰るのですか!？」

屈辱って・・・そこまで言うほどのものでもないと思うのは私だけでしょうか？

いいえ、推薦されている以上他の人は一夏さんでいいと思っています。はずですのでオルコットさんだけだと思います。

ちなみに私も一夏さんでいいと思っています。

「第一！文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと事態、私には耐え難い苦痛で・・・っ!!！」

「イギリスだつて大したお国自慢無いだろ。世界一不味い料理一位、何年覇者だよ」

一夏さんが言い返した言葉にクラスの何人かが軽く頷いている。まあ・・・私も前にイギリスに行ったことがあります。があれは確かに・・・

それからオルコットさん。日本はイギリスと比べても経済国として有名ですし、何と言ってもISを作った国ですから文化後進国は間違っていると思います。

「な！貴方私の祖国を侮辱しますの!？」

さらに言えば先に日本を侮辱したのはオルコットさんなんですよ。ね。

「それと！カストさん！」

「ひゃい！」

な、何なに！？いきなり話を振らないでください！

「貴方も代表候補生ということですけど、クラスの代表者は一番強い人になるべきだと思います？」

「は、はあ・・・そうですね」

まあ、それは確かにそうですね。

「それに加えて！元々わが国の支配下にあつた国の人より私のほうが下と思われること事態がこれ以上ない屈辱ですわ！」

ブツン・・・

自分の中で何かが切れる音がした。

「で？結局何が言いたいんですか？」

「決闘ですわ！この中で誰が一番強いのか、その身に分かせて差し上げます！」

「流石イギリス。気に入らないことがあれば争いごとで決めるのは昔から変わらないんですね」

「な、なんですって！」

「それに所構わず怒鳴り散らすのがイギリス淑女の嗜みなんですか？お国柄を疑う淑女のあり方ですね。あなたの言う元々支配国の私の国のほうがまだマシですよ？」

オルコットさんの顔が真っ赤になっている。いい気味だ。
故郷を侮辱するような人に容赦する理由はどこにもありません。

「いい加減にせんか馬鹿どもが！」

ダァン！

「ひい！」

教室中に響き渡るほどの勢いで織斑先生が教団を叩いた。

「二人とも口は十分回るようだが、どちらも代表候補ならばISで

決着をつけてみる」

「わ、分かりました」

「り、了解ですわ」

その有無を言わせない気迫にオルコットさん共々頷くしかありません。

「それでは一週間後の月曜日、第3アリーナで模擬線行う。カスト、オルコットが先に戦い、勝ったほうと織斑と戦い、そこで勝ったものがクラス代表だ。三人はそれぞれ準備をしておくように。織斑も、それでいいな？」

「え？それってどっちは連戦するってこと・・・ですか？」

織斑先生の言葉に一夏さんが慌てて口調を改める。どうやらまた叩かれるといったことは防げたみたいです。

「仮にも二人とも代表候補生だ。連戦ハンデ無しで丁度いいくらいだろう？」

「分かりましたわ」

「私もそれで構いません」

「よし、ではこの話は終わりだ。授業を始めるぞ」

そう言って織斑先生が締めくくった。とりあえず勝負は来週の月曜日。週末に調整が出来ればいいんですけど。

私は無意識の内に首から下げられてた指輪を服の上から弄っていた。

1 - 2 (後書き)

『デザート・ホーク』の待機状態は金の指輪。カルラは鎖に通して首に掛けて、胸元にしまっています。

というわけで連投3回目。カルラの静かなる激昂を描きました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。

1 - 3 (前書き)

連続投稿4話目!

「えつと、1024・・・1024・・・あ、ここだ」

夕食が終了し、私は今割り当てられた部屋を見つけて扉に手をかけた。

「あ、あれ？」

鍵がかかっている。どうやら相室の人はまだ戻ってきてないみたいだ。食堂に最後までいたのは私だったんだけど・・・貰っている鍵を使って中に入る。電気をつけて中を確認するとまだ相手の荷物さえない・・・荷物は入学前に運び込まれてるはずなんだけど？

「もしかして・・・」

寮の部屋割り名簿を確認する。思ったとおり・・・ここではあまり思い通りにならないで欲しかったんだけど・・・相室はいないという決定的な事実がそこには記されていた。

「そ、そんなぁ・・・」

せつかく友達を作れるチャンスだと思ったのに……
相室がないなら一夏さんが一番いいんじゃないの〜！

いや、まあオルコットさんと一緒よりは全然いいんだけどね。

ベッドの上でそうしてゴロゴロ悶絶していたが今更決まったことを嘆いても仕方ない！

こうなったらクラスで友達を！

バキイ！

「ひい！ごめんなさい！」

思わず謝ってしまった……こういう時は同室がいなくて良かったかも……

音源は隣の1025かららしい。なにかの破壊音と喧騒が聞こえてくる。

初日から喧嘩でもしてるんだらうか？

興味本位で扉を開けて外を確認すると既に人だかりが出来ていた。

人だかりの中心は隣の部屋の入り口。一夏さんがいた。

どうやら隣の部屋は一夏さんの部屋みたいだ。でも中に誰かいるみたいだ。女の子と同室になってしまったのだろうか？

みんな既に部屋着やパジャマなどラフな格好でいる。私にはあそこまで恥ずかしげなく男性の前に出ることは出来ない・・・と思う。

ふっと、入り口を開けている私と目が合った。

え？え？何でこっちに走ってくるの！？

必死の表情で迫ってくるので思わずドアを閉めようとして・・・閉まりきる前に取っ手を掴まれた！

「ひい！」

「ごめん！匿ってくれ！」

「え？ええ！？」

「お願いします。このままじゃいろいろまずいので頼む！いや、頼みます！」

「う、うん。構わないけど」

「助かった！ありがとう！」

必死の懇願に思わずうんと答えていた。一夏さんを中心に扉の鍵をかける。

「えっと・・・カストさん、だったよね？」

「え、はい。そうですけど」

「良かった。無理言っ入れてもらって名前まで間違ってたらどうしようかと思ったよ」

息を整えている一夏さんがそう言う。

そういえば・・・思わず入れちゃったけど若い男女が密室で二人つきりって言うのは非常にまずい気がしてきた・・・

「と、ととと・・・とりあえず織斑さん、何か飲みますか？」

「へ？ああ、いいよ。ほとぼりが冷めたらすぐに出て行くから・・・」

「いえ！招いた客人をもてなしもせず返したとあっては両親の教えに反します！ぜひ！」

「そ、そうなのか？じゃあお願いしようかな」

自分の気持ちを落ち着けるために半ば強引に進めてしまった・・・
両親の教えというのは本当なただけどこっちのほづが怒られそうな

・
・

とりあえず椅子を進めてから荷解きもしていないダンボールの中からコップを二人分取り出して他のダンボールから飲み物を取り出す。

やっぱり最初に飲んでもらうなら『ヌーディー』かな？あれなら誰でも好きになれる味だと思う。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

「いいえ」

座ってる一夏さんにコップを渡して反応を待つ。実は他の国の人に物を勧めるのは初めてだったりするわけで……

「お……」

「お、美味しいくなかったですか？」

「いや、逆だよ！これ美味しいなあ！」

「そうですか？良かったですあ」

「うん、不思議な触感がするけど。これフルーツ？」

「はい、これは柑橘系のフルーツを使ったものです。国では『ヌーディー』と言って結構有名なんですよ？他の果物のも飲んでみます

か？」

「いいのか!？」

「はい、むしろ飲んでください」

かれこれ一時間は『ヌーディー』の話で盛り上がっていただろうか。と言ってもほとんど私が故郷の話を交えながら勝手に話していただけのような気がしますが……

気がつくとはほ全てのボトルの蓋を開けて試飲させてしまいました。

「あ……す、すみません!」

「へ?どうしたの?」

「こ、こんな無理やりいっぱい。織斑さんに迷惑でしたよね」

「ああ、そんなことか。むしろご馳走になっちゃって悪いって思ってたくらいなんだ」

「そ、そうですか?ならいいんですけど……」

「迷惑なら迷惑って俺はちゃんと言うからさ。気にしなくてもいいよ」

一夏さんはそう言って笑ってくれた。いい人なのかな……織斑

先生とは大分違うタイプみたい。

「あ、そういえばさあ」

「はい？」

思い出したように織斑さんが尋ねてきた。

「カストさんもえっと・・・代表候補生なんだよな？」

「え、ええ。そうですね。それがなにか？」

「いや、あのセシリアって奴と大分感じが違うというか・・・エリートって感じじゃないなあって」

「ああ、そう言うことですか。確かにほとんどがエリートと言える人たちでしょうね。むしろ私みたいな人のほうが特例です」

「カストさんもセシリアみたいな貴族とかどっかの社長の令嬢とか？」

「いえ、生まれは一般家庭でどこでもいるような普通の学校に通ってましたよ。私の場合は両親がIS開発に携わってるんですが、その関係で。なのでこれと言って特異なものがあるわけではありません。そんな私に専用機まで用意してくれるんですから両親と国の人たちには本当に感謝してます」

「ふうん」

この顔・・・専用機って分かってませんね。

「織斑さん、教科書の6ページを読んでおくことをお勧めします」

「へ？なんでさ？」

「専用機って言葉の意味、わからなかったでしょう？」

「あ・・・バレた？」

「当然です」

普通なら専用機持ちはISを使うものにとっての憧れ。それをあんな風に流すんですからそれはバレて当然でしょう。

そこで話が途切れたので外の様子を見るために鍵を開けて廊下に顔を出す。どうやら皆さん部屋に戻ったようだ。

「織斑さん、もう大丈夫みたいですよ」

「そっか、本当ありがとうな。カストさん」

「いえ、織斑さんは唯一ISを使える男性ですし・・・皆さんの興味を引くのも仕方ないことかと」

「あゝ、そのさ、織斑さんってやめてもらえないかなあ？」

「へ？」

「ほら、千冬姉がいるだろ？そのせいで苗字で呼ばれるとなんかむず痒くってさあ」

確かにそうかもしれない。けど……

「でもいきなり名前で呼ぶのも……」

「んー、俺は構わないんだけど……お！じゃあさ、友達なら名前で呼んでも大丈夫だよな」

「はい？」

そんなさもないアイデアを思いついたように言われても！

「あれ？迷惑だったか？それならいいんだけど……」

「いえいえいえ！そんな私なんか……むしろもったいないって思っくらいで！」

「じゃあ俺とカルラさんは今から友達ってことで、おっけー？」

「は、はい。おっけー・・・です」

そう言っで一夏さんが手を差し伸べてきた。

「よろしくお願いします、おり・・・一夏さん」

「うん、よろしく。カルラ！」

「カル・・・！」

ま、まさかいきなり名前を呼び捨てにしてくるなんて！せめてそこは『さん』づけとかじゃないんですか・・・

「あれ？カルラ、顔が真っ赤だけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫れす！また人が来る前に早く戻ったほうが！」

「あ、ああ。じゃあカルラ。明日からよろしくな」

そう言っで一夏さんは部屋に戻って行った。

日本の男性というのはあそこまで大胆なものなのでしょうか？一夏さんが特別なのでしょうか？

と、とりあえず疲れました・・・今日はもう寝ましょう

『よくもまあオメオメと戻ってこれたものだな!』

『ま、まだ怒ってたのか!』

隣の部屋から叫びが聞こえますが・・・

幻聴です。幻聴なんです。これは余程疲れているのでしょう。早くシャワーを浴びて寝なくては明日に支障がでますね。

『成敗してくれる!』

『た、助けてくれー!!!!!!!』

「こういう時は日本語でなんて言うんですたっけ?」ご愁傷様です、で合っていましたっけ?

1 - 3 (後書き)

カルラの部屋には後々誰か入ります。

はい、連投4回目。クラス代表決定戦は話数的にちょうど今週末くらいになりそうです。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております。
それではまた次回 ノシ

1 - 4 (前書き)

連続投稿5話目!

IS学園、食堂午前8時

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いやあ！この朝食は美味しいな二人とも！」

ど、どうして一夏さんはこの空気ここまで食が進むのでしょうか！？

状況を整理しましょう・・・私は今朝食をとるために食堂へ来た。ここまでいいです。

そこで一夏さんに会った。これも皆さん食堂を使うのでありえないことではないです。

でも・・・そこで「朝食一緒に食おうぜ！」なんて誘われるのは計算外です！

しかも一緒にいた篠ノ之さんが、その瞬間敵を見るような目つきでこっちを睨んできてさつきからずっとこの調子です！

これはもう恋ですね！恋なんですね！？篠ノ之さんは一夏さんにLoveしてるんですね！？

初対面の私でも分かるそれを一夏さんは全然気づいていないよう

です。

確か日本の漫画で読みました。こういう人は朴念仁とか鈍感男とか言っんですよね？

「ん？カルラどうした？箸が止まってるけど？」

「あ、あまり食欲が無くて・・・」

もう一瞬でも早くこの場を離れて教室に行きたいんですけど・・・

「ダメだぞ、朝はちゃんと摂らないとばてちゃうじゃないか。ほら、これなんて美味しいぞ！」

「ええ！？」

なんとということでしょうか！あろうことがこの人は自分の鮭の切り身を進めてきたのです！

いえ、それは問題じゃなくて、切り身を箸で挟んでこちらに差し出してきました！

これは世間一般で言う「はい、あーん」というものなのですか！？

ひい！

篠ノ之さんが視線で人が殺せたらって言うほどの目つきになって

ます！

！？
多分その目線は心臓病を患ってる人か老人は殺せると思いますがよ

「だ、大丈夫です！お気になさらず」

「大丈夫じゃないって。IS学園に入って最初の友達が体調崩すよ
うなことしたら放っておけないだろ」

「………一晩でずいぶん仲が良くなったものだな……」
夏

今日初めて篠ノ之さんの声を聞きました…
でもなんででしょう……全く助け舟の気がしません。

そのまま一夏さんが篠ノ之さんを妙な言い争いを始めたので一夏
さんの注意が反れました。
今のうちに自分の朝食を摂ってしましましょう。

「あ、あれ？もう食ったのか？」

「は、はい！では私は準備をするのでまた後で！」

「あ、ああ。後でな」

顔が熱い……きつと今私の顔は茹でた蛸のように真っ赤に違い

ない。

足早に食堂を出る際に「もったいない・・・」とか「私がして欲しかった〜」とか聞こえましたが無関係なのです！男性耐性なんてないんですよ！

きつと自分の番になったら私みたいになるに決まっています！

食堂を出た途端後ろから織斑先生の声が聞こえてきました。なんでも織斑先生は一年生の寮長とか。

それを直接聞かないでホツとしている自分がいる。どうやら織斑先生への苦手意識がはやくもついてしまっているみたいだ。

本当・・・これから大丈夫なんだろうか

その日からは通常授業。今日はずっと座学です。

既に一夏さんは2時間目までの授業内容で頭がパンクしているみたいで、今にも煙が出るんじゃないかって言うくらい唸ってますけど・・・

それでいて休み時間には他の生徒の質問攻め。心休まる暇が無いとは正にこのことでしょう。

織斑先生が3時間目の授業直前に来て一夏さんに話しかけました。この人が来るだけで教室の空気がまったく変わるんですよ。さすがと言っべきでしょうか。

「織斑、お前のISだが準備に時間がかかるぞ」

「へ？」

「予備の機体がない。だから少し待て。学園側から専用機を用意する事になった」

「専用機？」

「専用機！？一年のこの時期に！？」

「それって政府から支援が出るって事でしょ！？」

「すごい…私も早く専用機ほしいなあ」

織斑先生の言葉に教室中がざわめく。当の一夏さんは頭の中から情報を引っ張り出そうとしているようで頭を捻っている。

「専用機って・・・昨日言ってたあれだよな？国家の代表やカルラみたいな代表候補生とかが専用で使えるISのこと」

確認するように一夏さんが振り返って聞いてきた。

「はい。正確には主に国家代表操縦者、または代表候補生や企業に所属する人間に与えられるISのことです。ISは現在467機し

が存在しないので、専用機を持っているということはそれだけで特別な存在、というわけですね」

「467?それだけ?」

「作った篠ノ之東博士以外はコアがブラックボックスになっていて他の人には作れないんです。ですから現状存在するISは467だけです」

「あー、そういえばそんなこと書いてあった気が・・・」

昨日の夜少し専用機の話をしたただけだけどそれが良かったのかも
しない。

そういえば数の話はしなかったと思い出した。

そんなことを思っていると織斑先生が話を切った。

「今カストのいった通り、IS専用機は国家、企業に所属するものしか与えられない。が、お前の場合状況が状況だ。だからデータ収集を目的として専用機が用意される。理解できたか?」

「な、なんとなく・・・」

「よし、ではこれで話は終わりだ。山田先生、授業を」

「は、はい。それでは皆さん、テキストの12ページを・・・」

「安心しましたわ！」

授業が終わったのも束の間、いつの間に来たのかオルコットさんが一夏さんの目の前で仁王立ちしていた。

「クラス代表の決定戦！私とあなたでは勝負は見えていますけど、流石に私が専用機、あなたが訓練機ではフェアではありませんものね！」

「もう勝った気でいるんですね」

「当たり前ですわ！あなたも代表候補生で専用機持ちといいますが、私があるときに負けるはずがありませんもの！」

とことん人を挑発するのが好きな人だ。

「そんなの分からないじゃないか。カルラが勝つ可能性もある」

「それこそありませんわ。期待するだけはしてもいいかもしれませんが、せんけど無駄になりますわよ？」

この良く分からない自信は一体どこから出てくるんでしょう？
まあどの道結果が全てです。両親からも教えられましたけど正式な
場以外での乱闘騒ぎは先に手を出したほうの負け。なら本番で見返
してあげればいいだけです。

「そうなのか？ 篤」

そしてどうして篠ノ之さんに話を振るんでしょう？ 確かに男の一
夏さんよりは詳しいと思いますけど。

「私に振るな」

なんとというか、「寄らば切る！」みたいな感じですね。朝からず
っとこうですけど……

「そういえばあなた、あの篠ノ之博士の妹だそうですね？」

「妹というだけだ。それ以外の何者でもない」

オルコットさんがそのことについて言うと篠ノ之さんが凄みのあ
る声で答えた。

珍しい苗字ですしまさかと思ってましたけど……

でも篠ノ之さんは篠ノ之さんなりに天才の妹、ということでも苦労してきたんでしょう。

その顔は「その話をするな!」と言っている。

「ま、まあ?どっちにしてもクラス代表はこの私以外はありえないんですけど?」

気迫に押されて最初キョドりましたね。

「相変わらず口が回るようだが、いつまで教壇の前で仁王立ちしているつもりだ馬鹿者が」

バシィ!

「いた!」

いつの間に教室に来ていたのか、織斑先生の出席簿がオルコットさんの頭に振り下ろされた。

「うっ……ま、まだチャイムは鳴って」

キーンコーンカーンコーン

「あ……」

「何か文句があるのか？」

「も、申し訳ありません」

頭を抱えながらオルコットさんが席に戻っていく。この人には生勝てないと改めて思いました……

チャイムが鳴ったすぐ後に山田先生が入ってきましたが……

「あ、あれ？織斑先生？私より後に職員室を出たはずじゃあ……」

「何を言ってるんだ山田先生。熱でもあるのか？」

「あれ？あれ……？」

勝てる勝てない以前にこの人本当に人間なんでしょうか……？

1 - 4 (後書き)

11月になりましたね。

というわけで(どういうわけ!?) 連投5回目です。今日読み返してみたんですけど展開遅いですか? 遅いようなら2部からはもう少し展開を早くしてみようと思いますけど・・・

文章的にはこのくらいが読みやすくて丁度いいと自分では思うんですけどね。ネギまの方ではずっと長文だったので勝手が分からないと言っのが本音です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております! よろしくお願いします!

1 - 5 (前書き)

連続投稿6話目!

「ねえ、カストさんも専用機もってるんだよね？」

「は、はい。一応」

「オーストラリアの専用機かー。やっぱり『デザート・ウルフ』？」

「いえ、一応実験中の第3世代『デザート・ホーク』を・・・」

「第3世代!？」

「すっごーい!オーストラリアってあんまり有名じゃないと思ってたけど、もうそこまで行ってるんだ!」

今は授業が終わってお昼の食堂。私が昼食を取っているとクラスの色々な人たちが話しかけてきた。

皆さんやっぱり気になっていたみたいで、今日の騒ぎで一気に話を聞きに来たみたいです。

それはいいんですけど・・・食べる時間がなくなりそうな勢いです。

「おーい、カルラ!」

「あ、織斑君だ!」

私の周りの人たちが一斉に振り返った。私も声のほうを見ると、一夏さんと篠ノ之さんがトレーを持って立っていた。

「あつちで一緒に飯食わないか？少し話したいこともあるし」

「あ、はい。いいですよ。皆さんすいません。話はまた今度で」

「うんうん、行って来な！」

「はあ、いいなあ。私も一緒に食べたい！」

「我慢我慢、まだまだこれからよ！」

トレーを持って奥のテーブル席に移動する。篠ノ之は相変わらずの仏頂面だ。確かに朝と同じで食べにくいけど・・・朝よりはマシかな。マシだと思う。マシだと信じたい・・・

しばらくは特に大した会話も無く3人で昼食を食べていた。もうすぐ食べ終わるという段階になって一夏さんが口を開いた。

「箸、カルラ」

「なんだ」

「はい？」

「俺にISのことを教えてくれないか？来週の勝負、このままじゃ

何も出来ないまま負けそうだ」

篠ノ之さんはあの篠ノ之博士の実の妹。その関係で一緒に誘っているでしょう。でもこの話し方だとそれ以前からの知り合いのようですけど。

「でもそれなら篠ノ之さんだけで十分ではないですか？あの東博士の妹さんならば尚更私なんかより・・・」

「私はあの人ではない。それに、それは一夏の自業自得だ。あんな分かりやすい挑発に乗った罰だ」

やっぱり天才の妹、と思われるのはこの人にとっては苦痛みたいだ。あまりこの話題を出すのはやめておこう。

「でも筈はこうしてIS学園に入ってるし、カルラも代表候補生なんだろ？だったらどっちが強いとかは置いておいて、少しでも経験のある奴から教えてほしいんだ」

「で、でも私と一夏さんはひょっとしたら戦うかもしれないんですよ？それなのに私に頼むなんて・・・もしかしたら私が貴方に不利になるようなISの操縦方法を教えるとか考えなんですか？」

「いや、それはないだろ。カルラなら」

ああ、もう！この人は何でつい昨日友達になった人にここまで断言できるんでしょう？

それに相変わらず篠ノ之さんの好意に気づいていないのも問題です。

話を聞いてるだけでも一夏さんと篠ノ之さんは昔からの間柄の様なのに・・・

「篝、どうした？」

「なんでもない！」

「な、なんで怒ってるんだよ？俺何かしたか？」

「何でもないと言っている」

「嘘付け、顔が怒ってるじゃないか」

「この顔は生まれつきだ」

そう言っつて篠ノ之さんが残りのご飯を一気に掻き込んだ。

ああ！そんなことしたら！

「むぐー！」

ああ、やっぱり。案の定喉につまらせたようです。

「だ、大丈夫ですか!？」

私が背中を摩りながら水を手渡すと、篠ノ之さんが一気にそれを飲み干す。

「す、すまない。迷惑をかけた」

「いいえ、篠ノ之さんこそ大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない」

「なにやってんだか」

「ねえ、君って噂の男の子でしょ？代表候補生と喧嘩するってことになった」

急に話かけられて3人の視線がそちらに向く。帯の色が3年生の赤色だ。ということはこの人は3年生ということですか。

「良かったら、私が教えてあげ・・・」

「結構です、私が教えることになっていきますので」

篠ノ之さんがその人が言い終わる前にその人に言い放った。

「あなたも1年生でしょ？私は3年生。私のほうが上手く教えられると思うけど？」

「私は・・・篠ノ之東の妹ですから」

言うときに少し苦そうな顔をして言っていた。篠ノ之東の妹、という位置づけは相当苦労しているらしい。姉の名前を嫌がりながらも使うほど一夏さんのことが好きなのだろう。

「ですので結構です」

「そ、そう。それなら仕方ないわね・・・」

その3年生は渋々ながらに元の席に戻っていった。

「教えて・・・くれるのか・・・？」

「放課後に剣道場に来い」

「そっか！サンキュー！！」

「ふ、ふん！！」

うん、私の出る出番は無さそう。これなら篠ノ之さんの思いに
夏さんも・・・

—夏さんにはれないように篠ノ之さんに耳打ちをする。

「良かったですね。頑張ってください篠ノ之さん」

「な！わ、分かるのか？」

「それはもう」

「そ、そうか。ありがとう・・・それからカスト。その・・・苗字
で呼ぶのは止めてくれ。私は篝という名前がある」

「あ、分かりました。では篝さんと。私もカルラでいいですよ」

「む、そうか。ではそう呼ぶとしよう」

やっぱり篠ノ・・・篝さんは一夏さんが関わらなければいい人の
ようだ。初めてこの人の素の笑顔を見た気がする。

放課後の剣道場

「どつしてこうなったんでしょう・・・」

「どつしてこうなっているんだ・・・」

私と箒さんがほぼ同時にそう呟いた。

事の発端は授業が終わって直ぐ。二人が剣道場に行くのを見守っている一夏さんに私も一緒に来てくれと強制連行されました。以上。

「だから、カルラにも教えて欲しいんだって言ったろ？」

「諦める、あいつは言い出したことは曲げない。多分カルラが頷くまでこんな感じだぞ？」

箒さんがもう慣れたといった風に肩を竦めた。

「箒さんは一夏さんのこと、よく理解しているんですね」

「そりゃ箒は俺の幼馴染だからな！」

聞こえていたのか一夏さんがそう言った。なるほど。幼馴染・・・高校で再会した幼馴染。片思いとそれに気づかない鈍感男・・・

どっかで聞いたような話が始まりそんな予感ですね。しかもB A
D E N D 臭がプンプンするんですけど・・・

「分かりました。でも放課後はそこまで時間はありませんし、それに一夏さんのI Sも届いていないそうなので、一応訓練機の使用許可を求めてみましょう。それが出たなら私が可能な限り教えますよ」

「そうか！二人とも、ありがとうな！」

「言っておきますけど使用許可は自分で出してくださいね。そこま
で面倒は見ませんよ」

「おう！」

そう言っで一夏さんは笑顔を向けてきた。・・・天然ジゴロとは
正にこのような人を言うんでしょうね。ここまで純粋な笑顔を向け
られるとこっちが照れます／＼

そこからはしばらく私は見学だ。一夏さんが箒さんと打ち合うの
を見ているだけ。こっやって見ると箒さんの剣道の腕は凄まじい。
様々な技を駆使して一夏さんを見事に翻弄している。

しばらくすると一夏さんが待ったをかけた。明らかに疲労してい
る。

「どっいっことだ！どっしてそこまで弱くなっている！」

「いや、どっって言われても」

「中学では何部に所属していた！」

「帰宅部！3年連続皆勤賞だ！」

思わず何も無いのに転びそうになりましたよ……

「一夏さん、それ自慢することじゃないです……」

「そうか？」

「IS以前の問題だな！これから放課後三時間！私が稽古をつけてやる！」

「ちょっと待て！俺はISのことを教えてもらいたくて頼んだんだぞ！今更剣道の稽古なんて……」

「いえ、一概にそうは言えません」

「カルラ？」

「ISは乗り手の思い通りに動いてくれます。だからIS自体の性能も重要ですが、操縦者の心身鍛錬も非常に重要なんです。その技術をそのままISに使用できますから」

「カルラの言うとおりだ！ほら立て！」

そうは言っても篝さんは嬉しそうだ。やっぱり好きな人と二人で同じことを出来るというのは嬉しいんだろう。

私の出番はISの使用許可が出てからだ。それまでは篝さんに—
夏さんとの時間を作ってあげよう。

「脇が甘い!」

「ゴボア!」

作って上げ・・・

「防御を下げるな!」

「ペプシ!?!」

作って・・・

「死ねえ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!?!?!?!?」

声に鳴らない悲鳴を上げる—夏さんを見て思ったこと。

・・・告白する前に—夏さん死んじゃうんじゃないかな・・・

.

1・5（後書き）

今回も見てくださってありがとうございます。

連投6回目です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております！

1 - 6 (前書き)

連続投稿7回目!

土曜日、朝、第一アリーナ

今日、ISの使用許可がようやく下りたため人の少ない朝方を狙って第一アリーナを借りた。

それにしても訓練機を借りるのに書類を十枚前後書かなきゃいけないだなんて、使わせたくないのかと疑ってしまいます。

いえ、でも開校一週間も経たずに新入生にISを貸し出すのは代表候補生以外は特例中の特例でしょうし、しょうがないと言えばしょうがないでしょう。

まあそれは置いておいて、目の前には日本の第2世代型IS『打鉄』が用意されている。

『打鉄』は日本の2世代型純国産のISだ。1m60cmの近接ブレードを主武装とし、安定した性能を誇るガード型のIS。見た目的には灰色の武者鎧といったら分かりやすい。

その特性から初心者にも使いやすく、現にこのIS学園でも訓練機として使用されている。

その『打鉄』を一夏さんが触りつつ、へーとか、ほーとか言いながら周りを回っている。

「私の方に許可は出なかったのに・・・」

「仕方ないですよ。この時期に一夏さんの許可が出ただけでも異例

だそうです。試合でもない篝さんの許可は流石に無理だったという事でしょう」

「うう……」

明らかに肩を落としている篝さんには同情するしかない。

私の機体は両親や企業の人から他の人に触らせるなって言われているし、こればかりはどうしようもない。

「おーいカルラ！こっちは準備いいぞ！」

「あ、はい！」

いつの間にか一夏さんは『打鉄』を身に付けて立っていた。

初期動作は昨日教えておいたので身に着けるまでは簡単に出来たみたい。

「で、これからどうするんだ？」

「はい、一夏さんのISはどんな型分かりませんので、変な癖がつかない程度に基礎の動きを練習しましょう」

「専用機ってそんなに違うのか？」

「ピンキリはありますが、一つのものに特化したものや、あらゆる状況に対応できるものなどありますし」

「そうか、じゃあカルラに任せるよ。よろしく頼む」

一夏さんは起動が今回で二回目。しかも連続稼働時間は30分程度ということらしくだったので、本来は歩行からやってほしかったんだけど・・・実践も近いことだし、試しに飛行をやってもらった。はつきり言って歩行は戦闘時には役に立たないからだ。

飛行はIS起動の初めての人はほとんど出来ないのだが、なんと一夏さんは危なげながらも見事に飛行して見せた。

しかも1時間程度飛んでいるとその危なげな部分をドンドン修正してしまふのだ。正直これは反則だと思う。

私なんてすっかり飛べるようになるまで一週間はかかったのに・・・

『うひょおおおおお！これ楽しいなあ！』

空を飛んでいる一夏さんから通信が入る。そこには心底楽しそうにISの飛行を楽しむ青年が映っていた。

『よおし！お？あれ？うわあああああああ！』

「一夏さん！？」

「一夏！」

叫び声で今まで空を見ていた篤さんもモニターに飛びついてきた。
一夏さんが激しくきりもみしている。

そのままアリーナの地面に『ドオン!』と激しい音と共に激突した。

墜落、正にその言葉が相応しい墮ち方だった。

「一夏!」

篤さんが激しく土煙の立つ激突地に走っていった。私もその後が続いてそこに向かう。

煙が晴れるとISと一夏さんが見えてきた。

良かった。どうやら傷らしい傷はないみたい。絶対防御機能があるので当たり前といえば当たり前なのだけど・・・

「おおっ・・・死ぬか思った」

「ふん!いきなりで変なことをしようとするからだ、馬鹿者め!」

「ちなみに何をしようとしたんですか?」

「いや、前に動画で見た飛び方を試してみようかと・・・」

「それは無謀ですよ・・・」

「そんなことだろうと思った」

ISは飛行機ではないし、素人がそんな動画に上がるようなISの行動をいきなり取れるわけがない。

飛行機もほとんど乗ったことないですけどね、私。

「いやー、出来そうな気はしたんだけどなあ」

「慣れたときが一番危ないですよ？自転車とかと同じです」

「だな、気をつけないと」

その後はさつきよりは慎重にISを動かしていた。こちらの指示にもしつかり従っていたし、これならどんな専用機でも初期動作はほぼ上手くいくでしょう。

「一夏さんの攻撃方法はやはり近接戦闘ということになりますかね？」

「だな。あいつに射撃の云々があるとは思えん」

篤さんは空を自由に飛びまわるISを見ながらそう答えた。

そもそも篤さんとの訓練と言つの名のしごきでは剣道しかしていないので近接戦闘を主とするしか選択肢がないのだけれど。

「で、どうでしょう?」

「ん?何がだ?」

「一夏さんと戦う可能性がある私やオルコットさん対策を立てるのに私が一緒にいるべきかどうか、ですよ」

「む・・・」

そう、一夏さんは構わないと言ったが対戦する相手ISの対策と言うのは必須だ。特に一夏さんは超をつけてもいいほどの初心者。仮にも代表候補生の私やオルコットさん相手には奇襲奇策の類が必須となる。

でもそれに私が関わるとその作戦は瓦解する。なにせその内容を敵となる人が知ってしまうとそれは奇襲でも奇策でもなんでも無いからだ。

オルコットさん対策には私も付き合いますけどね。

「ちなみに・・・」

今私はISの頭部のみを部分展開して一夏さんとの連絡を取っている。つまり頭の周りは情報の塊だ。空中に画面を映し出して筈さんにも見えるようにしている。

その画面を指で弾いて変更。出てきたのは大量の文章だ。全てセシリア・オルコット専用機、『ブルー・ティアーズ』の情報が映し出されている。

ISは慣れてくるとこういう風に部分的に展開できるのですごい

便利だ。

ISは条約により開発したその技術を全て他国に晒すという条件の代わりに、ISの稼動状態を映した動画というのは極端に少ない。それこそ内通者でもない他国ISの実際の稼動状況は見られることは滅多にない。

そのため、戦ったことの無い機体情報はほとんどが文章でのみの理解が必要となる。

「オルコットさんの機体、『ブルー・ティアーズ』は『BT兵器』のデータをサンプリングするために開発された機体であるため、試作機という意味合いが強いみたいです」

「『BT兵器』？」

「簡単に言えばオールレンジ攻撃が可能な小型飛翔体、らしいです。私も文章のみではそこまでしか分かりませんが・・・この機体の武装はそこまで多くありません。主武装のレーザーライフルと近接用のショートブレード、それに今言った『BT兵器』。これが相手の全武装です」

「なるほど。ということは中距離タイプだな」

「篝さんの言うとおり。近接武器はショートブレードのみということとは完全に射撃メインの機体ということ。」

「はい。なので一夏さんはこのまま篝さんとの剣道で基礎を磨いて、接近戦主体で行ってもらうのが一番良いかと。問題はどんな動きをするか分からない『BT兵器』の存在ですが・・・これは私が可能な限り引き出します。私が負けたとしてもオルコットさんの手の内は全て晒して見せますよ」

「そ、そうか・・・」

「なので私が負けたときは篝さんが一夏さんと対策を考えてくださいね」

もちろん負ける気はありませんけど。

「随分一夏に肩入れするのだな・・・」

「へ？」

その声に画面から顔を上げると篝さんがこちらをジト目で見ていました。

擬音で現せばそれこそ「ジィ〜」っていつのが一番合いますけど・・・どうやら誤解を生んでいるようです。

私は一夏さんを恋愛感情で見てるわけじゃないんですよ？

「あの人はこの学園で最初の友達ですから。それにもし篝さんが一夏さんの立場でも私は同じことをしているでしょう」

「う、む・・・そうか、そうなのだな。うむ、それならいい。うん」
それを聞いて篤さんは少し頬を染めて何度も頷いています。

ああ、何かこの人すごい可愛いんですけど・・・
いえ、その気はないんですけどなんていうか、可愛くありませんか？私だけですか？そうですか・・・

「まあ私も負ける気はないので私の対策までは一緒に考えたりはしませんけどね」

「む・・・」

途端に少し厳しい目つきでこちらを睨んできたんですけど・・・
さすがにさっきのを見た後だと全然怖くないと言つかむしろもつと可愛いに見えると言つか・・・
無性にそのポニーテールを引つ張りたくなりますね。私もサイドテールですからやったらやり返されるのが目に見えているのでやりませんけど。

「では今言ったことは一夏さんに伝えておいてくださいね？」

「うん？カルラも一緒にいるんだから言えばいいじゃないか」

「何言ってるんですか。出来る女をアピールするチャンスですよ？」

「う／＼うるさい！余計なお世話だ！」

ああ、やっぱり可愛い！

それからさらに一時間ほど、時間としては正午ほどになるまで一夏さんには基礎の基礎を教えます。そろそろ時間ですね。

「ではこれくらいで終わりにしましょう」

「え？もう？」

「前に行った通り変な癖がつくと大変ですし、そろそろ次の人の使う時間です」

「そうか、分かった」

午後からは篤さんが剣道の稽古をつけるというが私は用事があると遠慮しておいた。篤さんは良くも悪くも感情の起伏が激しい。二人きりで稽古できるということでは今は嬉しそうな顔をしていた。

次の日も同じ内容を行うようにと篤さんには伝えておいた。基礎訓練は繰り返しが大事だ。特に一夏さんはまだ初心者。とにかく経験が足りない。無茶をさせるよりは基礎だ。

それに応用は基礎が出来ていれば自分で考えることが出来る。日曜日も一夏さんは私に見て欲しいと言ってきましたが丁重にお断り

しました。

日本の都都逸曰く、『人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死
じまえ』

篤さんという馬に私もまだまだ殺されたくありません。

ちなみに用事と言うのは本当。

何せ・・・一夏さんたちの後に使うのは私なんですから。

「セツト・・・」

周囲から複数の模擬戦用の空中攻撃目標が浮いているのがピット
から確認できる。

「オープン！」

ピットから飛び出すと同時に思った。

私かオルコットさんが勝つかは分からないが、できれば一夏さん
とは戦いたくないなあ・・・なんて考えは甘いのだろうか・・・と。

1 - 6 (後書き)

はい、というわけで連投7回目。祝日なのでお昼更新です。

今回結構オリ設定2つあります。突っ込まれる前に原作にないその部分を上げておきます。

1、一夏の訓練機使用 原作では訓練機を使用しているのは最初の一回だけですが起動できたので出来るんじゃないかなあと。そもできないとこの話が成り立たないので一夏さんにはがんばっていただきましたw

2、情報は文章のみの云々かんぬん この件、原作には全くない作者のオリジナルです。映像あつたらもう完全に対策できちゃうし、つてことで文章のみの開示というわけでえす。

今回以降、文章的なオリジナル要素が出てきたらその都度説明入れます。

次回、ようやく代表決定戦ですね。ちょい長めでしかも初めての試みなので生暖かい目でよろしく願います。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価お待ちしております！
ではでは ノシ

1 - 7 (前書き)

連続投稿 8 回目！

月曜日、第3アリーナ

織斑先生と山田先生に案内されて私は一夏さん、篝さんと一緒に第3アリーナのオルコットさんと反対側のAピットにいた。篝さんは一緒に教えていたということでセコンド扱いで一緒にいる。

「カストはこの後すぐオルコットとの模擬戦がある。お前のISはその間に届くと思われる。時間がないからフォーマットとセッティングは素早く済ませるように」

「あ、ああ」

「一夏さん！返事返事！」

「へ？あ！は、はい！」

「ふん」

私の言葉に慌てて一夏さんが言葉を正す。もう少しでまたツールハンマーを貰うところでしたね。

「では私は行きます」

「む？まだ早いぞ？」

「いえ、一夏さんの機体を見るのは終わった後の楽しみに取っておきたいので」

「ふ、そうか」

遠回しの勝利宣言に織斑先生が笑う。そのまま山田先生と共に奥に歩いていきました。多分奥にある管制室に行ったのでしょうか。

私は鎖に通して首に下げている指輪を握りこんだ。一瞬の沈黙の後、専用機『デザート・ホーク・改』が私の体を包む。

このISになったのはつい最近・・・それでも使っているコアは同じなので温もりに包まれる感じがする。

オーストラリアの砂漠の色に近いサンドブラウンの装甲。この色は故郷を思い出させてくれる。

背中には大きな前進翼、足の部分にもカナードが付いている。特徴的な大きな手甲、所々に現れる大きな飾りは左右対称で作られていてバランスを悪くしないように意匠されている。

基本装備の左手の盾が一瞬遅れて手元にあらわれる。ISの半分ほどを覆う大きな楕円形の盾で、現れる瞬間は注意しないと重さで体をそちらに引っ張られてしまう。

さらにその後左右後ろの腰の部分にそれぞれの武装が配置される。

「常備装備とは珍しい・・・」

篤さんの呟きも最もだ。『デザート・ホーク・改』は武装を量子

化できるISとしては珍しくいくつかの装備を基本武装として常備してある。その常備装備も量子化出来るのだけど他の装備は常備装備としては採用できないのでそのままにしておくほうが楽だ。

「これが、カルラの専用機・・・なんかかつこいいな！」

「そうですか？ありがとうございます」

お世辞でも何でもない直線の言葉を一夏さんがかけてくる。こう
いう所に篤さんは惹かれたんでしょうか？

「では、行きます」

「ああ、頑張つてな！」

「勝つたら貴方と戦つんですよ？」

「あ、そうか・・・うん、でも俺はカルラに勝つて欲しいな！」

「そ、そうですか・・・」

ですからなんでこうなの

・・・もういいです。ほら、また篤さんが機嫌悪そうになるし・・・

「では・・・行きます!」

カタパルトに両足を固定し力を入れた瞬間、カタパルトが押し出されてアリーナに飛び出す。軽くバレルロールを行いながら中空に停止した。

そのすぐ後にオルコットさんが反対側のピットから発進し私の少し上の位置で停止する。

鮮やかな青い機体。『ブルー・ティアーズ』だ。その背後には特徴的な4つのフィンアーマーを備えている。

「あら、ISにそのような大きな盾なんて、不恰好ではありませんこと? オーストラリアの技術者を疑いますわね」

オルコットさんの見下すような声が開放通信で聞こえてくる。会った瞬間に挑発ですか。いえ、でも相手の冷静な判断力を失わせると言つ点で戦いの前の挑発は有効です。

・・・この人の場合は素でしょうけど。

「放っておいてください」

「まあいいですわ。どうせあの男性では勝負になりませんもの」

「そうなるかどうかはわかりませんがね」

「あら、随分買っていますのね。まあ、格は違うとはいえ貴方も代表候補生ですもの。これが実質クラス代表決定戦。少しは粘ってくださいませ！」

「そちらこそね！」

オルコットさんが手に持っているのは2mを超える長大なライフル。

データ検索、67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』と該当

ISのハイパーセンサーが瞬時にデータを見つけて教えてくれる。レーザーライフルですか。実用化はされている中ではかなり大きな口径のもですね。

そう考えて右腰のスカートから18mm突撃銃『ラングリスII』を取り外して構える。銃の状態は良好、マガジンも装填済みで安全装置も解除しており、いつでも撃てる。

『それでは、始めてください』

開始の合図とほぼ同時に私とオルコットさんが射撃体勢に移行した。

「行きますわよ！」

瞬間オルコットさんが一瞬早くレーザーライフルのトリガーを引くのが確認できた。

警告、敵IS射撃体勢に移行を確認。初弾エネルギー装填

ISの警告が出る前に回避行動を行い、今までいた場所をレーザーが通り過ぎる。相当な早撃ちだ。さらに精度も高い。

次弾の装填も・・・はい！

すんでのところでレーザーが右肩を掠った！

だが精度が高いということは狙いが分かるということだ。このくらいの射撃をする人なら本国にも何人かいる。

当然のように避けて接近しながら『ラングリスニ』のトリガーを引く。激しい銃声と共に弾丸の雨がオルコットさんに襲い掛かります。

反動はあるのだけれど、そのほとんどは学習能力によってIS自体が相殺してくれている。

面での制圧が得意なだけあって威力と命中率は低いが、その分避ける場所が少ない。オルコットさんは回避行動を取ってはいるが少

しずつ確実にその装甲とシールドエネルギーを削る。

ISはシールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。

ではどうやって勝負を付けるのか。そのシールドエネルギーの削りあいだ。シールドエネルギーはバリアーを貫通した時、もしくは『絶対防御』が発動したときに減る。そしてそのシールドエネルギーは数値化されていて、0になると負けになる。

ちなみに『絶対防御』が発動したときは極端にシールドエネルギーを消費する。発動するのは装甲のない肌の直接露出した部分、つまりは操縦者の命に関わる部分に攻撃が当たった時だ。

あちらも回避しながらレーザーを撃つて来るが如何せん2m大の銃は取り回しが悪すぎる。遠距離戦なら取り付けられているスコープで高い命中率と共に一方的に攻撃できるのだろうが、この距離だと銃口の向く位置から大体の射撃タイミングが分かってしまう。折角の特性と早撃ちも台無しだ。

それに加えてこの『ラングリスニ』による弾幕はオルコットさんにとって鬱陶しいことこの上ないはず。

IS同士の戦いはかなりのところ相性で左右される。

今回はこちらが有利だ。逆に言えば近接戦闘主体の『打鉄』のような相手ならば『ブルー・ティーズ』とオルコットさんの射撃の餌食になるでしょう。

「くー！チョコマカ鬱陶しいですわね！」

オルコットさんがなんとか距離を取ろうと一気に急上昇を行う。

「うっ！」

追おうとして、止めざるを得なかった。

太陽を背に取った見事な位置取りだ。そのせいでセンサーでは捉えているのに姿が視認できない。

流石にこれは追撃を行うことが出来ず、センサーで捉えている位置に『ラングリスニ』を射撃しながらこちらも距離を取る。

狙いが反れたのをチャンスと見てレーザーの雨が降り注いきた。ISの警告に左手の盾を頭上に掲げて防ぎつつなんとか避け続ける。盾を正面に持ち替えながらレーザーの来る方向から相手の位置を予測し一気に急上昇。多少シールドエネルギーが削られるがこの程度はどつってことない。

「この私の射撃をこつも読むとは、中々やりますわね！」

「それは「」丁寧にも！」

ほぼ同じ高さまで上昇すると、距離を取りながらレーザーを射撃してくるオルコットさんが話しかけてきた。まだ距離がある。

こちらの進路を妨害するように撃ってくるため何らかの時間稼ぎの可能性もある。こちらにも『ラングリスニ』を再び撃ち返すが先手

を取られている以上回避優先にならざるを得ない。

なんと言つてもレーザー兵器だ。一撃の威力は『ラングリスニ』の比ではないはず。直撃だけは避けたいところです。

「ですがそれもここまで。そろそろ本気でいきますわよ！」

オルコットさんがそう言った途端に『ブルー・ティアーズ』背部のフィンアーマーが外れ、小型機動兵器として射出された！

「な!？」

データ検索、特殊BT兵器『ブルー・ティアーズ』と該当

これが・・・BT兵器!？

慌てて回避機動を取る。4つのビットはそれぞれが不規則な機動を描き上下左右から私を狙い撃ってくる。

流星に4方向からの攻撃は避けるのが難しい。警告と共に回避行動を取るが・・・

「くっ!」

背中からモロに一発くらってしまった。背後の装甲が吹き飛び、

衝撃で私自身も前に押し出される。シールドエネルギーの消費は装甲に当たったおかげで微々たるものだけどこれを続けられると消耗するのはこちらだけだ。

それに打開策を考える前にこのレーザーの嵐を何とかしないと！

攻撃範囲を限定させるために高度を下げてアリーナの地面ストレスを飛翔する。

「さあ踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲ワルツで！」

「ダンスは苦手なんですけど・・・ね！」

盾で正面から来たレーザーを受け止める。その瞬間他の3つは既に私の視界の外から狙いをつけているのだから大したものです。

代表候補生の名前は伊達じゃないってことですね！

先ほどのレーザーライフルよりも口径が低いおかげで威力は低いが、この物量は正直レーザーライフルを避け続けるよりもきつい！

更に強度も中々のものようで『ラングリスニ』が当たっても有効射程の外から撃ってきているから弾き飛ばすだけで破壊できない。

なら武装を変えるしかない。

『ラングリスニ』を右腰に戻しながら、左腰の24mm対空散弾銃『ラングリスト』を取り出す。

射程は短いけど近距離広範囲に弾をばら撒くこれなら・・・

後はチャンスだけ・・・！

1-7 (後書き)

遂に來ました初のIS戦闘！

VSセシリア・オルコットです！

えー、お気づきの通り前編後編に分けての掲載です。

そこで見てくださっている皆様に質問なんですけれど・・・
これどうでしょう？

いえ、結構分割するか悩んだんですけど、やっぱり見るのは読者の皆様方であって自分の一存で決めるべきではないのかな？と思いつつ、でも自分の作品だし色々試してみたいなっていうのもあり・・・
というわけで質問なのですけどこれからの話、こういう風に長くなったら分割したほうがいいでしょうか？それとも長くなっても分割しないほうがいいのでしょうか？

感想書くのが恥ずかしいと思っている人はメッセでも構いません！
たくさんの意見を参考にしたいのでよろしくお願いします！
「書くの面倒だな」ってそんな人のために選択肢

1、続きが気になる分割でいいよ

2、続きが気になってしょうがないから長くなってもいいよ

数字だけ送ってもらっても構いません！

ちなみにその答え次第で次の話を分割するかどうか決めるつもり

です。

ちなみにこの土日はお昼更新の予定ですので分割、連続は次の話の前、日曜日の朝までにお願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘、感想、評価もお待ちしてます！よろしく願います。

では、明日のV5セシリア決着編でお会いしましょう！

1 - 8 (前書き)

連続投稿9回目!

10分は避け続けているだろうか。既にシールドエネルギーも半分になってしまっていて、装甲もかなりボロボロ。

でもそのお陰でまだ予測の範囲を過ぎないが、大分『ブルー・テアーズ』の特徴が分かってきた。

まずこのビット自体はオルコットさんが操って指示を出しているオートマチックでの攻撃ではない。

そして反応の一番鈍い部分をかなりの確立で狙ってくる。上手くすれば誘導することも可能だろう。

最後に最大の特徴にして弱点、本人が動けないということだ。理由は分からないけど恐らく相当の集中力を要するのだろう。その証拠にビットが攻撃している間はレーザーライフルの射撃がない。その逆もそうだ。オルコットさんが射撃をしている間はビットの攻撃がない。

ならば・・・

ビットの3つが視界の中に入ってレーザーを乱射してくるがこれは本命ではない。あたればいいという程度、誘導だ。ならその誘導に乗るまで！

迎撃する振りをして一発だけ『ラングニスト』を撃ち込む。当然のようにビットが射程外に逃げ去るので深追いするように体を前めりにする。

その瞬間左手に6連発回転式グレネードランチャー『フェンリス』

をオープンする。

「貰いましたわ！」

「こちらが・・・ですけどね！」

既に装甲の無い背中を狙ってくるのは読めています。

『フェンリス』を地面に向けると同時にISの制御を変更する！

反動制御を解除、以後手動に移行します

タイミングを見計らって足のブースターを吹かすと同時に『フェンリス』のトリガーを引いた。

『フェンリス』はこのISに搭載されている武装の中で最も反動が大きい。一般の人が撃てばそれこそ腕が吹き飛びほどの反動をIS自身の制御で無効にしている。

つまり反動を最低限にすれば・・・

ドオン！

「ぐ・・・!!」

左腕が吹き飛びそうな反動と共に『フェンリス』から放たれたグ

レネードが地面に炸裂。その衝撃と反動で体が反転し浮き上がるのを感じる。『フェンリス』は私の手が反動に耐え切れず思わず離れてしまったけど今は拾う余裕がない！

それと同時に足のブースターが連動して今までと真逆の方向、後方のビットに向かって飛んだ。

慣性を一気に逆転させたため、気を失いそうになるがISのブラックアウト防止システムがそれを防いでくれる。

直ぐ真下をレーザーが通り抜け、さらに後進をかけて足元にビットを捉える。それ目掛けて抜き放った『ラングニスト』を撃ち込んだ。

予想通り蜂の巣になったビットが一瞬後に爆散する。

「な!？」

オルコットさんが驚きの声を上げる。その瞬間、一瞬だがビットが全て止まったのを確認。

予想通りビットはオルコットさん自体が操っているようですね。

またも3つのビットが攻撃仕掛けてくるが先ほどの攻撃を危険視しているのか遠距離からの射撃で避けるのは容易い。左側の攻撃は全て盾で受け止めながらオルコットさん本人を見る。太陽にも大分なれた。

さて、特徴も分かったところでそろそろこちらの反撃といかせて貰います！

盾を真上、垂直にオルコットさんに向けて構える。

「何をする気が知りませんが！」

私の行動に、オルコットさんが一気に残りのビットが距離を詰めてくるがそんなことはどうでもいい。

この『アイギウス』はただの盾ではないんですから！

盾の内側が弾けると同時に何かが発射されて空中で炸裂する。

「え、煙幕！？」

そう、煙幕。この盾の中には一発きりですが広範囲に煙を展開する煙幕弾が内蔵されていて、一瞬にしてアリーナ全体が真っ白な濃い煙に包まる。

「し、しかし煙幕なんて・・・え！？」

どうやらもう一つ気づいたようだ。おそらくハイパーセンサーが正式に動いていないのでしよう。

『アイギウス』にはもう一種類の弾丸が内蔵されている。

ジャミングだ。

空中待機型の小型ジャミング兵器を相手の周りに3つ撃ち出す事で、ISのハイパーセンサーをも狂わす電磁波をで30秒発生させる。ただしジャミングが強力すぎるため範囲内にいると自身のハイパーセンサーも使えなくなる上、小型とはいえ10cm大のジャミング兵器は目視で見ればオルコットさん相手ならすぐに撃墜されてしまう。

けど、煙幕と組み合わせることでその弱点を補い、最大級の妨害を行うことが出来る。

この場で役に立つのは熱探知センサーと目視のみ！

右手の『ラングニスト』を左腰に戻し、背腰部のエネルギーソード『レヴァテイン』を抜刀、エネルギーを展開する。連続展開可能な時間は1分・・・その間に決める！

煙幕の中を旋回して場所を特定させないようにさせながら、熱探知センサーに映っているオルコットさんに真後ろから突進する。

『レヴァテイン』のエネルギーを展開。真っ赤なエネルギー刃が実体剣の周囲に現れると同時に煙幕を飛び出す。

瞬間、狙いに気づいたのかオルコットさんがこちらを捉えた！

「射撃型の私にこんな方法で近接戦闘を挑むなんて！」

オルコットさんは驚きながらも私が振り下ろした『レヴァティン』をギリギリのところで回避してレーザーライフルを撃ってくる。剣を振ったせいで回避してもレーザーが左肩を掠ってしまい装甲が削られますが、ここで怯むとビットが戻ってくる。わざわざビットを相手にする必要はない。

相手に使わせる隙を与えなければ！

距離を取ろうとするオルコットさんに離されないように肉薄する。距離を取られれば圧倒的にこちらが不利だ。喰らいつけるだけ喰らいつく！

「はあ！」

気合の声と共に振り下ろした剣はまたも避けられて距離を少し開けられる。が、撃ってくるライフルを全て盾で防ぎ、また接近して剣を振るう。

この繰り返しだ。

本来のIS同士の戦闘相性なら退きながらりながら撃てるオルコットさんの方が有利なのかもしれないが、私の場合は違う。IS半分を覆う大きさの『アイギウス』は、この距離では相手から見れば壁も同じ。オルコットさんのライフルの射撃を全て遮ってくれる。私は熱探知センサーの示す位置に突っ込んで剣を振るうだけ。

完全に追う側と追われる側の立場が逆転。

でもジャミングも後10秒もたない。そろそろ戦略を変えないと煙幕で誤魔化すという手段は通じない。

この武装はあまり使いたくなかったんですけど・・・

続けて斬りかかりながら再び退いたオルコットさんに向けて左手の盾を投げつけた。

「そ・・・んな程度！舐めないでくださいます！」

当然のように『アイギウス』がライフルに撃たれて弾き飛ばされる。

「盾を捨てるなんて、勝負を捨てましたわね！」

「セツト・・・」

素早くこちらの姿を視認したオルコットさんがライフルを構えた。それを見計らって私は・・・

「オープン！」

言葉と共に左腕を斜め上に振るい、

ヒュン！

風を切る音と共にオルコットさんの手からライフルを弾き飛ばした。

「え！？」

混乱していてもそこは流石代表候補生。瞬間的にビットをこちらに飛ばしてくるのは見事としか言いようがない。でも……

「今までとは違つんです！」

振りぬいた左手を振り下ろす。またも風を切る音と共にオルコットさんの左肩に『それ』が直撃した。

そのまま『それ』がオルコットさんの左腕を絡め取る。

「ぐーこ、これは……鞭！？」

叩きつけられた衝撃に苦痛の声を上げながらオルコットさんが『それ』を視認したようです。

私の左腕から……正確には手甲の左手首の内側から鞭が伸びている。

仕込み鞭『グレイプニエル』。普段は手甲の内側に収納されている。

る超弾性鋼の鞭でこの機体の最大の隠し武器。

「こゝんなもの!」

「終わりですよ」

慌ててビットで鞭を焼き切ろうとするオルコットさんを鞭を収納
することで一気に引き付ける。

これがこの『グレイプニエル』の特徴。弾き、叩きつけ、絡め取
り、引き付ける。

そのままオルコットさんをゼロ距離まで引き付ける。こうすれば
ビットの攻撃にあわせてオルコットさんをそちらに向けるだけで攻
撃を防げる。しかも右手には先ほどから展開し、すでにに振り上げ
られた『レヴァティン』。展開できる時間は後10秒ほどだけこ
れで……!

その瞬間オルコットさんの顔が……笑った!?

「お生憎様! 『ブルー・ティアーズ』は……」

この状態で笑う……ということとは!

「6基ありましてよ!」

「でしょうね！」

腰部の突起が外れて、動く！

その瞬間に私はその二つを両足で踏みつけた。

踏みつけただけでは弾くだけで破壊は出来ないし時間稼ぎにしかならないでしょうがこの『デザート・ホーク・改』にはまだ隠し武器がある。

仕込み短剣『スレイヴニル』。足と膝の先端に取り付けられた小型の实体短剣で、足に付いているものは角度を180度まで、膝に付いているものは90度まで変更できる。

そして今、足の『スレイヴニル』は稼動限界ぎりぎりの真下に90度。

『ブルー・ティアーズ』は両足の『スレイヴニル』に貫かれて煙を上げていた。どう考えても再起不能。

正面を見るとオルコットさんの顔があった。その顔は正に信じられないといった表情だ。

「く、『イン』・・・！」

オルコットさんが左手を突き出して何かの名前を叫ぼうとする。

多分近接用のショートブレードでしょうけどこの距離でそれは致命的です！

ピットでISを解除して初めて言った言葉にオルコットさんはすごい驚いていたようでしたが、隠し持っていた武器で戦ったのだ。データでは分かっていたとしてもフェアではない。

実際真剣勝負なのだから卑怯も何もないのですがお詫びくらいしないと私の心が痛む。所謂偽善、エゴと言ったものだと分かっているんですけどね・・・

「……………いいえ、私の負けを認めますわ」

「え?」

「貴方は貴方のISの特性を生かして戦いましたわ。それで負けたのは私の慢心以外の何者でもありません。貴方の祖国を侮辱したと、お詫びいたしますわ。許してくださいます?」

何か嫌味を言ってくるかと身構えていた私は毒気を完全に抜かれてしまった。

「そ、そんな。オルコットさん・・・」

「セシリア、でよろしいですね。また、試合していただけます?」

「あ、は、はい!もちろん!」

「今度は負けませんわよ!カストさん!」

「私もカルラで結構ですよ。セシリアさん」

セシリアさんが差し出してきた右手を、私はそう言いながら両手で握り返していた。

1 - 8 (後書き)

V Sセシリア決着編、いかがでしたでしょうか！

なんかセシリアすごい強い気がしますけど普通このくらいは強くてもおかしくないんじゃないかなーって思ってた書きました。

しかしセシリアの機体見たとき種デスのストフリ思い出したのは自分だけじゃないはず！

え？セシリアフラグ？叩き折ってやんよ・・・と思っただんですけどちゃんと立たせますよ。オルコツ党員は安心してください。

アンケートはまだまだ待っています。とりあえず明日はV S一夏戦。さあ、どうなる！？

一夏戦は感覚が分からない人のために試しで一気に全部上げます。それを見て判断してもらえれば嬉しいです。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。感想と評価をもらえると作者のテンションが発狂します！

ではまた ノシ

お詫び

設定を見てもらえれば分かるのですが、『デザート・フォックス』が『デザート・ウルフ』になっています。

これはシャルの武器の名前に既に『デザート・フォックス』があったためであり、完全に作者の設定ミスです。申し訳ありませんでした。

1 - 9 (前書き)

連続投稿10回目!

セシリアさんは先に応援席に戻っていた。『いつまでもいて集中を乱してしまつてはいけませんから』ということらしい。

セシリアさんは案外優しい人なんじゃないかって思う。ただ最初がきついただけなのだ。

つまりは篤さんと一緒だ。身内には優しいんだと思う。多分……

やっぱり友達が増えたことはうれしい。その人の知らない一面を見れるのも友達の特権だ。

一応IS同士が映像を共有出来るコードは交換しておいたので一夏さんの行動を私の視点で見ることが出来ます。

私だけ見れてセシリアさんだけ見れないのは不公平ですしね。

次の試合は30分後。

30分あれば疲れた体も使った集中力、精神力も何とかギリギリ回復することが出来るはず。

シャワーを浴びるために控え室に一度戻る。下着さえも乱暴に脱ぎ捨ててシャワー室に入ると勢いよくお湯を出した。

ISを使った後のこれは一種の癖みたいなもの。親にもはしたないから直しなさいと散々言われたけどこればかりは直る気がしないんですよね……

10分ぐらいは浴びていただろうか。お湯を止めて体をタオルで包む。脱ぎ散らかした下着とISスーツを一度回収します。

この面倒な作業も私にとって必要な作業ですのでやっぱり直りませんね。

髪を乾かしてISスーツを再び着込み、髪をいつも通り右側に結ぶと30分ピッタリに再びピットに戻る事が出来た。

再びIS『デザート・ホーク・改』を起動させる。先ほどの傷は修理するまで治らないので所々ボロボロだけでしょうがない。

それに本当は一夏さんと戦う理由が一切ない……いえ、ありませんね。企業の人から可能ならば男性ISパイロットのデータを取ってきてくれて言われてました。

そんなので人と争うとかはしたくないんですけど……

「後一回……お願いね」

アリーナに飛び出す。先ほどと同じようにバレルロールを行いなからアリーナの中央に停止。今回はホルスターの武器いざというときのために温存することに決めて左手の盾をクローズ。両手持ちの10.5mm回転式機関銃『フローキ』をオープンする。実弾系統は総じて弾丸を再装填する必要があるため『ラングリスニ』『ラングニスト』共々マガジンの残弾が心もとないというのも理由のひとつだ。

反対側のピットから一夏さんが発進してきた。少し戸惑いながらも私と同じ高さまで上がってくる。

少し灰色がかった白色、それでいてスマートな見事な機体。太陽の光をあびたそれは更に白く見える。

「げ！なんだそのガトリング！さっきは使ってなかったよな！？」

「ええ、あれだけでは芸が少ないので、今回はこれでお相手します。ちなみにこれの正式名称はミニガンですよ？」

「どこがミニだどこがあー！そっちのほづが強そっちなんですけど！？」

「そうですね、制圧力がありますよ？」

「そういえばさっきの最後、すごかったなあ。あんな戦い方もあるのかって関心しちまったよ」

そこで尻込みするのではなくて関心するというのが一夏さんらしいですね。

その時、高速でデータ検索をしていたハイパーセンサーが一夏さんの機体の情報を映し出してくれた。

データ検索完了、機体該当データ無し。 unknownと認定

unknown？ということはこの場が初のお披露目ということですか。光栄ですね。

「ありがとうございます。でも、手加減はしませんよ？」

「へ、当たり前だ！」

『それでは始めてください!』

声が試合開始を告げる。

「行きます!」

『フローキ』を構えて作動させる。甲高い機械音と共に6つある銃身が高速回転を始め、たちまち『ラングリスニ』よりも激しい弾幕を形成した。

「うおおおおおおお!？」

一夏さんが機体を不規則に動かしながら回避する。正しい回避方法だ。機関銃のような取り回しの悪い大型の射撃武器相手は常に移動することで狙いをつけさせない。教えた基礎をしっかりと生かしている。

それでも時々当たっているのはまだあの機体に慣れていないからだろうか。それにしても……

「速い……!」

これだけ弾幕を張っても当たっているのは10発に1発程、しかも掠っている程度のためほとんどシールドエネルギーを削れていない。

いくら『ラングリスニ』に比べて命中力に劣るとはいえ面での制圧力は『フローキ』の方が上のはずなのに！

『ラングリスニ』と『ラングニスト』を使いすぎたのはやっぱり失敗だったみたいですね。でもセシリアさんは手加減できる相手ではありませんでしたし仕方ありません。今ある武装で対応するのも戦闘というものですしね！

いざというときのために『フローキ』をクローズ、70mmグレネードランチャー付22mmアサルトライフル『ゲリユ』をオープンする。

中遠距離用の武装ですけど今は無駄に弾丸を使うよりスコープのついているこっちのほうが命中率が高いだろう。

スコープで狙いをつけながらトリガーを引く、左肩の装甲に直撃し剥ぎ取った。一夏さんがその衝撃で体制を崩したところを更に撃ち込む。

でもあれでは装甲を弾き飛ばしただけでシールドエネルギーは大して削れていないはずだ。

しかしここまで何も撃つてこないということは近接用？それとも気を伺っている？どちらにしろ今は攻撃のチャンスだ。スコープを覗きながらトリガーを引き続ける。

それでもたまたまに反応しきれないで当たったり掠ったりしている。これならこのまま削りきることも・・・

「素手でやるよりはいいか！」

一夏さんが吹っ切れたように初めて武器をオープンする。
実体剣？

データ検索、武装該当データ無し

予想してましたけど怖いですね。どんな装備か全く分からないと
いうのは。

あれがああの機体の装備。あれだけなら相当な容量を残しているは
ず・・・それとも他は使えないのだろうか？

何にせよ接近を許すわけには行かないですね。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

「やっぱり・・・速い！」

一夏さんがあつという間に『ゲリユ』の弾丸の雨を掻い潜って接
近してくる。振り下ろされた剣を回避して『ゲリユ』を撃つが、ダ
メージをもともせず接近してくるのは最早勇気というより無謀
に近い。

しかし・・・この突進力は予想以上に！？

「くっ！」

『アイギウス』のオープンが間に合わない！
咄嗟の判断で『ゲリュ』を盾代わりに使ってしまう。

剣の勢いに私の手から『ゲリュ』が弾き飛ばされる。

「もらった！」

「させません！」

ここがチャンスとばかりに一夏さんが再度剣を振りかざしてきましたが、ここまで時間が稼げれば大丈夫。

間に合っていないかった『アイギウス』がオープン、取り出して振りかざす。

ガン！

金属通しがぶつかる音がして一夏さんに一気に押される。が、こちらもブースターを吹かしてなんとか持ちこたえた。

「くそ！防がれた！」

「私も、そう簡単にはやられませんよ！」

私が銃を持っていないため一夏さんが一度距離を取る。『ゲリユ』は弾き飛ばされてしまったため他の銃を使うしかない。

でもこの距離では銃を使うわけにはいかない。使う前に懐に入られる。『グレイプニエル』も同じ理由で除外。剣での戦いでは一夏さんが有利でしょう。

となると・・・

「では、私も接近戦でお相手しましょう！」

『アイギウス』をクローズしつつ右手を掲げて棒状の武装をオープンする。何度か頭の上で振り回すと一夏さんに向けて構え直した。

「なんだ？ 槍も使えるのか？」

「当然です！」

言ってブースターを一気に吹かす。そもそもこのIS『デザート・ホーク・改』はマルチロールな機体。一夏さんの機体ほどではないけど接近戦もこなせる機動性は十分にある。

右手を伸ばすように槍を一気に突き出して間合いの距離を稼ぐ。

剣とは違う圧倒的な間合い。これが槍の特性だ。更にブースター

との突進力を加えて相手への一撃離脱を目的としたこの方法は槍とは最も相性がいい戦法。

そしてこの槍、ヒートランス『ブリュナーク』は槍の先端から強烈な熱量を噴射することにより融解による貫通能力を持つ。絶対防御機能によりその溶解能力は人体への影響はないも同然だけどその熱量はなくなっていない。

「熱っ！なんだこれ！？」

剣で反らしたせいで近距離を槍が通過した一夏さんが驚きの声を上げた。

「ヒートランスです！上手く避けないと火傷しますよ！」

もちろん嘘ですがこういう脅しも時に有効なときもあります。明らかに大きく避けるようになって隙が大きくなった一夏さんに柄の部分を使って罅迫り合いに持ち込んだ。

「くっ！」

「ですから言ったでしょう？貴方に不利にならなくても、私は貴方の機動をあらかじめ見ることが出来たおかげで、機体性能が違ってもある程度の行動予想が出来るんです！」

「それは俺が言い出したことだ！俺はカルラに教えてもらって良か

「たと思ってる！」

「……！まだそんなことを！」

両手首につけられた手甲が火を噴いた。

10mm2連装ショットガン『ドラウニブル』。『デザート・ホーク・改』の隠し武器の一つ。こういう罅迫り合いの時くらいしか使えないほど射程は短いが意表をつくには十分だ。

「なにい！？」

案の定怯んだ一夏さんの空いた腹部を『ブリユナーク』の石突の部分で思い切り弾き飛ばす。一夏さんは受け流しきれずに地面に激突して砂埃を巻き上げた。

『ブリユナーク』をクローズして『フローキ』を取り出す。

「これで……！」

再び甲高い回転音と共に『フローキ』から弾丸が吐き出された。回避する間もないほどの弾丸の雨が一夏さんを襲う。

あっという間に外れた弾丸で砂煙の煙幕が出来上がる。

手加減など出来ない。一夏さんはそれほど強い。

……機体もそうだが一夏さん自身のIS操作が相当なものだ。

初心者とは全く思えない。下手なISパイロットよりよほどの実力

だ。

なにより思い切りの良さが半端ではないのだ。普通初めての实战なら怯んだり萎縮したりするのだけれどそれが全くない。

正直一番やりにくいタイプです。

ガチンガチンガチンガチン！

『フローキ』が弾切れを起こしこれ以上は無理と伝えてくるまでトリガーは引きっぱなしだった。

『フローキ』をクローズして再び『ブリュナーク』をオープンし、構える。

一夏さんのいた部分は弾幕が起こした砂埃で全く見えない。

煙が晴れていく。『ブリュナーク』を構えなおして一夏さんが出てくるのを待つ。まだシールドエネルギーは残っているはず。でなければ試合終了の合図が出る。

油断は即負けにつながる。

煙が完全に晴れる。と・・・そこには先ほどのISとは形の違うISが立っていた。

「綺麗・・・」

場違いにも私はそう呟いていた。

機体は先ほどよりも鮮やかな白を基調とし、まるで西洋の騎士の鎧をイメージしたようなデザイン。いや、あれはそもそもあれが完成形態なのでしょう。今までがまだ未設定だったんですね。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

開放通信を通じて一夏さんの声が聞こえてきた。

「最適化・・・終わってなかったんですね？」

「いやあ・・・着いたのが結構ギリギリだったからな」

「はあ、分かりました。ここからが本気ということですね」

「ああ！行くぞ！」

距離があるため『ブリュナーク』を左手に持ち替え、右腰から『ラングリスニ』を取り出して再び乱射。

完全に使い切るつもりで一夏さんに撃ち込む、が先ほどとはスピードの桁が違う!？

一番の目の面制圧力を誇る『ラングリスニ』でも掠る気さえしないってというのはどれほどの機動性を誇っているんですか!？

あっという間に『ラングリスニ』が弾切れとなったため右腰に戻し、『フェンリス』をオープン。

先ほどの実体剣がいつの間にか二つに別れ、間からエネルギー刃を形成している。おそらくあの武器もあれが本来の形なんだ。

「近接信管稼働。全弾連続発射」

ISのハイパーセンサーが素早く私の思考を読み取り『フェンリス』の設定を書き換える。

残弾5発のグレネードが『フェンリス』から発射され、名前の通り牙を剥いた。

「弾丸が・・・見える！」

一夏さんが言ったとおり弾丸の隙間を掻い潜る。その瞬間更に一夏さんのスピードが上がった！

最早グレネードの近接信管が追いついておらず、一夏さんが通り過ぎた後に爆発を起こしています。

『フェンリス』は弾を撃ちつくした瞬間にクローズ。『ブリュナーク』を再び両手で構えて迎撃の準備を整える。

「はあ！」

気合の声と共に右手で突き出した『ブリュナーク』が空を切る。いつの間にか懐に入り込んでいた一夏さんが剣を振り被っています。

「この距離なら槍は不利だな！」

「槍だけなら・・・ですけど!」

「げ!やば!」

左手には槍を突き出した瞬間引き抜いた左手の『ラングニスト』。あれを避けて懐に入られるくらいは想定済み!

この距離なら外れはない!

バン!

『ラングニスト』が火を噴いた・・・が一夏さんが・・・いない!?

「まさか・・・あの距離で避け・・・!?!」

「うおおおおおおおおお!」

声に反応して上を見上げると既に一夏さんが剣を上段に振りかぶっていた。ここまで来ていると槍を引き戻しても喰らうことは間違いない。

こうなったら一度もらうことを覚悟して返す刀で一夏さんに攻撃するしかない。

実際私のシールドエネルギーはほとんど減っていないのだしそれが一番効率がいい!

そう考えて少しでも避けようと体に入れた瞬間・・・

ビーーーーー

『試合終了。勝者、カルラ・カスト』

「え!?!」「はい?」

二人揃って疑問の声を上げてしまった。

「俺……なんで負けたんだ?」

「ですね。あの剣のせいだとは思いますが」

未だに私も一夏さんも意味が分からず、よほど混乱していたのか私は同じ方のピットへ戻ってきてしまった。

気づいた時にはISも解除してしまったし今更反対側に戻るわけにもいかない。

ISを解除し終わったと同時に織斑先生がピットに入ってきた。その後ろから山田先生と篤さんも続いて姿を現しました。

「バリア無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに戦うからそうなる」

「バリア無効？」

あわわ、一夏さんと声が被ってしまった・・・恥ずかしい／＼／
それでも織斑先生が説明してくれてるのでそれに聞き入る。

「ああ。相手のバリアを切り裂いて、本体に直接ダメージを与える。雪片式型の特殊能力だ」

雪片式型・・・ああ、あの剣の名前ですね。そう納得する私を置いて織斑先生の説明は更に続く。

「これは、自分のシールドエネルギーを攻撃に転化する機能だ。私が、第一回モンドグロッソで優勝できたのも、この能力によるところが大きい」

「なるほど、それで私を攻撃する前にシールドエネルギーが0になっただけですね」

「その通りだ」

「諸刃の剣ってやつか」

「IS同士の戦いはシールドエネルギーの0になったほうが負けになります。白式の攻撃は自分のシールドエネルギーを犠牲に相手にダメージを与える、織斑君の言うとおり諸刃の剣、と
いうわけですね」

「つまり、お前の機体は攻撃特化の近接型というわけだ。よく訓練して使えるようにする必要がある。しっかり修練しておけよ」

「はあ・・・」

一夏さんがため息混じりに肩を落とした。まあ勝ったと思った瞬間負けてしまったのですから分からなくはないですけどね。

「ISは今待機状態ですけど、呼び出せばすぐに展開できます。ただ、ちゃんと規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

山田先生がそう言ってIS教則の本を一夏さんに手渡した。それを見て一夏さんはますます肩を落としてしまった。

「それでも、あの動きはすごかったです。あれで実戦が初めてなんて、誰も信じられませんか?」

「いや、カルラと箒との特訓のお陰だ。やっぱり二人の助けがあっ

「だからだよ」

「そ、そうですね」

「そうかそうか、私との稽古が役に立ったか。うん」

ですからその笑顔は正直反則的なんですけどノノノ
箒さんも表には出しませんが内心嬉しそうです。

「行くぞ一夏！今からまた特訓だ！」

「あ、ああ！ほらカルラも！」

「ええ！？私もですか！？」

「ああ、お礼もしてないしな」

「分かりました！分かりましたから手を引つ張るはやめてください
！」

箒さんに引つ張られる一夏さん、一夏さんに引つ張られる私とい
つた奇妙な隊列が出来上がる。

騒がしいのは苦手なんですけど。でも……こういうのも良いか
もしれませんね。

月曜日、朝のSHRの席で山田先生がクラス代表の発表を行っていた。

「と、いうわけで！ クラス代表は織斑一夏くんに決まりました」

「……は？」

一夏さんがまったく意味が分からないという風に首を傾げている。

「はい、先生。質問です」

「はい、織斑君」

「何で負けた俺がクラス代表になっているんでしょ？」

「それはカストが辞退したからだ」

織斑先生が山田先生に代わって答えた。その瞬間一夏さんがものすごいスピードでこちらを振り向きました。

その顔にはなんで？と書いてあります。

とりあえず笑顔で手を振っておきましょう。

「なん・・・だと・・・!?」

「ホームルーム中は前を向かんか馬鹿者が」

その瞬間、一夏さんの頭にツール・ハンマーが落ちました。

「静かにしろ馬鹿者」

「い、いや千冬姉！ 何で俺が!!」

再び出席簿が一夏さんの頭に落ち、その痛みに一夏さんが悶え苦しんだ。

えっと・・・理由説明したほうがいいんでしょうか？

「弱者は勝者に従うのが常だ。弱肉強食。そんなに嫌ならお前が勝った上で辞退すればよかったんだ。昨日までの時点でお前はそれを怠った。つまりお前に決定だ。反論はないな。あっても受け付けないが」

説明する必要は無かったようですが・・・すごい理論ですね。道理で随分あっさりと辞退できたと思いました。

「よし、反論がないところでクラス代表は織斑一夏だ。全員異論はないな」

『はい!』

—夏さん以外の全員が一丸となって返事をしました。申し訳ないですけど私もクラス全体の意向を無視するわけにもいかないのです。夏さん、諦めてください。

人間諦めが肝心です。

1 - 9 (後書き)

祝！連投10回目！

V S一夏からクラス代表決定まで一気にですけどいかがでしたでしょうか？

今回を見て前々回の結果出してもらえたら幸いです。よろしく願いします。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願いします。

感想と評価をもらえると作者のテンションがヒヤッホイ！します！

初試み

オリ設定のコーナー

??? 「いつくんかつこよかったよねー！」

はい？

??? 「白式もいい具合に見せ場作ってくれたし、IS作ったかいがあるってもんだね！うんうん！」

あの、自己紹介のほうを・・・

??? 「なに？浸ってるのが分からないの？バカなの？死ぬの？」

「ごめんなしあ・・・」

??? 「まあ話も進まないし・・・改めて、みんなのアイドル、篠

ノ之 束ちゃんです、ヴィヴィ！」

今回からオリ設定の説明を本編のキャラにお願いしようと思いましたが。

しばらく出番がない束さんをお呼びしてみたんですけど・・・

束「ま、一応あなたにはこれからいっくんの活躍を書いてもらうんだからすこーしだけなら付き合っただけよ。で？今日は何？」

主人公はカルラなんですけどね・・・

えっと、今回のISのオリジナル設定を説明していただきたいなあ
と・・・

束「おっけい任せて！今回は最初のIS同士の映像共有だね！これ
って正確に言うところ『視覚共有システム』のことなのだ！」

ほうほう

束「宇宙空間に限らず、相手が何してるか、言葉で伝えても相手の
視点じゃないと分からないことってあるでしょ？だから相手の視点を
共有することで、こっちの作業効率を更にするために作ったん
だ！」

流石天才。簡単に作ってしまうところに憧れます

束「ははは！もっと褒めるがいい！まああなたに褒められても全然
嬉しくないって言うかむしろうざいけど。話しかけるな」

ぐはぁ・・・

東「ちなみにこの『視点共有システム』は通常はコードでロックしてあるから相手から許可がないと使えなんだ。そりゃ相手の視点にぼんぼん入ってこれたら簡単に犯罪出来ちゃうしねー。そこら辺はこの天才の頭脳のコードだからそこら辺の技術者じゃ解除できないよ？」

おういえ・・・

東「そんじゃ、今日はここまで！ばっはーい！」

締めという言葉も取られた・・・

1 - 1 0 (前書き)

連続投稿 1 1 回目!

「織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

声と共にクラッカーが乱射された。夜の食堂を貸しきつてのクラス代表決定のお祝いだ。

食堂の一つのテーブルを陣取って席の中央には一夏さん、その左に篤さん、右側に私とセシリアさんという位置取りで座っている。他の人たちは周りに立っていたり近くの席に座ったりしてこちらを見ている。

席にはジュースやお菓子が持ち寄られて結構豪勢になっているのですが・・・始まる前からいくつか袋が空いているのはご愛嬌ということですかね？

「なあ二人とも、本当に俺がクラス代表でよかったのかなあ？」

一夏さんが私とセシリアさんに向けてまだ疑問の声を上げる。

「はい、元々私はそういうガラではありませんし・・・」

「私に勝ったカルラさんが良いと申すのでしたらそれで構いませんわ」

「そうそう！二人とも分かってるー」

周りのクラスメートから助けが入った。二人だけで説得できないと悟ったのだろう。

「折角男子がいるんだから、持ち上げないとね！」

「そうだよオリムー！好意は素直に受け取るものだよー」

訂正、面白がっているだけのようです。しかしオリムーって言ったのは・・・布仏さん？

なんとというネーミングセンスでしょう・・・前にやった日本のポケンというゲームで確かそんな名前のモンスターがいたような気が・・・

しかし私はなんと呼ばれているのか怖くなってしまいます。

「人気者だな、一夏」

「そう見えるか？」

篝さんは一夏さんが他の女性にチャホヤされているのが気に入らない様子です。でも一番座ってる距離が近いんですね。素直じゃないんですから。

その時、眩しいフラッシュが一夏さんを照らしました。

その方を見るとメガネを掛けた黄色のタイをつけた人が立っています。ということはこの人は二年生ですか。

「はいはい、新聞部です。私は新聞部副部長、二年の末ゆずみ薫かおるこ子、以後よろしくね」

第一印象は活発で明るい人。友達に一人は欲しいタイプですね。

薫さんはそう言いながら手作りらしい名刺を私、セシリアさん、一夏さんに渡してきた。

ですからそういう風にやると・・・

ああ、また篝さんが睨んでいます・・・もう止めてください・・・

「で、早速なんだけど！写真を一枚！あ、セシリアちゃんとカルラちゃんも一緒にいいかな？」

「わ、私もですか？」

「注目の専用機持ち二人だからね！ほら、カルラさんは一夏君の左側に！」

「は、はい。えと、篝さん、失礼します」

一夏さんの前を抜けて篝さんの間に入る。

で、ですから私を睨まないでくださいってば〜！

「あ！三人揃って前で手を組んでもらってもいいかな？団結の証、見たいな感じで！」

「い、いっつですの？」

セシリアさんがいち早く一夏さんの手を握って前に差し出す。私はセシリアさんの上から被せるように手を乗せた。

「ほら！三人とももつと寄って！それじゃ行くよー！ $35 \times 51 \div 24$ は？」

なんなんですかその全く関係ない計算は・・・そこは普通に $1 + 1$ でいいじゃないですか・・・

「え、えつと・・・2？」

「不正解。正解は $74 \div 375$ でしたー」

やはり第一印象で人を判断するものではないですね。友達として欲しいけど面倒なタイプです・・・

それともこの人の笑顔にする方法、みたいなものなんでしょうか？首を傾げているとその間にシャッターが切られてしまった。

シャッターが押される瞬間、近くにいたクラスの皆さんがフレームの中に集まったのはやはり「愛嬌」というものでしょう。

「な、何故皆さんは入ってますの!？」

「まーまーまー」

「セシリアとカルラだけ抜け駆けってのではないでしょう?」

「団結の証ということだし写っても問題あるまい?」

「むー!」

あ、膨れたセシリアさんも結構可愛いかも。

一夏さんのインタビューを終えた後は就任祝いというのもあり織斑先生に解散させられるまで騒いでいたでしょうか。

それから篝さんもセシリアさんも何気に写真を要求しましたね。なぜか私も貰えるようになってましたけど・・・集合写真は良いものかもしれない。もらったら部屋に飾りましょう。

パーティー終了後

「カルラさん！」

「はい？」

部屋に戻る途中で後ろから声をかけられた。振り返るとセシリアさんが走って私のところにやってきていた。

「少々お話がありますの。お時間をいただけます？」

「はあ、ここでですか？」

何の話だろう？

「いえ、出来ればどちらかのお部屋で」

「じゃあ私の部屋で。すぐ傍で相部屋の人もいませんし」

「あ、それでは10分ほどしてから参りますわ」

「？分かりました」

部屋に戻ってから来客のため少し散らかっていたプリントや荷物を片付ける。お湯を沸かして紅茶のTバッグを用意してから、セシ

リアさんはイギリス生まれなのだからこんな味では失礼だろうか。などと考えてしまった。

でも私の部屋にはこれ以外紅茶なんてないし……

コンコン

悩んでいるうちにセシリアさんが来たらしい。ノックされた扉を開けるとそこにはセシリアさんと……篝さんがいた。

なぜか篝さんはむすっとしていますが……はて？

「あれ？篝さん？」

「私が呼びましたの。よろしいかしら？」

「は、はい。どうぞ」

部屋に二人を入れて篝さんの分のコップを用意して紅茶を渡す。

「どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「わざわざ申し訳ありません」

二人が向かい合ってベッドに座っているので私は三角形になるように椅子を出して座る。

ちなみにこの部屋、本来二人部屋なのに私一人のせいでひとつのベッドは完全に荷物置きと化しています。

「それでお話というのは？」

「ええ、そのことですけど・・・」

少し間を置いたので私は紅茶を啜る。
む、少し砂糖入れすぎたかな？

「お二人は一夏さんのことを好いてますわよね」

「ぶっ！」

思わず口に含んでいた紅茶を吹き出してしまった！

さらに二、三度咽てようやく落ち着いたところで尊さんが口を開いた。

「それがどうした。お前には関係ない」

「わ、私は一夏さんがすく・・・」

「私も一夏さんには好意を持っていますわ！いえ、好意なんて言い方ではありません！これはLove、愛ですわ！」

どうしてこうなってしまったんです！どうしたこうなってしまったんです！？

「映像越しでも分かるあの凛々しいお姿、降り注ぐ弾丸をもろともしない勇敢さ、あれこそ私の求めている理想の殿方ですわ！」

あー、私のせいですか・・・私のせいなんですな。
篝さんすいません。私のせいですごめんなさい。

「な・・・！この間まで男を侮辱していたやつという言葉とは思えないなこの猫被り！」

「あらあら、好きな人の前で鬼の形相をしているよりはマシだと思いません？」

「ええと・・・あのー・・・」

全く持って私のことは蚊帳の外になってしまっている。ていうよりなんで私は巻き込まれているんですか！？

「コホン・・・本題から反れましたわね。今日はお二人に宣戦布告

をしにきましたのよ！」

ドォーン！という感じでセシリアさんが立ち上がり右手を腰に、左手を私たちに突きつけて言い放ちました。

さて、ここでの宣戦布告なんて悪い予感しかしないんですけど・

・

！

逃げてもいいですか？逃げてもいいですよね！？

「宣戦布告？」

ああ、箒さん！逃げるタイミングをばっちり潰してくれましたね！なんて優しい人なんでしょう！

「ええ。私だけ抜け駆けして一夏さんの恋人になってしまって、後から文句をつけられるのも糞ですしね」

・・・もう箒さんが爆発寸前の顔をして怒りに我を忘れそうなくらい肩を震わせています。

爆発物処理班の電話番号は何番ですか！？

「私は一夏の幼馴染だ！パツと出のお前たちに一夏を渡すものか！」

「分かりませんわよ？選ぶのは一夏さんですからね！」

たち！？たちって言いましたか！？ですから私にそのような感情はあああああ！

私が悶絶している内に二人の会話はドンドンエスカレートしていく。私の穏やかな学園生活はどこへ行ってしまったのだろうか？

カムバツク平穩！

コンコン

そんな時、天の救いか誰かが私の部屋をノックした。もしかしたら近隣から騒音の苦情かもしれないけどそれでも今の状況よりはマシでしょうし……

「お、お二人とも！来客の様なので少しお静かに！」

「む、なら仕方ないな」

「あら。それは失礼を」

二人とも流石に言い争いを止めて静かになったところで扉を開ける。

「ようカルラ」

しまったー！近隣つて一夏さんも含んでましたね！
外を確認しないで開けた私のミスでした！
まさかこの状況の元凶を招きいれてしまうとは・・・

「一夏！？」「一夏さん！？」

一夏さんの声に反応した二人がほぼ同時に扉まで駆けてくる。

「こ、こんな時間に女子の部屋に何のようだ！一夏！」

「そ、そうですね！ま、まままままま！まさか既にカルラさんとそのような関係で！」

ああ、誤解が深まっていくのはもう決定事項なのです。神は我を見捨てたもつたのですか？

・・・神様申し訳ありません。あなたのことを少しでも疑ってしまつとは神の子失格ですね。ちなみに私はキリスト教徒です。

「ん？何言ってるのかはよく分かんないが、俺はカルラの部屋から2人の声が聞こえて、丁度頼みたいことがあったから尋ねただけなんだけど・・・」

「へ？」

「箒には今までどおり剣の使い方を教えて欲しいんだ。白式には雪片式型しかないからな」

「あ……ああ！任せる！」

「そうか、ありがとう」

「そ、それで！？私への頼みというのは！？」

「うん、セシリアには……っていうよりこれはカルラと同じなんだけど、ISの使い方を教えて欲しいんだ。戦いの立ち回りとか仮想の敵とか。二人とも全然動きが違うから練習になると思うんだ」

「ええ！ええ！もちろん協力させていただきますわ！」

「神と悪魔が同じだったというのはなんとという皮肉！いや運命ですか！？」

「私も構いませんよ。寧ろ一夏さんの弱点を探させてもらいますからね」

「そうか。三人ともありがとう。そういえば三人は何してたんだ？」

「わ、わわわわわ私たちは特には何も！」

「そうだな！特にということはない！」

「嘘付け。怒鳴り声がこつちまで聞こえてきたぞ？」

ああ、やっぱりそうですよ。最初にそう言っていましたし。

「ISの議論をしていただけですよ。少々熱くなって大声を出していたことは謝ります。すいません」

「あ、そうなのか？だったら俺も呼んでくれれば・・・」

「PICの原理やハイパーセンサーの応用、反重力力翼などなどの専門用語が飛び交う会話ですが呼んだほうがよかったですか？」

「遠慮しておきます・・・お構いなく」

とりあえず適当にISの教科書に出ている難しい単語を並べてみると、一夏さんはシオシオと自分の部屋に戻っていった。

「」「ふっ」

「お二人とももう少し落ち着いて」

「あ、ああ。すまなかった」

「反省致しますわ」

二人とも本当に反省したのかシヨボンとしてしまった。今の段階で一夏さんに恋心を抱いているというのははばれたくないみたい。

「と、ともかく！私の話はここまでです！正々堂々、戦いますわよ！」

セシリアさんが立ち上がって私と篤さんに指を突きつけた。

「ふん！望むところだ！私と一夏の絆がいかに強いか見せ付けてやる！」

「それではカルラさん、お邪魔しました」

「ああ、お茶も美味しかったぞ」

二人はそう言うと部屋を出て行った。
嵐は去りました。後には何も残さずに・・・

「あー！」

一夏さんを好いているって否定するの忘れてた・・・どうしよう・・・
前言撤回です。私に受難が残りました・・・

1 - 10 (後書き)

連投11回目。

というわけですね。アンケートというか『1 - 7』での結果は分割してやったほうが面白い、ということなのでキリのいいところで分割してやっていききたいと思います。

あ、後は質問や疑問も受け付けてます。

何かこの小説で聞きたいことなどがあればこれからの後書きなどで答えていけたらいいなって思ってます。あつた時は前回の後書きみたいにやるみたいなのでよろしくお願いします。

流石にこれからどうなるか、みたいなのはネタバレなので書きませんが、設定については遠慮なく聞いてください。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
ではではまた明日！

2 - 1 (前書き)

連続投稿12回目!

あの宣戦布告事件から数週間。結局翌日否定しても敬遠してるだけと取られてしまったし、あの二人には完全に恋のライバルと認定されてしまったらしい。

クラス代表決定から約半月、4月も終わりに近づいたころ。今日も今日とてISの授業で私たちは第3アリーナに来ています。

今までの半月でISの基礎知識を、今からの半月でISの基本動作を叩き込むということでしたので今日から本格的にISを使った授業に入る。

流石に半月も経つと一夏さんも慣れてきたみたいで、授業も集中して聞いているみたいですね。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、カスト。試しに飛んで見せる」

『はい!』

3人で前に進み出てISを起動させる。いつも通り首に掛かっている指輪を握りこんで意識を集中しISを呼び出します。

よし、今日もいい感じ。

「何をしている。オルコットやカストは展開まで一秒かかっていないぞ」

その声に振り向くと一夏さんはまだ慣れていないようで呼び出せていませんでした。

右腕を突き出して一夏の専用ISの『白式』の待機状態のガンレットを左手で掴みました。あれから何度かISを起動させる機会がありましたがあれが一番集中できるようですね。

その瞬間一夏さんを白い光が包み込み、次の瞬間にはあの白い『白式』を身に着けていました。

うん、相変わらず綺麗な白色だ。

ちなみにセシリアさんはとっくに『ブルー・ティアーズ』を呼び出しています。

「よし、飛べ！」

言われてからセシリアさんが真っ先に、続いて私、一夏の順に空へと舞い上がる。

一夏さんはまだ垂直上昇に慣れていないのか、私たちに追いついてこれていませんね。

『何をしている。スペック上では二人のISよりお前の白式の方が上だぞ』

開放通信から織斑先生の容赦のない叱責が飛びます。

確かにそうですが急上昇急降下は昨日習ったばかりなんですけど・
・一夏さんは一回実戦を行っているので昨日習った内容としては
考慮されていないのでしょうかね。

「進行方向に角錐をイメージって言ってもなあ・・・」

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすい方
法を模索するほうが建設的ですよ？」

「そうですね。正直言って私もそうです」

「そうは言ってもなあ。大体・・・空を飛ぶ感覚自体がまだあやふ
やなんだよ。どうやって浮いてるんだ、これ？」

私もセシリアさんも最低一年は飛んでますからね。まだ半月ほど
の一夏さんでは中々イメージがつかないのでしよう。

私も最初はそうでしたし・・・

「説明してもいいですけど、長くなりますわよ？」

「ええつと反重力力翼と、流動波干涉の話と、あと・・・」

「いや、いいや。遠慮しておく」

ただでさえ初心者なのに専門用語を連発されて、一夏さんはそれこそ頭がパンクしてしまうといった風に肩を落とした。

「ふふ、残念ですわ。一夏さん？よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ？その時は二人きりで・・・」

『一夏っ！！いつまでそんな所にいる！早く降りて来い！！』

セシリアさんが何か言いかけた時、聞きなれた声が物凄い音量で響いた。

下を見ると山田先生のインカムを箒さんが奪っていました。

って、生徒にインカム奪われるって先生としてどうなんですか山田先生・・・

『何をしているか馬鹿者が』

『痛っ！』

まあそんなことすれば当然織斑先生のお叱りを受けるわけで。

予想通り箒さんの頭には出席簿トール・ハンダーが炸裂した。

その箒さんの目の端に涙が浮かんでいるのが見えるのもISならではの特性。そもそもが宇宙空間での活動を想定されているから何万キロも離れた星の位置で自分の居場所を確認しないといけないため、これくらいは苦ではないらしい。

ちなみにこれでもまだ制限が掛かっているというのだから東博士

というのは本当に天才だ。

『3人とも、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10cmだ』

「了解です。ではお二人とも、お先に失礼しますわ」

そう言ってセシリアさんが地上へと向かう。あっという間に小さくなったセシリアさんは地面直前で見事に完全停止をやってのけた。

「では私も行きますね」

「あ、ああ」

背中ของブースターを吹かして急降下。地表直前で全ブースターを逆噴射してピッタシ10cm、セシリアさんの真横につけた。

「よし、次！」

織斑先生の言葉と共に最後の一夏さんが急降下してくる。直前で逆噴射……したのだけど

「やばっ！」

ズン……

勢いをつけすぎたのか、激突は避けたようだけど地面に右膝をついて膝立ちの状態になってしまっています。

「馬鹿者が、誰が接地しろといった。空中で止まれといったんだ」

「すみません……」

「あと勢いも足りん。あれでは実戦で遅れを取るぞ。精進しろ」

「はい……」

そういえば起動一回目で墜落してましたね……ちょっとトラウマなんでしょうか？

「よし、では三人とも、武装を展開しろ。ああ、そう言えばカストのISは最初から展開されていたな。ではそれ以外の武装を展開しろ」

『はい……』

「セシリアさんは当然『スターライトmk?』、一夏さんは『雪片式型』、私は『ゲリュ』を展開する。」

ちなみにタイムは私とセシリアさんがほぼ同時の0.5秒、一夏さんは0.7秒。

「遅い。0.5秒で出せる様になれ」

ぱっさり切られましたね。ご愁傷様です。

「二人は流石代表候補生と言ったところか。ただしオルコット、そのポーズはやめろ。横に向かって銃を向けて誰を撃つ気だ？正面に向けて展開できるようにしろ」

セシリアさんのライフルには既にマガジンが装填されていていつでも撃てるような状況なのですが、左腕を真横に突き出している展開でした。それが織斑先生にはひっかかったようです。

「で、ですがこれは、私のイメージを纏める為に必要な・・・」

「直せ。いいな？」

「は・・・はい・・・」

正に一刀両断です。正面に構えるように教えてくれた先輩方には本当に感謝します！

無駄な動作はコンマ一秒とはいえ隙が出来る。その隙は戦闘では

致命的となることもある、とそういうことなのでしょう。

「次だ。まずオルコット、近接用武装を展開しろ」

「あ、は、はい！・・・あ、あら？」

？

どうしたんでしょう？セシリアさんの右手には小さな光がクルクルと回っているだけで一向に形になりません。

「ふむむむむむ・・・！」

そういえば思い出しました。クラス代表決定戦のときも確か近接武装を出そうととして間に合っていませんでしたね。本人が遠距離狙撃タイプなせいで近接武装を展開しなれていなんでしょう。

「ああ、もう！『インターセプター』！！」

半ばやけ気味に武装の名前を叫ぶとようやく近接ショートブレード『インターセプター』がセシリアさんの手元に現れました。

しかし武装の名前を呼んで出すのはIS教本の頭に載っている所謂『初心者用』の出し方で、こんな時間が掛かっているは・・・

「何秒掛かっている馬鹿者。実戦でも相手に待ってもらうつもりか？」

織斑先生が頭に手を置いてヤレヤレといった感じで言います。

「じ、実戦では接近なんてさせませんわ!..!」

「ほう、カストの時はそれが間に合わなかったせいで負けたのにか？」

「う・・・」

いえ、こっちを見られても過去のことですし・・・あの時はああしないと負けちゃうんですからしょうがないじゃないですか！

こ、今度一緒に近接戦闘の練習をしましょう。ええ、一夏さんと一緒にセシリアさんも満足できるでしょう。

むしろ一夏さんに教えてあげてって頼めばいいんでしょうか？あ、それだと箒さんがはずされてしまいますね。

ということも箒さんに二人の近接戦闘の練習を頼めばいいのではありませんか。そうですね。それなら・・・

いえいえ、それだと恐らく一夏さんは私も誘うでしょうし私が皆さんに教えれば・・・

「次、カスト。同じく近接用武装の展開だ」

「ひゃい！」

い、いけないいけない。今は授業に集中しないと・・・

『デザート・ホーク』に搭載されている量子化された近接武装は『ブリュナーク』しかないのもそれをイメージ。

右手が一瞬光って『ブリュナーク』が実体化、私はそれをいつものように・・・

「あ・・・」

「ほう・・・教師に武器を突きつけるとはいい度胸だ」

そう、最悪なことに・・・いつもの様に頭上で数回回してから正面に構えてしまった。

つまり傍から見ると『ブリュナーク』の先端を織斑先生の鼻先に突きつけている状態なわけで・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・」

気まずい・・・非常に気まずいです！いえ、もうこれは気まずいとか言うレベルの問題ではなく死活レベルの問題です！

セシリアさん・・・完全に目を逸らしてます。
篤さん・・・流石に無理だっって顔をしています。
一夏さん・・・目で諦めろっって言ってます。
山田先生・・・あわあわしています。
クラスの皆さん・・・なんで手を合わせてるんですか！そして何故念仏を唱えてるんですか！布仏さんだけは何故か手を振ってます。

ああ、その優しさが痛い！

日本ではこういう時にどうすれいいんでしたっけ！？えっと・・・
えっとお！
そうだ！

「すみませんでしたあ！」

両膝をびったり合わせ地面について、地面に頭をつけて両手をその頭の上で地面につける。

ジャパニーズドゲザ。目上の人に失礼をした時、日本ではこうすると書いてありました。

必ずしも許される謝り方ではないですが最上級の礼儀だと・・・

「ふん」

「痛い！」

私の頭に出席簿・・・しかも横じゃなくて縦のが炸裂しました・

あの・・・織斑先生？ISの絶対防御があるのになんでただの出席簿が痛いんでしょうか？

セシリアさんのBTLレーザーの直撃を受けた時よりも痛いんですけど・・・

「貴様もその癖は直せ。一々上で振り回すくらいなら元々正面で構えろ」

「わ、分かりましたあ」

結局私はその日ISで生身の人間にドゲザした史上初の人間としてクラスで噂される羽目になりました・・・

皆さんクラスの恥になるので言いふらしはしないでくれたのが唯一の救いです。友情って美しいですね。

あれ？なんででしょう？目から汗が止まりませんか？

2 - 1 (後書き)

連投12回目。今回から2章ということで鈴編に入りました。
鈴出てきてないですけどね！キリがよかったので章を変えました。

今回は原作にもあった日常授業風景にカルラを投入しただけなので
ほぼ原作どおりですね。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。
評価、感想をもらえたら作者のテンションが倍ブッシュしますw
ではまた次回

追記、PV32 / 928アクセス ユニーク5 / 038人

こんな駄文にこれだけの人が見てくれるなんて感謝感激です！
これからもがんばりますのでよろしく願います！

2 - 2 (前書き)

連続投稿 1 3 回目!

さて、席が後ろと言つことはどういふことなのか？

「なあカルラ、さっきの授業のこつてどういふ意味だ？」

一夏さんに物凄い話しかけられます。特に授業の後はこんな感じで尋ねられるのだからどうしようもないですね。

「ああ、これはですね。その前のページの図を参照にして・・・」

それに答えている私も私だ。これでは箒さんとセシリアさんに関係を疑われても無理はない。

その上あの夜から私は妙に一夏さんを意識してしまつようになつていた。教科書を覗き込んでいると顔が触れそうな距離にあつたら慌てて離れてしまつたり、手が触れ合った程度でうるたえたりと、とにかく今まで何でもなかった行動が一つ一つ気になるのだ。

こつちやって気になり始めると一夏さんの鈍感さも非常に目立つ。なにせ他のクラスメイトたちはその行動だけで気づくのには本人は「？」を浮かべるだけで全く気づいていないのだ。

前も思つた通り流石に恋愛感情として一夏さんを見ているわけではないのですがこれはこれで悔しい気がするんですけど・・・

そんな日が続いてあつという間に4月も中盤を過ぎ後半に入りました。朝のSHR前。

？

教室がいつもより騒がしいですね。

「織斑くん、おはよー。もうすぐクラス対抗戦だね」

いつも通り4人で教室に入って席に座ったとき、クラスメイトが話を持ってきた。

「そういえばクラス対抗戦はあと3週間後。はやいなあ。」

「そういえば聞いた？二組のクラス代表が変更になったって話」

「そうそう、なんとかって言う転校生に代わったのよね」

一夏さん曰く、女子の情報網の広さは異常だそうです。

私も女性なので分かりませんがとにかく男性の一夏さんは話に着いていけず、頭に？を浮かべています。

なるほど、教室の騒がしさの原因はその転校生と言うことですか。

「こんな時期に転校生？」

「家の都合か何かかな？」

「分からないけど、何でも中国から来た子だって話だよ？」

「ふふん、今更ながらに私の存在を危ぶんでの戦力強化ではありませんん？」

セシリアさんが胸に手を当てて大げさにアピールする。けど皆はほとんどそっちのけでその転入生の話を聞いていた。

ああ、なんか可哀想やら可愛いやら・・・

「そいつって強いのか？」

「わかんないけど、今のところ専用機持ちは1組と4組だけだし余裕だよ」

そういえば思ったけど随分アンバランスな構成にしたものだと思ってしまう。普通なら他のクラスに割り振るのではないだろうか？
と思ったけど考えれば当たり前です。何せこのクラスには一夏さんがいるんですから他の国がこのクラスに人を入れたがるのは明白ですね。

「その情報、古いよ！」

教室の入り口から声がした。その方向を見ると教室の入口にツインテールが特徴的な小柄で、肩の部分が露出するようにした改造制服を着ている女の子が立っていた。

いえ、まあIS学園ですから女の子か女性しかいないのが当たり前なんですけどね。

あ、ちなみにIS学園の制服は許可さえ取れば改造が可能なので。自由な校風ですよね。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「2組の専用機持ち・・・もしかして貴方が？」

そういえば彼女の顔は代表候補生のデータベースで見たことがある。私の言葉に彼女は腕を腰に当てて仁王立ちの状態で言葉を続けた。

「そう！この私、中国代表候補生、ファン 凰 リンイン 鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！」

周囲の視線がその言葉で一気に凰さんを集まる。

ああ、それにしても法治国家日本で宣戦布告なんて物騒な言葉を

「二回も聞くなんて・・・！」

「そういえばIS学園は条約上『どの国にも属しない特殊な場所』にあるんでしたね。忘れてました。」

「お前・・・鈴か！？どうしたんだ、カッコつけて！全然似合わないぞそれ！」

「な！1年ぶりにあつた幼馴染に対する最初の言葉がそれ！？」

幼馴染・・・はて？でも篤さんは全然知らないような顔をしてますけど・・・？

全然関係ないですけど鳳さんって見た目可愛いのに口調がすごい乱暴ですね。

「175」

いつの間に来たのか織斑先生が鳳さんの頭を出席簿で叩いた。

「っ！いったー！なにすんの！？」

ああ、そんな相手を確認する前にわざわざ火に油を注がなくても・・・

「もうSHRの時間だぞ、さっさと教室に戻れ」

「げ、千冬さん」

「ほう・・・教師に向かって開口一番『げ』とは恐れ入る」

最前線にニトログリセリンを投げ込みましたね・・・

織斑先生が指をコキコキと鳴らすと、凰さんが一步後ずさる。あの人にアイアンクローをされた日には顔についた跡が消えなさそう
で怖い。

一夏さんの幼馴染ということとは織斑先生とも面識があるのでしょ
う。どうやら苦手みたいですけど

「それから、学校では織斑先生と呼べ」

「す、すいません」

織斑先生が入るために凰さんが道を譲る。どうやらまた叩かれる
ということとは避けたようです。

「また後で来るからね、逃げないでよ一夏!」

そう言いながら凰さんは教室に戻っていった。

「何で俺が逃げる必要があるんだよ」

まったくもってその意見には同意します。セシリアさんといい鳳さんといい何故逃げるなど言っただけじゃあないでしょうか？

「織斑、いつまでくっついてる。出席を取るから黙っている」

「は、はい！」

でもあの鳳さんの反応からしてまた一夏さんが好きな人なんですよ。また障害が一つ増えそうですね。

ん？障害ってなんの？

その日の昼休み。すっかりお馴染みになった私、篝さん、セシリアさん、一夏さんと今日はもう一人、二組の鳳さんも一緒・・・というより食堂で待ち伏せして今日は5人です。

そして今はそれぞれの昼食を持ってテーブルを囲んでいます。

篝さんとセシリアさんからは何か気迫に似たような空気がチリチリと。

「で、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにIS使ってるのよ？ニユースで見た時はビックリしたじゃない！」

そんな二人を尻目に一夏さんと凰さんは会話を進めています。幼馴染というのは本当のようですね。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが！？」

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方とっ、つき・・・付き合ってたっしやいますの！？」

流石にじれったくなつたのか篤さんとセシリアさんが切り出します。何かまた面倒ごとが始まりそうな予感がします。

ああ、お茶がおいしい。これはどこの銘柄のお茶なのでしょう？

「べ、べべべ別に付き合ってるってわけじゃ・・・！」

「そつだぞ？何でそんな話になるんだ？ただの幼馴染だよ」

「むう・・・」

ほう、これが玉露ですか。道理でおいしいはずです。

「コホンッ、私の存在を忘れてもらっては困りますわ！ 中国代表候補生、凰 鈴音さん！」

「誰？」

「なっ！私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！まさかご存じないの！？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「うーん、それはそれで問題があるような。でも戦争でもない限り実際戦う相手が決まってから調べても遅くないわけですし無問題ですな。」

「玉露と知ってから飲むとまた一段とおいしく感じるのはどうしてなんでしょう？」

「あ、あのさあ。ISの操縦、あたしが見てあげてもいいけど？」

「ああ、このデザートも美味しいです！紫で四角くてプルプルしています。突っっていると弾きかえってくる弾力が溜まりませんね。なんというのでしょうか？」

「一夏、何ならアタシが見てあげようか？ISの操縦の！」

「一夏に教えるのは私の役目だ！頼まれたのは私だ！」

「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ！」

「あたしは一夏と話してんの。関係ない人は引っ込んでよ」

「関係ならあるぞー！」

ね。
あ、これが羊羹というのですか。やっぱり資料と実物は違いますね。

「後から割り込んできて、何をおっしゃってますの！？」

「後からじゃないけどね・・・あたしの方が付き合い長いんだし」

「それを言うなら付き合いは私のほうが早いぞ！」

なんと！食後にお茶漬けを食べるのですか？ふむう、日本の食文化とは奥が深いんですね。

「うちでの食事ならあたしも何度もあるけど？」

「い、一夏！どっいっことだ！」

「納得のいく説明を要求しますわ！」

「説明も何も・・・鈴の実家の中華料理屋で飯食ってただけだぞ？」

お腹がきつくなるかと思いましたが、これは案外いけますね！新しい発見です・・・

「放課後は私とISの訓練をするのだ！時間など空いていない！」

「そうですね！クラス対抗戦に向けての特訓が必要不可欠な今、他のクラスの方と接する時間はありませんわよ！」

「じゃあその後でいいや、空けといてね」

嵐さんはそれだけ言い放つと返事も待たずに空になったトレーを持って去っていきました。

ふむ、お話は終わったようですね。やはり嵐は黙って引きこもるに限ります。

今日は新しい食文化に触れることが出来て食事の時間も有意義にすごせました。これでまた一つ勉強になりましたね。

「一夏、当然訓練が優先だぞ！」

「私たちも有意義な時間を使っているのを忘れなく！」

一夏さんがお二人の台詞に大きく肩を落としました。おお、今回は私は何もありませんでした。

今日の一言、『触らぬ神に祟りなし』

意味、その物事にかかわりをもたなければ、災いを受けることもない。余計な口出しや手出しをしないほうがよい、といったとえ。

日本には素晴らしい格言があるのですね。これからこの言葉を参考にしま・・・

「カルラ、一緒に頼む！」

できないようです。

2 - 2 (後書き)

連投12回目でした。

ちよびつと意識始めるカルラ・・・無意識を操る程度の能力！
さて・・・こっからどうするかね・・・

今回昼時は言葉が途切れ途切れですがこれは原作を見てくださればちゃんと台詞になっているので全部書くのもどうなのかな？って思ったためです。原作見てない人にはすいません。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

感想、評価もお待ちしております。

ではまた次の話で！

2 - 3 (前書き)

連続投稿14回目!

鳳さんが来たその日の放課後、第2アリーナ

結局やることは変わりません。

一夏さんは呆れながらも訓練することは必要だと理解したのでしよう。

一夏さん、篤さん、セシリアさん、そして私の4人は一夏さんのIS訓練のためアリーナに集まっていた。篤さんもアリーナにいるのは訓練機の使用許可が下りたためだ。

日本の第2世代型IS『打鉄』。一夏さんが最初に乗った量産型ISと同じものです。

「せっかく使えるようになったのだ。ならば剣の稽古もISでするべきだろう」

至極真つ当な意見です。一部の隙もない理論ですね。

「ま、まさかこんな早く使用許可が下りるなんて計算外でしたわ」

「そうは言ってももうすぐ5月ですし・・・学年別トーナメントもクラス別マッチが終われば案外直ぐですから」

「むじょ」

セシリアさんは唸っているが下りてしまったものはしょうがないので諦めましょう。

「では一夏、始めるとしよう」

「お、おう」

そう言つて篝さんが『打鉄』の近接ブレードを構えたのを見て一夏さんも構える。

篝さんはその雰囲気も合っていて『打鉄』がすごい似合いますね。

「お、お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこの私ですてよ！」

「ちょ……！セシリアさん!？」

セシリアさんがそれを見てISを装着する。まさか二対一でも行う気なのだろうか!？

いくら機体が高性能で操縦が上手いとしても一夏さんは初心者、それは無茶がある。

そういう戦いに慣れるのはもっと後のほうが……

「カルラ……」

「は、はい!?!？」

「助けてくれ」

割と本気の声で助けを求められた。
し、仕方ありませんね。

「では二対二でやってみましょう。折角4人いるんですし」

「お、いいなそれ。じゃあ俺は……」

「私が一夏さんと組みますわ!」

「私が一夏と組む!」

一夏さんが言い切る前に二人が同時に言い放った。これじゃあ進まないじゃないですか……

「ローテーションで回しましょう。クラス別マッチまで時間がありますし……とりあえず今日は一夏さんが決めるということで」

「わ、分かりましたわ」

「そうだな。一夏が決めるのが一番いいな」

「当然私ですわよね!??」

「当然私と組むよな！？一夏」

いきなり迫られた一夏さんは・・・

「えっと・・・今日はカルラと・・・かな」

あろうことが私を選んでしまいました。完全に私の提案は裏目裏目に出てしまっています。

「な、何故だ一夏！」

「や、だって二人とも何か今日怖いし」

まあその気持ちは身近で見てる分痛いほど分かりますけどね。

「ま、まさかここまで狙ってタッグ戦を提案したというんですの！？」

「今まで静かにしていたのもこのためと・・・く、中々侮れないなカルラ」

ああ、こうしてまた誤解が深まっていくんですね・・・

ちなみにこのタッグ戦、二人とも一夏さんに八つ当たりとばかりに攻撃を集中して私は眼中にないようでした。

結果だけ言えば3勝0敗で私と一夏さん組の勝ち越しなんですが、
・勝った気がしません。

特にボロボロになった一夏さんと対照的に装甲さえ全く無傷の私はどう声を掛けるというのでしょうか。

えっと……

「ごめんなさい一夏さん。こんな時どんな顔したらいいか分からないんですけど」

「笑えば……いいと思う……よ……ガク」

笑えません。

「ふんふんふーん」

訓練が終わった後、久しぶりに今日は時間があります。

何故って、それこそISが無傷だったからに他ありません。弾の

補充はすぐ済みましたし、傷がない以上直す必要がありません。

というわけで私はいつもより二時間ほど早く部屋に戻って趣味に没頭できるというわけです。

隣で篤さんと鳳さんらしき声の言い争いが聞こえてきたりしていましたがそんなことは関係ありません。ええ、ありませんとも。

「ふんふーん」

自然と手の中のをものを拭く作業で鼻歌も出るといふものです。

ちなみに今手にあるのは大型拳銃『デザート・イーグル』。アメリカ製で自動式拳銃の中では世界最高の威力を持つ弾薬を扱えるという一品です。

ああ、鈍い鉄の光沢・・・無駄のない綺麗なライン・・・そして何ととってもこの重量感。たまりませんね。

『デザート・イーグル』の整備を終えて壁にかかっている飾り棚に戻す。こういう時一人部屋はいいですね。誰にも趣味に対して言われません。

えっと次は隣の『グロック17』ですね。うーん、『ベレッタM92』の整備は明日ですかね。流石に一日二丁くらいしておかないと集中力が持ちませんからね。

銃の整備は時間が掛かりますが・・・まあその時間がいいといふかなんと言つか。

ゴンゴーン！

『グロツク17』を手に取った瞬間誰かが扉を叩く音がしました。
・・・嫌な予感しかしません。だって『コンコン』じゃなくて『
ゴンゴン』ですよ!?

来訪者の方には申し訳ないですがここは居留守を・・・

ゴンゴンゴンゴン!ベキイ!

ちよ!明らかに破壊音なんですけど!?

敵襲!? 敵襲なんですか!?

つて鳳さん?

?

なんで真つ青な顔で両手を上げているのでしょうか?

「あ、あたしが悪かったからその銃しまってください!」?

「へ?」

言われて気づきました。そういえば『グロツク17』を持ったまま
までした。

でも私の銃に弾は入ってないんですけどね。撃たないんですから
弾なんて持っても無駄なだけですし。

慌てて『グロツク17』を寝巻きの腰に挿して手を離しました。

「殺されるかと思ったわよ」

「すすす、すいません！」

「大人しそうな顔してあんた随分な物もってるのね……」

「はあ、ちよつとした趣味で」

「まだ護身のほうがいいわよ……趣味ってなによ……」

まあ……そうですね……分かってるんです、変な趣味って言うのは。

でもあの無駄のないフォームを一目見たときから好きになってしまつて……その後は成り行きでズルズルと大型銃器にまで手を出す始末で……でも大型銃器はいくらIS学園と言えども持ち込むのが難しいと言うことでまだ交渉中なんですよね。

それは置いておいて！

「そ、それで？こんな時間に何のご用ですか？」

「あー、いやなんていうかさ……頭に血が上ってたから殴り込んじゃったんだけど……さっきの下がったわ。ごめん」

「はあ……一夏さんのことですか？」

「・・・なんのことかしらね！」

分かりやすいんですから。

これで何で一夏さんが気づかないのか不思議で仕方ないのは私だけではないはずですよ。

・・・目の端に涙の跡があるのはなんでなのでしょう？

一夏さんは女の子を泣かすようなことはないと思っていたのですが・・・鳳さんはプライドが高そうですねし言わないほうが吉ですね。

「あー、用事・・・用事・・・ああ！そうよ！あんた一夏に勝つたのに代表候補辞退したらしいじゃない！」

明らかに今思いつきましたね。その用事。

「ええ、私そういうガラじゃないので」

「まあ見た目争い事好まなさそうな顔してるもんね。決闘・・・つていってもあんた受けなさそうだし」

「そうですね」

セシリアさんの時も売り言葉に買い言葉でしたから。正直一夏さんとは戦う理由がなかったので戦いたくなくなりましたよ。

当然理由がない鳳さんとは臆病者と言われても戦いませんよ？

あ、故郷や友達を侮辱されれば言われなくても戦いますけどね。

「んー、じゃあいいや。あたしの変わりにクラス代表戦まで一夏のこと鍛えておいてよ。あんまりあっけないんじゃないんじゃ味気ないでしょ？」

「鳳さんはいいんですか？」

「ま、やるならあたしも負けたくないしねー。自分の手の内はなるべく残しておきたいし」

セシリアさんといい鳳さんといい代表候補生は負けん気が強いのが特徴なんでしょうか？まだ二人しか会ってませんけど。

「それじゃ頼んだわよ。あんた、さっきの二人よりは仲良くなれそうだしね」

「はあ、分かりました」

「んじゃ、邪魔したわね」

そう言って鳳さんが部屋を出て行くこととします。

「あ！待ってください」

「ん？何か用？」

ええ、ありますとも！

「ドア、直していつてください」

「あ・・・そっか・・・」

結局その日はドアが直ることはなく、一日ドア無しで過ごすことになったのは全く別のお話です。

翌日、廊下にはクラス対抗日程表が張り出されました。

「マジかよ・・・」

隣の一夏さんの声が聞こえます。それはそうでしょう。私もそう思います。

クラス代表対抗戦、一回戦第一試合、一組VS二組

しからず一類を二と鳳を三の戦い・・・とてしむべしからず。

2 - 3 (後書き)

連投14回目。はじめてから2週間と言うことですね。
作者の個人的な感覚ですけどカルラと鈴は相性いい気がする。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
感想と評価をもらえると作者のテンションがウホオオオ！します！

手探りでお試し

質問(?)に答えるコーナー

はい、二回目です。といってもオリ設定じゃなくて今回はちよつとした疑問に答える回です。というわけで今日はこの人に来ていただきました。

???「えつと・・・初めまして。カルラ・カストです」

はい、主人公のご登場ですね。

カルラ(以降カ)「それで今日はなんで呼ばれたんでしょうか?」

うん、とりあえずこの紙の内容読んでもらえる?

カ「へ?はあ・・・えつと、76、56、75・・・ってこれって
! / / /」

んー?どうしたの?ただの数字でしょ?(ニヤニヤ)

カ「あうあうあうあう／＼／＼／＼」

まあぶつちやけて言うとかルラのスリーサイズなわけで・・・

カ「ぶつちやけないください！」

まあ今まで『設定』では発展途上ってことで内緒にしてたんだしいいじゃん。

カ「よくないです！今すぐなかったことに！」

ごめん、この内容考えるのにも時間かかってるし消すとかないわあ

カ「なにメタってるんですか！乙女の一大事なんですよ！他の皆さんのスリーサイズは公式でさえ決まってるのになんで私だけなんですか！」

おおう、カルラもすごいメタ発言だぞ。

まあ元々後から上げる予定だったしそれが早まっただけで結果は変わらないと言うでっていうw

ジャキン！

あれ、カルラさん？なんでIS起動させてるの？

いや、ちよ、『ゲリユ』なんて取り出してどうしたの？

カ「なかったことにい！」

待て待て！『ゲリユ』のグレネードとかまだ本編でさえ使っていない

から！こんなところで撃つてどうするんだ！

カ「あなたを殺して私も死にます！」カチッ！

ぎゃあああああああああああ！

ドン！

ギャグパートじゃなきゃ死んでいた・・・
また機会があれば誰かに登場してもらいます。では ガクッ

追記

『設定』にカルラのスリーサイズを追加W

2 - 4 (前書き)

連続投稿15回目!

クラス対抗戦まで残り一週間。各アリーナは対抗戦のための調整に入るので実質今日が最後の訓練日です。

現在いる場所はいつもの第3アリーナ。今は私一人ですが後から3人も合流する予定です。

最近一夏さんとの訓練ばかりで自分の鍛錬を怠ってましたからね。

右手に『ラングリスニ』左手に『ラングニスト』を構えて射出されてくる模擬戦用ターゲットを撃ち落とす。

しばらくそれを繰り返し高機動モードから反撃モードへ。ターゲットから射出されてくる攻撃を避けながら的に『ラングリスニ』を、近距離のものには『ラングスト』を叩き込む。

ガチン！

『ラングリスニ』が鉄を弾く音と共に弾が切れたのを理解する。弾幕の薄くなった右側からターゲットが迫ってくるのを左手の『ラングニスト』で撃ち落とし、『ラングリスニ』に銃剣をオープンし、同時に弾切れになった『ラングニスト』を左腰に戻す。

「はあっ！」

『ラングリスニ』で気合の声と共にターゲットを突き刺し、引き抜くと同時に左手でマガジンを装填。セミオートに切り替えて近距

離は突く、遠距離は撃ち抜くという行動をマガジンがなくなるまで続ける。

マガジンが切れると同時に目の前に『completed』の文字が表示されます。

頭の周囲に今の訓練のデータが表示されます。

うーん、命中率73%に撃破率85%・・・射撃命中率落ちましたね。近接戦闘の洩らしは一個もないのに。

やっぱり一夏さんと訓練するようになってから近接戦闘多くなつたせいですかね？

それに命中率73%というのは簡単に言えば無駄撃ちです。無駄撃ちはいけません。弾代だって撃つたら撃つた分だけ本国に請求されるんですから多少は自重しないと。

それと被弾率9%というのも案外問題なんですよね。セシリアさんレベルが相手だとこれ以上簡単に行くでしょうしもっと精進しないと

「お待たせしましたわね」

声に振り返るとセシリアさんが、その後ろに篝さんと一夏さんが来ていました。

???

なんで一夏さんはものすごい落ち込んでいるんでしょう？

「あ・・・」

「ああ、これは一夏さんのせいですので気にしないでいいですよ？」

「え？でも……」

「ああ、あれは一夏が悪い」

「え？え？」

「うん、俺が悪かった……」

「はあ……」

意味が分からないですけど『触らぬ神に祟り無し』ですね。
予定通り行きましようか。

「で、では今日も訓練を始めましょう」

「ああ、今日が実質最後だからな。なるべく有意義なものにしない
と」

「そうですね」

皆さんがまだISを展開していなかったのでセシリアさんの時も
やったとおり、空中に画面を映し出して皆さんに見えるようにする。
目の前に映っているのは鳳さんの専用機、中国第三世代型IS『

甲龍^{シエンロン}。今回も文章のみですけどね。

「ではこれまでに分かった情報を一夏さんにお教えします」

「これには私の分析が入っていますのよ？存分にお役立てになってくださいね！」

「お前だけなものか！これは私が・・・ゴホン！私たちが分析した結果だ！」

いえ、どうでもいいですけどお二人とも、言い争いは後で・・・
はあ・・・

「始めても？」

「お、おう。頼む」

言い争ってる二人を置いて話を進めてしましましょう。

「まずこの『甲龍』ですが、コンセプトとしては私の『デザート・ホーク』と似たところがあり、燃費と安定性を第一に設計されています。策無しで行くと燃費の悪い『白式』はほぼ確実に負けます」

「お、おう・・・」

『白式』の単一仕様能力、ワンオフ・アビリティ『零落白夜』れいらくびやく。

あ、単一仕様能力っていうのは、操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する固有の特殊能力のことで、他の人には絶対真似できない、正にその人だけの能力のことですね。私も使える人を見たのは一夏さんが初めてです。

しかも通常第二形態から発動するものであって、それでも発現しない可能性の方が高いんです。それが第一形態から発現するなんて相性がいいとかの問題じゃないですよ全く・・・

それで今までの訓練で分かったのは相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアーを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられるという反則的な最高レベルの攻撃能力。

ただ、反面シールドエネルギーを攻撃に転化する能力のため、極端に燃費が悪い。

攻撃するたびにシールドエネルギーを使うんですからゲームで言うところとHPやMPを常に削りながら戦っているようなものです。

「そして武装ですがこれは少数・・・まず近接用武装の『双天牙月』。双と名の付く通り二本で一对の青龍刀だそうです」

「ちなみに先ほど少し見ましたが明らかにパワータイプでしたわよ」

「ああ、パワーだけなら『白式』を上回っているかもしれん」

いつの間に争いが終わったのか、セシリアさんと篤さんが一夏さんと同じくデータを見ていました。

「次の武装ですが、これが曲者です。セシリアさんの『ブルーティーズ』と同じ第三世代型兵器『龍砲』。情報によると衝撃を砲弾として打ち出す衝撃砲、ということですよ。やはり文章ではこの程度の理解が限界ですが……」

「んー、もっと分かりやすく言っと？」

「そうですね……ドラ もんって知ってますよね？」

「ああ。もちろん」

「あれの空気砲と原理は同じです。ただ圧縮した衝撃を飛ばすか空気を飛ばすかの違いですね」

「なるほど、あれ？ってことはつまりそれって……」

気づいたようですね。この武装の特徴……

「はい、恐らく……というかほぼ100%の確立で相手の弾丸は見えませぬ」

「ああ、結局私たちもそこに辿り着いた」

「いくらバリア無効化とはいえ、衝撃の塊では切り裂くことも回避することも困難ですわね」

「おいおい・・・それじゃ打つ手なしか!？」

「一夏さんじゃなければ色々手はあるんですけども・・・」

「そうだな。一夏じゃなければ・・・」

「おい・・・」

正確に言つと一夏さんの『白式』では、なんですけどね。近接武装しかないので突っ込むしかないわけです・・・

「しかし今から射撃のノウハウを教えても今日だけでは身につきませんし・・・」

「うむ」

「ですわね」

「だああああ!どうすんだよ!結局突っ込むしかないのか!？」

「分かってるじゃないですか」

「は?」

「一夏さんには近接戦闘しかない。ということは接近しなければ戦えない」

「あ、ああ」

「なら私がセシリアさんにやったのと同じように、射撃兵器を使わせる隙を与えなければいいんです。ですから今日は……」

そう言って私は腰部の『レヴァテイン』を引き抜いて一夏さんに突きつける。

「射撃武器を切り抜けてからの接近戦を主にやります」

「ちなみにこれは3人の総意ですよ？」

「ああ、今日は覚悟しろ一夏」

そう言ったときにはもうセシリアさんも篤さんもISを身に着けている。

ちなみにセシリアさんは左手に『スターライトmk?』右手に『インターセプター』を展開しています。篤さんは『打鉄』なので近接ブレードしかないのは仕方ないですね。

「さ、時間がもったいないので一夏さんも」

「あ、ああ……」

そう言って一夏さんが『白式』を身に着けました。

さあ、訓練（地獄）の開始ですね

「おい、ちょっと待て！何か三方向から警告出てるんだが！？」

「当然ですわ」

「今までの話を聞いてなかったのか？」

「いやいやいや！まさか3対1か！？そんな無茶な！カルラにだけの時だつて負けたんだぞ！？」

「勝つ必要ありませんからね」

「は？」

「今から鍛えるのは反射神経とか状況判断能力とかですから。私たちに勝つのではなく、いかに相手の隙を見て懐に入り込むかの訓練です。本当はもう少し早く出来ればよかったです……」

この訓練方法だと一夏さんがもたないですからね。最終日にしか持って来れなかったという悲しい事実が……

「一回では付け焼刃かもしれませんがやらないよりはマシでしょう」

「では予定通りに」

「ああ、行くぞ一夏！男ならこの程度は切り抜けて見せる！」

「お、鬼だ・・・鬼がいる」

多分、赤鬼とか青鬼とか考えているんでしょうね。私とセシリアさんは髪と機体の色的に結構そのままですから。

あ、そうだ。忘れてた。

「篝さん、これ、忘れてました」

「ん？ああ、すまんな」

そう言っつて私の『ゲリユ』を手渡す。前日の内に設定しておいたので篝さんは『ゲリユ』を使えるようになっていきます。

「おおおおおおおい！篝も射撃武器持つのか！？ずるくないか！？」

「実戦にずるいも何もあるわけないじゃないですか？」

あ、今鬼に金棒とか考えてますね。なんでこんな分かりやすいんですしょう？

篝さんとセシリアさんはキツチリ頭に青筋浮いてますし・・・ご愁傷様です。

2 - 4 (後書き)

連投15回目です。

実を言うとこの話、昨日の夜『2 - 3』を上げた時点で急遽作ったもので、ちよつとやつつけ感でちゃってます。そして今全力で明日以降の『2 - 4』『2 - 5』の矛盾点を手直ししています。

というのも先に作っていたものを見直すといきなり一ヶ月くらいの月日が経ってて訓練とか鈴対策とか全然取ってなかったんですね。セシリアの時やったのに今回ないのはどうなの？ってことで作ったら一夏VS鈴戦がえらい矛盾だらけになりました・・・というわけで全力で手直し中です。一応話は大まかには決めてあるので連続投稿は途切れません。そこは大丈夫です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。評価、感想をもらえたら作者のテンションがブルアアアア！します！

前回のようにキャラでの質問もあつた時にはやります。ではまた明日！

追記

・ 20時時点の日間ランキング78位・・・ありがとうございます・・・
・ 自分の小説がこんななんて・・・なんか泣きそうです・・・

2 - 5 (前書き)

連続投稿16回目!

あの特訓（地獄）の日から一週間。クラス対抗戦一回戦の日。

鳳さんと一夏さんの間には以前に何かあったようで、一夏さんからは負けられないという感じがヒシヒシと伝わってきています。

結局鳳さんはその間全然クラスにも来ませんでしたし、根本的な部分で何かあったんでしょね。

今は私、篝さん、セシリアさんはピットにいる一夏さんの様子を見に来ているところです。

既に鳳さんはアリーナの中央で待機していて一夏さんを待っている状態にある。

『甲龍』は赤黒い装甲に特徴的な非固定浮遊部位が両肩の上に浮いているISだ。

「私のような射撃専門とは勝手が違います。お気をつけて」

「むしろカルラのような牽制で遠距離を使うタイプだろう。気を引き締めてな」

「練習どおりやればうまくいきます。基本を忠実に、ですよ」

「ああ、3人ともありがとう」

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

「行ってくる！」

そうやって一夏さんはアリーナに飛び出していった。私たちも管制室に移動してその様子を画面で見る。

その場には既に山田先生と織斑先生が待機していたので、私たちはその後ろから見る形になります。

『それでは両者、試合を開始してください』

開始の合図と共に両者が武器を構え、ほぼ同時に前に出ました。一度交差した後、それぞれの得物を振りかざす。

『甲龍』の武装は情報どおり一対の巨大な青龍刀。それ持つと上から一夏さんに向けて一気に接近し振り下ろした。それをなんとか一夏さんは『雪片式型』で受け止める。

そのまま鏢迫り合い状態で回転しながら上昇し、一夏さんが先に距離を取る。

正しい選択です。パワー型の『甲龍』に機動型の『白式』が付き合う必要はありません。わざわざ相手の土俵で戦わず本来の戦い方、一撃離脱が最も効率のいい戦い方です。

凰さんが積極的に前に出て一夏さんに襲い掛かる。左右の得物を

使った見事な連続攻撃だ。

一撃が重く、その勢いを止めないために遠心力を持って左右の青龍刀を自由自在に振り回している。そのため一撃を受け止めることに一夏さんは厳しそうな顔をしています。

初速が速く突進力が高い。典型的な接近戦タイプのIS。各部のスラスターとブースターがそれを可能にしているのだと思いますが、先ほどから繰り出す回転連続攻撃は純粹な技術ということでしょう。相当な修練を積んでいるということですね。

一夏さんも善戦しているが純粹な技術差と言つのは機体性能の差では中々埋まらない。

「一夏……」

「ああ、もう！何をやってますの！」

篤さんが心配する声を上げると共にセシリアさんがじれったさに山田先生の通信マイクを使って叫ぶ。

「私の教えて差し上げたクロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をお使いなさい！」

『む、無茶言つなよ！』

防戦を繰り広げている一夏さんの声が響く。それでも時折隙を見つけては鳳さんに斬りかかっていくので気負いはしていないようで

すね。

技術で負けているのならば気持ちで負けないことが重要です。負けと思えば勝てる勝負も勝てませんからね。一夏さんは剣道経験者ということですから辺のことはよく理解しているようです。

それに鳳さんにも弱点がないとは言えません。

青龍刀は威力は大きいを取り回しが悪い。しかも二刀となると両手の負担を片手で受けねばならない分受けに回った時のリスクは大きい。『白式』の機動性と単一仕様能力の特性を考えれば十分に勝機はある。

・・・はずだったんですが、なんと鳳さんは青龍刀を連結して攻撃してきた。これには一夏さんもたまらず回避する。

片手であれだけの威力を誇るのだ。両手持ちだとISごと弾かれかねない。

そもそも二つ離しているときでもあれだけの連携を見せたのに、連結した今は青龍刀をバトンのように振り回しながら更に苛烈な連続攻撃を仕掛けてきている。

「カルラ。この戦い、どう見る？」

「ひゃい！？わ、私ですか？」

織斑先生に聞かれて戸惑ってしまったが、言わないのも怖いので自分の考えを伝えましょう。

「そう、ですね。スペック上、機動力では『白式』のほうが『甲龍』を上回っています。それだけならばいいのですがやはり一夏さんはまだまだ初心者です。連続稼働時間が凰さんに比べて圧倒的に足りないため経験が不足していて、そのせいで複雑すぎる機動はできません。今も・・・」

スクリーンを見ると凰さんの攻撃を避け、一夏さんが攻撃を仕掛けようとした。しかし既に凰さんは一夏さんの間合いの外に逃げてしまっている。

「動きを読まれます。勝率が無いとは言いませんが、良くて2割程度でしょうね」

「ああ、私もそう思う」

「そんな！お二人は一夏さんに勝ってもらいたくないんですの!？」

「そんな訳はありません。ですが、状況分析からいってそう見積もるしかないんです。練習でも結局私たちには近づけませんでしたし。何か奥の手があれば・・・」

そう、結局最終日の特訓、一夏さんは回避が精一杯で私たちに迫ることが出来なかった。当然といえば当然ですがあの特訓から何か得ることがあれば、と思ったんですけどこう接近戦が主体では遠距離攻撃を掻い潜って隙を突く、ということができません。

消耗戦になると思ったのか一夏さんは距離を取ろうとしているようです。

確かに『白式』の機動ならば引き離すことは容易です。現に二人の距離はどんどん離れていく。

その途端、一夏さんの背中を何かが掠った！

「な！」

「今のはまさか！」

今、弾丸も何も無い空間が爆発した。

「山田先生。今の攻撃は分かりましたか？」

「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて砲弾を打ち出す武器です」

「あれが……」

「『龍砲』……ですね」

篤さんが強く拳を握り締めているのが見える。

なんとか起き上がった一夏さんにまたも衝撃砲が連射される。一夏さんはそれを感じ取ったのか素早く回避を行う。

見えない弾を不規則な機動で避けつつ『甲龍』を中心に縦横無尽にアリーナを動き回っています。前情報のお陰で焦ることはないようですね。

「弾が見えないというのは予想通りでしたけど・・・まさか砲身も見えないとは・・・」

「しかも砲身の射角がほぼ制限無しで撃てるようですね。先ほど真後ろと真上の攻撃を確認しましたわ」

「そういうことに・・・なりますね」

私の言葉にセシリアさんが答えてくれた。
その間も一夏さんへの射撃は続いていて、必死にそれを避ける一夏さんがスクリーンには映し出されている。

でも・・・これは当初の予定通り・・・これでようやく、ということですね。

「あとはチャンスだけですな」

「そうだな」

「ええ」

篤さんとセシリアさんは既に声だけでこちらを見ていない。画面を凝視している状態です。

砲身、砲弾は見えない。射撃角度は無制限。弾切れもない。これだけ見れば分かっている。でも無敵の兵器だ。ただど……

「ふむ」

なるほど。

「山田先生、少しよろしいですか？」

「あ、はい。どうぞ」

山田先生に許可をとって一夏さんへの回線を開く。

「一夏さん、聞こえますか？」

「カルラか！？今それどころじゃ……！」

「あの衝撃砲の弱点が分かりました」

「エー!?!」

内容を素早く頭でまとめ説明を開始する。

「あの衝撃砲は見ている限り砲身は肩部のユニットにひとつずつで計二門。つまり一度に撃てる数は2発まで、発射まで一瞬ですがタイムラグがあります」

『そのどこが弱点なんだ!』

「ここからです。あの砲身の射撃角度は無制限らしいですけど、それはオートロックではなくあくまでも操縦者がロックしてから射撃をする普通の射撃兵器です。360度確認できるISで死角にというものはありませんが、鳳さんの意識の外に行けば撃たれるラグは大きくなります。ただ不規則に動いても意図が読まれれば弾幕を張られてしまいます。しかし『白式』の機動性なら、認知される前に離脱することが可能のはずです。とにかく常に動き回って相手に攻撃されるかも、という意識を植え付けてください。そうすれば後は最終日と同じですよ」

『わ、分かった!やってみる!』

「ただしこれは今の段階で分かっていることです。隠された能力もあるかもしれませんがお気をつけて」

『了解だ!』

通信を終えて再び画面に目をやると私のアドバイスを早速生かして戦い始めていた。フェイントを入れたり、後ろに回り込んだり、高速で旋回したりととにかく引つ掻き回す戦法を取っています。『

白式』の機動力があればこそ、ですね。

それ以降は明らかに凰さんの撃つ場所がずれている。これならあの射撃はもう当たらないだろう。

ただやはり決定打がない。近づけないのだ。

凰さんは時折接近戦を行ってくるがそれもほとんど反撃されないタイミングで切りかかってくるし、反撃しようとするとはやはり間合いの外に出て衝撃砲を撃つ。

「消耗戦ですわね」

「ああ、長引きそうだ」

「はい」

お二人の言うとおり、消耗戦になれば『白式』は特性のせいで不利です。そうなれば……

「いや、そうでもないぞ」

「……え？」

私たち三人の言葉を織斑先生が否定した。

「織斑君、何かするつもりですね」

ずっと画面を見ている山田先生が呟いた。一夏さんは先ほどの戦法を取りつつも一定の距離を保とうとしている。

何故そんな動きをするのか、その疑問に織斑先生が答えてくれた。

「イグニッション・ブースト瞬時加速だろう。私が教えた」

「瞬時加速？」

ええっと、確か本国で訓練してるとき聞いたような・・・

「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出しどころさえ間違わなければあいつでも代表候補生と渡り合える。ただし・・・通用するのは一回だけだ」

「ああ、なるほど！」

思い出しました。確か後部スラスタ翼からエネルギーを放出し、それを内部に再度取り込み、それを圧縮して放出することで一瞬で最高速へと到達する加速方法。

『雪片式型』のバリア無効化攻撃を確実に当てるための『瞬時加速』。

決まれば必殺の組み合わせだが一度でも失敗すると相手にそれを

警戒させてしまう。絶妙な距離と相手の次の動きを読めていないと出来ない芸当だ。

それこそ動物的勘と言い換えてもいいくらいに。

しばらくは回避に徹していた一夏さんがアリーナの地面ギリギリを旋回する。衝撃砲が地面に当たった瞬間、一夏さんが更に加速して鳳さんの視界の死角へ入り込む。

舞い上がった砂煙のせいで鳳さんが一夏さんを見失い、探すために一瞬動きが止まった。

仕掛けるなら今しかない！

思った瞬間『白式』が猛スピードで『甲龍』に突っ込んだ！

「決まった！」

篤さんが叫んだ。間違いない。絶妙な間合いで鳳さんも反応が間に合っていない。

これこそ確実に決まったと誰もが思わずにいらなかった。

ズドオオオオオオオオオオ！！！！！！

すさまじい衝撃と轟音が管制室まで響き渡った。

「ひゃう！」

アリーナの一部分が・・・爆発！？

オペレーションルームに緊急事態を知らせるアラームがけたたましくなり響き、部屋の中が非常灯に切り替わる。

「な、何？何が起きたの！？」

「一夏！」

「システム破損！何かがアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいですよ！」

シールドを貫通！？そんな馬鹿な！

IS学園に喧嘩を売ってくるなんてそれこそ世界に喧嘩を売ると同等のことを誰が！？

いえ、それ以前にアリーナのシールドはISと同じものを使っているはずですよ！？そのシールドを突破って・・・

そんなことを考えていると織斑先生がマイクを取って緊急事態を

告げる。

「試合中止！織斑、鳳！直ちに退避しろ！」

物凄い判断力だ。この人が一介の教師なんて信じられない。

「アリーナ中央に・・・所属不明機を確認！？織斑君と鳳さんが口ツクされてます！」

「そ、そんな・・・一夏！？」

山田先生が焦った声を上げ、篝さんも信じられないと叫ぶ。

実際私も信じられない。この場で冷静なのは織斑先生くらいだ。

未だに砂煙の中にいるはずの所属不明ISから攻撃が飛んでいく。

ビーム兵器！？

一夏さんが当たりそうになった鳳さんを抱えて何とか回避する。

ほっと胸を撫で下ろした所に山田先生が今の攻撃の解析結果を伝えてくれた。

「ビーム兵器です！しかも・・・オルコットさんのブルーティアーズよりも出力は上です！」

「そ、そんなことが・・・」

煙が晴れゆく中、その機体の姿が見えた。

それは・・・

「全身・・・装甲？」

・
・ ISにはほとんど見ない全身フルスキン装甲タイプ、異形の黒いISでした。

2・5（後書き）

はい、というわけで連投16回目です。
遂に一夏VS鈴にゴーレム乱入まででした。

ここで二つ大きな誤字があったのでご報告を。
鳳 鈴音の『鳳』と言う字ですが・・・今まで『鳳』と書いてました。

凄い似てるので今まで気づかなかったのですが昨日気づいて全部直しました。

後『甲龍』の武装『龍咆』ですが、これも『咆』と言う字を『砲』と書いてました。

セカン党の皆様、申し訳ありませんでした！

この他にも誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしく願います。

出来れば何話のどこら辺、というのも教えていただけると非常にありがたいのでお願いします！

評価、感想をもらえたら作者のテンションがワイ！します！

そろそろ連投も終わりに近づいてまいりました。
ではまた明日もよろしく願います。

2 - 6 (前書き)

連続投稿17回目!

突如アリーナに乱入してきたISは全身装甲のせいで中の人は見えない。いや、むしろそれが狙いなのかもしれない。

一夏さんが呼びかけているが返答はない。無反応に佇んでいるだけで、一言もしゃべらない。

確かに声で正体がばれると言ったことも考えるとそうするのが正しいのですが一体何の目的で……

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

『いや、皆が逃げるまで時間を稼がないと』

「そ、それはそうですね……でも！いけません！お、織斑君！？」

山田先生が全て言い切る前に一夏さんは通信を切ってしまった。

「一夏さん……！」

「一夏さん！」

「一夏さん……？」

ほぼ三人同時に通信機に叫びかけるが返答はない。どうやら本気みたいだ。

一夏さんと凰さんが二手に分かれて侵入者を迎撃に当たり始めた。と言っても回避に専念している。

じれったくなつたのか侵入者が黒煙を上げて空を飛んだ。近接武器はないのか拳で一夏さんに突っ込んでいく。

「早い・・・！」

攻撃を避られた後、一夏さんの『白式』ほどでないにしても一瞬で二人の上を取った。

その状態から肩部からビームの雨を降らせる。さしずめビームマシンガンと言ったところでしょう。威力は腕のものより数段劣るみたいですけど。

二人の作戦は決まったようだ。凰さんが援護で一夏さんが突っ込む。シンプルだけど二人の相性を考えたベストな作戦。

「織斑君！凰さん！ああ、もう！織斑先生、どうしましょう！？」

山田先生も思わず悪態をついてしまうほどテンパっている。

「ま、二人が出来るといっているんだ。任せてみるのもいいだろう」

「そ、そんなめちゃくちなな!」

「織斑先生! 暢気なこと言ってる場合じゃないですよ」

私と山田先生が思わず叫んでしまう。いくら二人の実力があるといってもその結論はどうかと・・・第一、一夏さんは実の弟さんじゃないですか・・・!

「二人とも落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする」

そういいながら織斑先生は準備されたコーヒーに片栗粉を入れて飲もうとする織斑先生。

「って片栗粉!？」

「あ」

「織斑先生・・・それ片栗粉ですけど・・・」

「・・・なぜ片栗粉が一緒においてある?」

「さあ?」

全くもって謎です。

でも砂糖と塩と片栗粉・・・何故塩と片栗粉があるんですか？

コーヒーを見ると中は既にドロドロになっていて飲み物の原型を留めていませんね。

「やっぱり弟さんが心配なんですね！だからそんなミスを・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬の沈黙と共に織斑先生がそのコーヒー(?)を山田先生に突き出した。

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え・・・あの・・・これ・・・」

「どうぞ」

「これコーヒーってどうゆ・・・」

「ど・・・う・・・ぞ」

「い、頂きます・・・」

ああ、山田先生泣きそうになってますよ。でもあれ飲めるんです

かね？

うん、でも顔に出さないだけでやっぱり焦っているのは織斑先生も同じみたい。

そんなやりとりの間でも画面では未だにアリーナ内部で激しい攻防が行われている。

「先生！私とセシリアさんにISの使用許可を！」

「そうですね！私たちならすぐにでも出撃できます！」

「そうしたいところだが・・・これを見る」

そうやって織斑先生がアリーナのステータス状態を表すモニターを映した。

「遮断シールドがレベル4に設定！？」

「しかも扉が全てロックされて・・・！？」

そんな無茶苦茶な・・・外部との行き来は全て出来ないと、そういうことですか。

「あの所属不明機の仕業・・・と考えるのが妥当ですね」

「おそろくな。これでは脱出も救援も行うことができない」

「で、でしたら緊急事態として政府に救援を・・・！」

「既に行っている。今も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに教師の部隊が突入する」

「結局・・・待っていることしか出来ないということですね」

「私たちなら簡単な連携くらいならできるのに・・・歯がゆいですね」

「そういえばお前たちはあいつの訓練に付き合っているんだったな。何も訓練してない凰よりはマシという程度だが」

そう言っつて気づいた。篝さんが手をずっと握り締めて画面を食い入るように見つめている。

専用機がない篝さんは例え遮断シールドがなくなっても助けに行くことが出来ない。

大切な人が危ないのに、絶対助けられないという現実。この中で篝さんが一番辛いかもしれない。

何分経っただろうか？10分？1時間？

いや、実際はほとんど経っていないと思う。

一夏さんがAピットの正面に来て、砲撃を回避した。

ドーン！

「きゃあー！」

それと同時に凄まじい轟音が管制室に響き渡く。

「あの馬鹿者が・・・」

織斑先生がほとんど分からないくらいの角度で口の端を上げ、微笑んだのを見た気がします・・・見間違いかもしれませんが。

それを見て画面を見上げると、そこには回避して目標を失ったビームは展開している遮断シールドを吹き飛ばし、それだけでは足りずアリーナへの扉を失ったAピットが映っていました。

「カスト！オルコット！」

つまり・・・それは・・・

『は、はい！』

道が開かれたということ！

「ISの使用を許可する！ただし無茶はするな。二人を救出するのだけを目的としろ！」

「分かりました！」

「お任せください！」

私とセシリアさんが同時に返事をする。

「あ、あれ？篠ノ之さんは？」

山田先生に言われて気づいた。 篝さんが……いない!？

「まったく……いいから二人はさっさと行け！」

『はい!』

二人そろって部屋を飛び出す。

セシリアさんはこの狭い通路で今にもISを展開して飛んでいき
そうな勢いだ。

「我慢してくださいよ!ここでIS展開したら私が吹き飛ばされち

やいますから！」

「わ、分かっていますわ！そのくらいの分別はついてましてよ！」

自分の考えが読まれたので驚いたのか少し声が上がっている。誰でも見れば分かるんですけどね。

ピットに出ると先に行っていた篝さんがピットから一夏さんに向かって叫ぶのが見えた。

「男ならそのくらいの敵に勝てないでなんとする！」

いい啖呵ですね。篝さんらしいです。

「セシリアさん！」

「ええ、行きますわよ！」

言って走りながら二人同時にISを展開。

「私は右へ、カルラさんは左へ！攻撃タイミングはそちらに任せます！」

「了解です！」

篝さんの後ろを私が左に、セシリアさんが右にアリーナの上で別れ、対角線上に所属不明ISを挟み込む形で布陣します。

セシリアさんはオールレンジのBT兵器がある。なら私はそれを邪魔しない攻撃が要求される。それならやはりこれでしよう。

最も射程の長い46mm対装甲ライフル『グルファクス』をオープンする。セシリアさんのレーザーライフルと同じく2mを超える銃身で接近戦では使い物になりませんが、遠距離ならば非常に有効な銃。

片膝立ちで『グルファクス』を構えて機会を伺う。

一夏さんが凰さんの衝撃砲の威力を利用して瞬時加速を発動、所属不明ISに突撃する。

なんとという無茶を・・・少しでも間違えばISのシールドが0になって動けなくなってしまうのに。

しかしそのお陰なのでしょう。今までの比ではない、それこそ瞬間移動と見間違うほどの速度で一夏さんは所属不明のISに接近。

そのまま迎撃してきたその右腕を切り落とした！

所属不明のISは右腕の部分から黒い液体を血のように噴出しながらも、残った左手で一夏さんを吹き飛ばし、それを受けた一夏さんが地面に叩きつけられる。

まだ・・・今撃つても避けられる・・・まだ、まだ！

所属不明のISが残った左腕のビーム砲を一夏さんに向けた！
それと同時にその動きが狙いをつけるために止まる。

瞬間、気づいていたのか一夏さんから個人間秘匿通信プライベートチャンネルが入った。

『狙いは？』

「バツチリです！」

言いながら引き金を引いた。

強烈な反動、銃声と共に弾丸が射出され狙い通り所属不明ISの
左肩に直撃した。

破壊は出来ていないが着弾の衝撃でISがふらついてバランスを
崩す。

『お見事ですわ！』

次弾を撃つ前にセシリアさんの声が聞こえた。展開の済んでいた

ビットが一斉にレーザーを放ち、その直撃で動きが更に止まる。

『二人とも決めろ!』

「当然!」

『了解ですわ!』

動きの止まったISに私の『ゴルフアクス』とセシリアさんの『スターライトmk?』が直撃した。

中央部分を貫かれたISが音を立てながらゆっくりと倒れこむのを見届けて『ゴルフアクス』のスコープから目を離す。

『ギリギリのタイミングでしたわね』

「あれくらい引き付けないとこの距離では外してしまいますから」

『二人ならやってくれるって信じてたからな』

ですから何で毎回この人はこういう発言をするんでしょうか・・・
思わず肩を竦めてしまいますね。

天然で女たらしとは中々珍しい人物ですよ。その上本人は恋愛に疎いとか・・・

あ、そういえば・・・

「中の人は大丈夫でしょうか？思いつきり貫通したように見えましたがど・・・」

「いや、こいつは多分無人機だ」

「無人機？ISが？」

「確証はないけど・・・十中八九そうだと思う」

それは確証って言うのとはぼ変わりありませんよ？

でも・・・無人のIS・・・？そんな技術はまだどこにもなかったはず。

仮にそんなものが出来たとしていたらまた新しい火種となりかねませんね。

『まあ、何にしてもこれで終わ・・・』

ピーピーピー！

その場にいた全員のISに警告を告げるアラームが鳴り響いた！

所属不明ISの再起動を確認、エネルギー充填中

「な!？」

そんな馬鹿な話が!？

『一夏!あいつまだ動いてる!』

開放通信から凰さんの悲鳴が聞こえた。見ると倒れながらも残った左腕を一夏さんに向けてビーム砲を撃とうとしている。

「くっ!」

『一夏さん!』

私とセシリアさんが慌てて射撃体勢に移行するが・・・一度銃を下げてしまっているため明らかにビーム砲の発射まで間に合わない。

「ここまでやって・・・!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!』

瞬間、一夏さんが予想もしない行動を取った。避けるのでも、逃

げるでもなく……『雪片式型』を構えての特攻。
傍から見ればただ撃つてくださいと言わんばかりの突進……

『一夏さん！！！』

私たちの声が重なった。

左腕から放たれたビームの光が一夏さんを包み込む。

ビームが晴れたとき……そこには剣を振り抜いた状態の一夏さんと再び倒れこんでいくISの姿があった。

でも……アリーナの遮断シールドを貫通するビームを受けて無傷？

……ああ、失念していました。

単一仕様能力『零落白夜』はエネルギー系統は全て無効にするんです。

今まではセシリアさんのエネルギーライフルしか無効にしてなかったので分からなかったですけど。

『い、一体何が？』

セシリアさんの声で我に帰って倒れこんだISの方をズームにするが、今度は動く気配はない。完全に停止したらしい。

直後に『白式』が強制的に解除されて一夏さんがその場に倒れこんだ。

『一夏! !』

『一夏さん! !』

鳳さんとセシリアさんが慌てて近づいたのを見て私も急いでアリーナの上から降りる。

「一夏さんは?」

「大丈夫、気絶してるだけみたい」

一番近かった鳳さんが一夏さんを抱き起こして言った。目立った外傷もないし本当に気絶してるだけみたいだ。

「よ、良かった・・・」

「本当ですわね」

篝さんもいつの間にかアリーナに降りてきていて少し遅れて駆けつけた。

「一夏は!?!」

「気絶してるだけだそうす。大事には至ってないようすよ」

「そ、そうか・・・良かった」

私の言葉に篤さんは心底ホツとした表情を見せた。

『皆さん、聞こえますか!?!聞こえたら返事をしてください!』

「や、山田先生ですか!?!」

通信から山田先生の声が聞こえた。

『ああ!カストさん!?!今遮断シールドが解除されました。すぐに先生たちの部隊がそちらに行きます。なので皆さんは退避を』

「分かりました。すぐに戻ります。皆さん、今は一夏さんを早く医務室へ」

「わ、分かったわ」

「篤さんは私が運ぶということでもいいですか?」

「ああ、よろしく頼む」

その後、すぐに先生たちの部隊が駆けつけ、私たちはピットへと撤退。一夏さんを医務室へと運び込んだ。

結果を言うと一夏さんは細かい傷はありましたが命に別状のあるようなものはなし。

ただ単に全力を出し切って倒れた、ということでしたので医務室で横になっています。

今は医務室に近い休憩所に、あの場にいた5人で一夏さんが起きるのを待っている状態です。

「お前ら、ご苦労だったな」

不意に声を掛けられたので顔を上げると織斑先生が立っていた。

「あの・・・あれは結局なんだったのですか？」

篤さんが皆さんの意思を代弁して尋ねた。皆さんも私もそれが一番聞きたいことだ。

「今のところは回収して調査中だ。どこの誰が、どんな目的で送り込んできたのも不明。分かっているのはお前らの予想通り無人機だったということくらいか」

「そ、そうですね・・・」

「それから分かっているとは思いますが今回の件は決して口外するなよ」

『はい』

5人が揃って答えた。織斑先生はそれを確認すると廊下を歩いていく。

「ああ、それと言い忘れた」

織斑先生が振り返えらずに言った。

「弟を助けてくれて・・・感謝するぞ」

『え?』

今・・・なんて？
それを確認する前に織斑先生は廊下を曲がって行ってしまった。

「あの千冬さんがお礼なんて」

「明日は槍が降るかもしれないわね・・・」

凰さんもセシリアさんも地味にひどいですね・・・

「それはそうとさあ・・・あんたらって一夏のこと好きなのよね？」

「「「!?!?」「」」

ああ、なんかまた逃げ損ねたというか巻き込まれたというか・・・

いえ、一夏さんが起きるのを待っているんですからある程度は私も惹かれてると考えるのが妥当でしょうか？いえいえいえ！そんな馬鹿な！

一夏さんは天然だけどころかつかっこいいというか・・・とぼけている時もありますけど妙に鋭くて笑顔が素敵でサラッと惚れてしまふような言葉を自然に吐いて女性への気遣いもさりげなくて・・・

そりゃあ嫌いではないですよ？嫌いではないんですけど・・・

この3人ほど恋焦がれていると言っわけではなく人として好きという意味ですね・・・

・・・私は一体誰に言い訳してるんでしょう？

「まあそんなこと今ここで話てもしょうがないわね！一夏が起きるまで抜け駆け無し、正々堂々の勝負よ！」

「望むところですよ！」

「上等だ！」

「ま、話が纏まったところで」

そうやって鳳さんが立ち上がる。

いつの間にか話が纏まってしまったようです・・・詰んだ、フォ
ーエヴァー私の平穏な学園生活・・・

「どこへ？」

「お手洗い。一々聞かないですよ、もう」

鳳さんがそう言って廊下の角に消える。そこからは特に会話はなく、黙々と時間が過ぎていくだけ・・・

10分ほど経っただろうか、セシリアさんが立ち上がった。

「セシリアさんもお手洗いに？」

「え？え、ええ。そうですね。ちょっと行ってきますわ」

そう言ってセシリアさんも廊下の角に消える。

そういえば……

「鳳さん遅いですね」

女子のトイレは長いとはいえ時計を確認すると確実に10分を過ぎています。

「まさか……！カルラ、行くぞ！」

「え？は、はい」

篝さんが何か気づいたようだ。私の先に立って廊下を走るくらいの勢いの歩きで先ほど鳳さんとセシリアさんの消えた廊下に突入する。

そういえばこの廊下って一夏さんの病室前に続く廊下でしたね。それで気づいた。

そうだとしたら呆れるしかないんですけど……

セシリアさんと鳳さんの声が聞こえた。予想通り一夏さんの病室からだ。

「一夏さんが起きるまで抜け駆けは無しと決めたでしょう！」

どうやら二人とも完全に抜け駆けしようとしていたみたいですね。

「そういうお前も・・・私とカルラに黙って抜け駆けしようとしていたな」

「そ、それは・・・」

「ですから私はちが」

「ああ、もう！三人とも出て行ってよ！一夏は私の幼馴染なんだから！」

だれか私の言葉を最後まで言わせてくださいってば！

そう言いながら鳳さん、セシリアさん、篝さんが言い合いを始める。というよりここ一応病室なんですけど。

とりあえず先ほど買っておいたお見舞いのドリンクを一夏さんに渡す。

「どござ、一夏さん」

「お、サンキューカルラ」

「「「カルラ(さん)！」「」」

「ひい！」

し、しまったあ！？またやっちゃったあ！

2・6（後書き）

連投17回目、VSゴーレム編いかがでしたでしょうか？

今回はほとんどカルラ出番ありませんでしたね。まあ管制室に閉じ込められてるのでしょうがないといえましょうがないんですけど・

カルラちよつと意識し始めましたね。まだ恋愛感情じゃないですけどね！

あと所々原作と違いますがまあそこは二次創作ということw

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者のテンションがふええ・・・します！

連投も明日の更新で最後の予定です・・・
ではまた明日！

2 - 7 (前書き)

連続投稿18回目!

クラス対抗戦後最初の日曜日。

あの襲撃後は予想通り結構な騒ぎでした。

クラス対抗戦は当然のように中止となり予定は全てキャンセル。戦闘を行った私たち4人は2、3日聴取を受けて改めて口外しないことを約束。

幸いにもあの謎のISのおかげで外部への通信、映像は流れていなかった。なので他のクラスメイトの人たちから特に聞かれることもなく（一夏さんと鳳さんはそうはいかなかったみたいですけど・・・）実験中のISの暴走ということで話は収束していきました。

そして今日は一夏さんが家を見に行くといっているのでIS学園にはおらず、久しぶりに静かに部屋の中で読書をしています。

前から一夏さんがいるとISの練習だ、勉強だといって押しかけてくるのでこういう時間は久しぶりです。

いえ、私もついでに勉強させてもらっているので迷惑ではないんですけど・・・偶にはゆったりとした時間も欲しいですね。

「あ、もうこんな時間ですか」

ふと時計を見るといつの間にか11時になっていた。8時に読み始めたのに、やっぱり集中していると時間が経つのが早いですね。

読みかけの本に筆を挟んで部屋を出る。

目的地は食堂。休日は寮に留まっている人は少ない。

大抵の人が部活動や自分の部屋で趣味に耽っているためいつもよ

り人が少なく感じる。

遠くから部活に勤しむ人たちの声が聞こえてきた。それでさえも小さく、別の場所にいるような気になってしまう。

食堂へ行くとやはり人は疎らでした。

まだ少しお昼には早い時間だからかもしれない。こういう時は人気のある、普段あまり食べられないものを注文できるので得した気になります。

「あれ？あんだ・・・」

トレーを持って待っている時、後ろから声を掛けられたので振り返るとそこには鳳さんがいました。

「ああ、鳳さん。今からお昼ですか？早いですね」

「あんたもね」

「まあ、そうですね」

そう言って私の後ろに並びました。

「鳳さんはまたラーメンですか？」

「この間・・・というより食堂で鳳さんを見るときは必ずラーメンを食べていると思う。」

「そういえば一夏さんも鳳さんはラーメンが好きだって言っていたよ。うな気が・・・」

「何よ？文句ある？」

「文句はありませんけど栄養が偏りますよ？」

「大きなお世話よ」

「まだまだ育ち盛りなんですからバランスよく食べないと・・・」

「なんですって・・・」

「あ、あれ？なんか地雷踏みましたか？鳳さんは自分の胸の部分をトレーで隠しながら私のほうを睨んでいます。」

「いえ、確かに鳳さんの胸囲は他のクラスメイトの方々と比べてもあまりないと言えますがそれがいいという人もいるわけで・・・
それ以前に私も似たような感じであるわけで！」

「あ、ほら、ラーメン来ましたよ」

「む・・・仕方ない。この件は聞かなかったことにしてあげるわ。
ほら、行くわよ」

「はいはい」

そもそもそういう意味で言ったわけじゃないんですけどね・・・
鳳さんにこの話題を振るのはやめておきましょう。私も言ってる悲しくなりますしね・・・

というよりいつの間にか一緒に食べることになってるんですね、私たち。

窓際の日当たりのいい席に陣取って昼食を取り始める。

「やっぱりこの食堂はおいしいですね」

「そう？まあまずくはないわね」

「それ以前に鳳さんってラーメン以外頼みます？」

「私をなんだと思ってんのよ・・・」

一瞬昔見せてもらった日本の漫画でラーメンマンというキャラがいたのを思い出してしまった。鳳さんの場合はラーメンウーマン？
頭の中でおでこに『中』の文字が書かれて特徴的な髭の生えた鳳さんを想像してしまった・・・

「くっ・・・ぶぶ・・・」

「あんだ・・・絶対なんか失礼なこと考えてるでしょ・・・」

「そん・・・なこと、ふふふ・・・」

ふ、腹筋が・・・

「ええい！笑うのをやめい！」

「いふあふあふあ！いふあいでふふあはん！」

凰さんにほつぺを抓られて思うように言葉が出せない。
っていうか痛いです！爪を立てないでください！

私の目から涙が出始めてようやく凰さんは解放してくれた。

「すみませんでした」

「ふん、分かればよろしい」

再びラーメンを食べ始める凰さん。

凰さんは見た目が他の人たちと違って小さいので妹のように思っ
てしまうのだがそういう扱いをされるのがすごい嫌みだ。

それは誰にでも言えるかもしれないが、凰さんは特に顕著に現れてると思う。

そんなことを思っていると凰さんはラーメンを食べ終わったのか、スープを飲み……

「ちょ……ちょちょちょっと凰さん!？」

「んあ?何よ?」

「レンゲあるんですから使いましょうよ!」

あろうことが凰さんはラーメンの丼に直接口をつけてゴクゴクと飲んでいきます。

「嫌よ」

「な、何ですか?」

「だって何か女々しいじゃない」

あなたの性別は一体なんなんですか……

昼食後、鳳さんはやることもないというので私の部屋に来ていた。と言っても私もやることはないので基本は本を読むか銃器の整備をしているだけです。

鳳さんはベッドの上で寝転がりながら私の本棚から面白そうな本を探して読んでいます。

「あんたさあ、休日っていつもこんな感じなの？」

ベッドに寝転がって本に目をやったまま鳳さんが聞いてきました。

「そうですね。IS学園に行く前なら本を読むか銃器の整理かで一日終わっていましたよ」

「銃器って・・・そういえばそんな趣味持ってたわね」

鳳さんが飾り棚にある拳銃を見て言った。

「ん？来る前ってことは、ここに来てから変わったの？」

「といつより変えられたといったほうが正しいんですけど」

「あ、ごめん」

「お昼が戻すか思いましたよ・・・」

「で？」

そこは無視なんですね・・・

「一夏さんの部屋が隣なのは知ってますよね？それに加えて私は一夏さんの席の後ろなのでよく授業のことやISのことを聞かれます。最近の休日はずっと授業のことを教えたり、一緒にISの練習をしたりしてんです。それだけですよ」

「そ、そう・・・それだけなのね」

「それに凰さんが来る前の話ですから。セシリアさんや篝さんも一緒でしたし」

「あの二人も一緒だったの!？」

ですから襟首を掴まないでくださいってば!

「え、ええまあ。同じクラスですし」

「そう、そうよね。同じクラスだもんね」

襟首から手を離れた鳳さんは少し下を向いてしまいました。

なんか寂しそうですね。

それはそうかも・・・一人だけクラスが違うせいでこういう風に頼られないし、私たちに比べて話をする時間も相当少ないはずですから。

「でも鳳さんが来てから一夏さんは嬉しそうでしたよ？話し相手ができたって」

「なんかあなたに言われても同情されてるみたいで嬉しくないわね」

「そうですね？」

そう言いながらも頬を染めてソッポを向いてしまう鳳さんはやっぱり可愛いんだと思います。

「来週また一夏さんが誘ってくれると思いますし、鳳さんも一緒にどうですか？」

「い、いいの!？」

「まあ一夏さんなら私が提案する前に誘ってくれると思いますよ？」

「ん・・・んん・・・そう、一夏の頼みならしょうがないわね。仕方ないから私も手伝ってあげるわ!」

これが所謂シンデレ．．．というやつですか．．．

エッヘン！と腰に手を当てる鳳さんを見て私はそれしか思いつきませんでした。

と、そこで鳳さんが何かを思いついたように眩きました。

「そういえばカストの部屋って一夏の隣なのよねえ．．．」

「は？はい、そうですね．．．鳳さん？」

何か物凄い嫌な予感が．．．！

「ああ、いいのよ！鳳さんなんて他人行儀な物言いしなくて！一夏と同じように鈴って呼んで、カルラ（．．．）！」

物凄い笑顔が怖いんですけど！

そういえば笑顔って元々攻撃的なものって聞いたことがありますよ！

「でね？カルラ。私たちって友達よねえ？」

「え、ええつとお．．．」

「今日から私の部屋もここにしたいんだけど良い？良いわよね！良いと言え！返事は聞いてない！」

「拒否権無しですか!？」

ひどい!ここに小さな鬼がいます!

「あつたり前じゃない!友達の頼みは聞くものよ!」

「まあ・・・いいですけどね。私は」

元々二人部屋のせいで持て余してる状態でしたし別に鈴さんが入ってきても・・・

そう思ったとき・・・

コンコン

誰かが扉を叩く音が・・・最近これがすごい怖いんですけど病気でしょうか?

「カルラいるか?少し話があるのだが・・・」

扉の向こうから聞こえた声は・・・篝さんの声ですね。

「はい。開いていますのでどうぞ」

「うむ、では失礼する・・・何故責様がいる！」

篤さんは入るなりベッドに寝転んでいる鈴さんを指差して叫びました。

「何よ？私がいちゃいけないの？さっさと物件すませなさいよ」

「む・・・その言い方は気に入らないが・・・確かにもっともだ。カルラ、折り入って頼みがあるんだが・・・」

「はあ、なんでしょう？」

嫌な予感しかしません。

「その・・・だな・・・実は部屋変えが言い渡されてな。相手の部屋も決まっているのだがどうもその・・・何というか・・・そう！私が行くと上手いかなさそうでな！カルラの部屋に入れさせてもらえないか！？」

嫌な予感的中！そんなの的中しないでいいんですよ本当に！？

「後から来て何言ってるのよ！ここは私が住むの！」

「ふん、ならさっさと先生の許可を取ってきたらどうだ？織斑先生の……な」

「う……な、ならあんたもさっさとその織斑先生の許可を取ってきたらどうなの！？」

「そ、それは……」

そうなんですよね。一年生の寮長はなんと言ってもあの織斑先生。二人から見ればそれは要塞対歩兵の戦いです。どう考えても勝ち目はありません。

そう思ったとき……

コンコン

誰かが扉を叩く音が……デジャヴ！？デジャヴなんですか！？

「カルラさん？お話があるのですけどいらっしやいますか？」

扉の向こうから聞こえた声はセシリアさんのもの……誰か助けて……

結局その後セシリアさんも交えて誰が私のルームメイト・・・
夏さんの隣の部屋になるかの大論争。

しかし『三人寄れば文殊の知恵』と言いますが、あの鉄壁要塞（
織斑先生）を崩す算段は全く出ず、近日中にIS勝負で勝った人が
織斑先生に直談判に行く、ということが決着が付きました。

ちなみに3人の大論争の間、私は完全に蚊帳の外だったのは言う
までもありません。

2・7（後書き）

連投18回目。これで原作一巻分は全てです

最後に鈴との接点と次回への話の一部分なものを乗せて締めとさせていただきます。

シャル&ラウラは出ずに終わりなんですネ・・・残念ながら・・・

というのも最初に言ったとおりまだここまでしか出来てませんので！原作2巻分、ラウラ編の終わりまで更新はストップします。おそろく一ヶ月から二ヶ月は最低でも空くと思いますのでご了承ください。

こんな作者にお付き合いいただきありがとうございました。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者のテンションがうっひょひょい！します！

また、こんな展開になったらいいなーって言うのも書いておいたら作者の気紛れ次第で採用したりしなかったり！？

ではまた次回、3章からお会いしましょう！

3 - 1 (前書き)

おっまたせしましたー！連続投稿再開！

あの騒動から少し経って今日は6月最初の月曜日。

私の部屋争奪戦はなんとセシリアさんが勝利し、その日の内に鉄壁要塞（織斑先生）へ突撃を掛けて見事に玉砕していました。会話の一部をどうぞ。

「というわけで私が一夏さんの部屋のとなり…コホン。カルラさんとルームメイトになりますわ!」

「何を勘違いしたのか知らんが却下だ」

「な、何故ですの!? 勝者の私には当然の権り…」

「そもそも部屋の移動は篠ノ之だけの話だ。当然凰も除外だ。どうしてIS勝負で部屋を分ける話になったのかは…まあ予想はつくがお前ら生徒の間で勝手に決めるな」

「う…」

「それにお前のあの天蓋つきのベッドを運ぶつもりか? さぞかしカストも嬉しいだろうな」

「あつあつ…」

上陸用舟艇で正面が開いた瞬間に要塞からの機銃掃射で一掃され

ました。

ちなみにその後セシリアさんの寮の部屋を見せてもらいましたけど本当に天蓋つきのベッドでした。そして相部屋です。

となれば当然その相部屋の人のスペースはほとんどなく…私も丁重にお断りしました。

というわけで結局私の部屋には篝さんが入ることとなり、この騒動は終結。最初から織斑先生に話しておけばIS模擬戦闘になることもなかったんですね。

でも苦手意識がある人って話かけずらいじゃありませんか！

ああ、逸れてしまいましたね。

今クラスの話題はISスーツです。今日からISスーツの申し込みが始まるということで、教室では数人で一つのカタログを見てワイワイと騒いでします。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「やっぱりミューレイのだなあ。特にスムーズモデル」

「あれモノはいいけど高くない？」

簡単に言えばISスーツは一張羅みたいなものです。

ISスーツは学校指定のものもありますがほぼ各人で用意します。

理由はISが自己学習能力により個人個人で全く違う仕様に化するものなので早いうちからのスタイルの確立が大事なんです。

ほとんどのIS関連企業では所属のIS操縦者のためにISスーツを開発していますし、ISスーツ専用の会社もあつたりします。ちなみに見た目は全体的にワンピース水着やレオタードに近いものが多いです。理由としてはISは絶対防御があるので動きを阻害しないものが良い、ということでしょうね。

当然オーストラリアの国営IS企業ジャクソン社でも作っていて、私のISスーツもジャクソン社仕様です。ジャクソン社のスーツはシャツとスパッツがくつittedものようになっていて、他のISスーツより布地が多めになっています。

オーストラリアはIS実験時、中央の砂漠地帯でテストを行うことが多い。日によっては砂嵐が吹き荒れ、高速戦闘で肌の露出が多いと肌の皮が剥けてしまうのが理由です。

「ねえねえカルラさん！このジャクソン社のISスーツってなんとか安くならない!？」

「えっと…物によりますけど…」

「私この高機動補助型がいいなあ！」

当初はISの性能は不明な部分が多かったため不測の事態が起きてもいいようにとスーツも考えられたものですが、調査が進むと共に先に言ったようなことは防護フィールドによりありえないということが判明。しかしその方向で開発で進めていたジャクソン社は未だに布面積が多いため、他国に対してほとんど人気はありません。

なのですけど…

「あー、これいいね！ねえ、私も安くならないかな？」

「うんうん」

このクラスではジャクソン社は大人気みたいです。恐らく一夏さんがいるからでしょうね。やはりあの水着のような格好は恥ずかしいんでしょう。

しかし会社の一社員の娘というだけでは流石に値段交渉までは請け負えません。

「聞くだけ聞いてみてもいいですが望み薄ですよ？」

「そうなの？」

「はい。社員の娘という位置づけではそこまでのサービスは…」

皆さん「そっかー」「やーうーん」など声を上げていますがカタログは離していません。やはり気になるようです。質問に答えているうちに山田先生が、その少し後に鉄壁要さ…失礼、織斑先生が入ってきました。

「諸君、おはよう」

『お、おはようございます！』

朝の雑談タイムがその一言で終了し朝のSHRが始まります。最
早軍隊ですね。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISSを
使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

忘れた人は学校指定のものを。それも忘れた人は何と下着でやれ
とのこと…

今度からISSスーツは授業が無くても着ていきましょう、はい。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

織斑先生の連絡事項が終わるといつも通り山田先生へバトンタッ
チする。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名で
す！」

「え…」

『ええええええつ！？』

水面に石を投げ込んだように一気に教室中に叫び声が広がります。この嗜好きの人たちの包囲網を抜けてどうやって入ったのでしょうか？鈴さんの時も噂だけで出身国さえばれていたというのに…

かく言う私も開いた口が塞がりません。
こんな変な時期に二人同時？波乱の予感しかしませんね。

山田先生に促されて入ってきたのは…お、男の人！？
ピシリと両足を揃えて軽く一礼してから自己紹介を始めます。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男の人……？」

私の口から自然と言葉が出ていました。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を…」

礼儀正しい立ち振る舞い、中性的に整った顔立ち、髪は長い金髪でその髪を後ろで束ねています。瞳は綺麗なエメレルドで、体つき

危うく誰か死にかけたようですが無事戻ってこれたみたいです。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

いつも以上にヤレヤレといった感じで頭を抱える織斑先生。しかもその声がぼやきに近かったせいで教室の波が収まりません。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

そう、もう一人。

こちららも男性用の制服ですが明らかに女性です。腰まである長い銀髪、小柄な体ですけどそれ以前に最も特徴的な、異色の左目の黒い眼帯。怪我でもなんでもない。昔の軍人映画や漫画で出てくる軍人がしているような目を隠すための眼帯です。

そしてそれさえも置いて、その人の存在感を出しているのが威圧感。その威圧感を知っている。本国で会ったことのある軍人さんのそれだ。

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？今織斑先生のことを教官って言いましたね。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

『……………』

自己紹介…終わり？

一夏さんより短かったような気が…

「あ、あの、以上…ですか？」

「以上だ」

本当に終わりみたいですね。まあ軍関係者だとすればあれ以上の自己紹介はいらないのでしょうけど。

山田先生はいつも通り涙目になっています。

「！貴様が

」

何かに気づいたようにボーデヴィツヒさんが一夏さんに近づくと…

バシン！

何故かいきなり一夏さんの右頬を平手打ちしました。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「何しやがる！」

「ふん」

周囲の状況を全く置き去りにしたままポーデヴィツヒさんは空いてる席へとさっさと移動して座ってしまった。

山田先生は相変わらずあわあわしているし…

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS基礎実習を行う。解散！」

織斑先生が咳払いと共に進めることでようやく進みました。

第二の男性IS操縦者に軍人クラスメートって…もう波乱の予感しかしません。

どうやら残念ながらもう私は平穩を教授することは出来ないようです。

3 - 1 (後書き)

祝！連投再開ってコトで！

予定通り原作2巻分まで書き終えたため、今回も10話前後を連続投稿していきます。内容はラウラがデレるまでw
それ以降はまた3巻分が出来たら、ということでもた1、2ヶ月空ける予定です。

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。
評価、感想をもらえたら作者のテンションがフーハハハ！します！

初試み

原作設定のコーナー

今回から本編で説明できてない内容をここで説明して以降とします！

というわけで今回はこの方に！

????「こんにちは。一年一組副担任、山田真耶です」

上から読んでも下から読んでも？

真耶「やまだまや…って何言わせるんですか！」

ままま、とりあえず今日はISスーツの説明をばちゃちゃっとしてやってください。

真耶「はあ…分かりました。ISスーツはIS展開時に体に着ているフィットスーツのことです。肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達し、ISはそこで必要な動きを行うことができるんですね。耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができるんです」

でも衝撃は消えないんですね？

真耶「その通りです。いわば防弾チョッキのシャツ版と考えて頂いて結構です。ただ肌に直接つけてる分、防弾チョッキのようにベストみたいな形ではないので衝撃はモロに來ます。下手をすれば衝撃で内臓破裂、なんてこともあるので注意してくださいね」

うわーお…つまり当たらないことが結局一番良いと…

真耶「そうですね。銃なんて戦争以外で人に向けて撃つ物ではありません。皆さんも銃を持っていても人に向けてはいけませんよ」

そういえばISスーツってIS展開時にスーツも同時に展開されるんですよね？

真耶「専用機化を行った場合に限りまずけどね。ただダイレクトのフォームエンジはその分エネルギーを消費します。余程緊急でない限りスーツを身に着けてISを展開する方が効率的ですね」

流石先生。説明が分かりやすくて助かります！

真耶「えへへ、先生ですから。あ、そうそう。ISスーツは汗の吸着など完璧にこなすので普段から制服の下に着けていても不快感がな

いんですよ。生徒は着たまま授業をつけている人が多いようです。ちなみにISを使用する授業があるときは先生も着たまま授業をしている時がありますね」

つまり通常スーツの下にあの水着のようなISスーツを着ていると？

真耶「？はい。今日なんてそうですね」

つまりあの織斑先生もスーツの下に？夢が広がりますなあ…

真耶「へ？あ、あの一…」

グへへ…千冬様のISスーツ姿かあ…しかもスーツの下にかあ…妄想が広がるなあ…

真耶「…ゴクリ……………」

ウへへへ…

真耶「エ、エへへへ…」

以下妄想エンドレスの為終了！

長くなりすぎだろこの後書き…もうちょい短くなるよう頑張ります

3 - 2 (前書き)

連続投稿2回目!

第二グラウンド。

転入生二人の紹介の後、今日は2組と合同での実習です。

既に一夏さんとデュノアさん以外の1、2組は全員揃っています。しかも時間は既に開始時間5分オーバー。いつもは間に合っているのにどうしたんでしょう？

デュノアさんが手間取っているんでしょうか？

「遅い！」

ようやく現れた一夏さんとデュノアさん。

「くだらんこと考えてる暇があったらさっさと並べ！」

どうやらまた一夏さんは考え事をしていたようで出席簿で叩かれています。

そして一夏さんが並んだ位置はセシリアさんと凰さんの近く。先ほどのボーデヴィツヒさんとの悶着が鈴さんに知れたらしく少し声が…

「アンタなんでそう馬鹿なのよ！」

鈴さん！声、声が大き…

「安心しろ、馬鹿は私の前にも二人いる」

ああ、ご愁傷様としか言いようがありません。

バシーン！バシーン…バシーン………

広い第二グラウンド全体に響き渡るくらい出席簿で叩かれる大きな音が響き渡り、こだましました。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はい！』

メンバーが2組と合同なのでいつもより気合の入った声が響きま
す。

あれ？そういえば山田先生がいませんね？どこいったんでしょう？

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に入る」

先ほどので完全に目をつけられたようです。二人はブツブツ言いながら前に出ました。

？何か織斑先生が二人に囁きましたね。

「やはりここは、イギリス代表候補生、わたくしの出番ですわね！」

「私の实力を見せるいい機会よね！専用気持ちの！」

何言っただんでしょうか？急にやる気になりましたね。恐らく一夏さん繋がりでしょうけど。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。それはこっちのセリフ。模擬戦の借りは返させてもらおうよ」

そういえばセシリアさんが勝ったんでしたよね。本当にギリギリでしたけど。

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

ビービービービー！

な、何！？急にISの警告が…

「あああーっ！ど、どいてくださいー！」

直上より接近するISを確認。速度、角度より計算。衝突コース

見れば分かります！そういう情報はもう少し早く！

瞬時に両手の手甲を部分展開しながら…

「セット！」

両腕を言葉と共に振るう。

「オープン！」

手甲内部から『グレイプニエル』が射出され落下してくるIS装備の山田先生を絡め取る。

「え？え！？ええ！！？」

「くっ！」

絡め取った瞬間にIS全体の展開が間に合い、どうにか山田先生を受け止め…

「ひゃあああああああああ！」

「ふにゃ！？」

られませんでした。『グレイプニエル』でこっちに無理やり誘導したため山田先生は受身を取ることすら叶わず、私は私で無理に急展開したため受け止める体制が整っておらず、空中衝突して一緒に地面を転がってしまった。

「痛たたたた…」

「や、山田先生…大丈夫ですか…？」

「は、はい。ありがとうございます」

ほ、どうやら山田先生は無事なようです。クラスメイトの方々も皆無事の様子です。

山田先生はIS装備なので絶対防御がありますがクラスの皆さんはありませんからね。無事でよかったです。

「ん…あ、あれ？」

「山田先生？どうしました？」

「う、動けません…」

「は？そんなバカ…な…」

本当です。私も動けません。私と山田先生は完全に向かい合って密着状態で動けない状態です。
む、腕が何かに引っかかって……うーん…

モゾモゾ

「ひゃあ！」

「あ、すいません」

何か縛られてる感じが…か、体が動かない。というより下を見れない…

目の前には山田先生の顔がある。

わ、こうやって密着していると山田先生の胸すごい大きくて柔らかい…いいなあ…

一緒にくっついてる私の胸なんかとは大違い…いいなあ！

思わず私の顔はそのへヴンへと突入して…

ムニユムニユ

「ひん／＼／！」

ああ、柔らかい…このまま眠ってしまいたい…

モニユモニユ

「やつ／＼／ちよ、カルラさん!？」

「はっ！」

わ、私は何を…

「何をやっている馬鹿者」

「あ、織斑先生！助けてください！」

助かりました。

「何を言っている。縛っているのはお前の鞭だ。さっさと武装をし

まえ」

「へ？」

「さっさと解除しろ。授業が進まん」

「は、はい！」

慌てて手甲ごと『グレイプニエル』をクローズすると私と山田先生の体が離れました。どうやら衝突した瞬間に絡まってしまったようです。

これは素直に謝るしかありません。

「申し訳ありませんでした！」

「か、カルラさんって意外と強引なんですね／＼」

あ、あの…何で頬を赤く染めるんですか？

「はあ…模擬戦の相手は山田先生だ。時間も押しているしさっさと始めるぞ。カストは列に戻れ」

「あ、はい！」

織斑先生に促されてISを解除して列に戻る。どうやら2対1で

やるみたいです。しかも2はセシリアさんと鈴さんの組み合わせ……
っていくらなんでも無理なのは……

ああ……でも山田先生柔らかかったなあ……
などと考えていると周囲のクラスメイトの人に話しかけられまし
た。

「ねえねえ、カルラさん！どうだった？」

「ぶ、ぶつとは？」

「しらばっくれないでよ！山ちゃんの胸よ！おっぱいよ！パイオツ
よ！」

やっぱり同姓でもあの胸は興味の対象みたいです。そういえば篝
さんもお風呂一緒に入りたがらないんですね。大浴場もほとんど
行きませんし、多分好奇心の目で見られるからなのでしょうね。

そう、ですね……あの感触は……そう……例えるなら……

「マシユマロを薄い袋に目一杯入れて揉んだような感じ……でしょ
うか」

「な、なんか生々しいわね……」

いえ、でもそれ以外は……プリンとか？

「私帰ったらスーパーのマシユマロを買い占める!」

「業者に頼んでマシユマロ製造機を買わなきゃ!」

「ふふ、甘いわけ。話題のマシユマロ並みに甘いわ!」

クラスメイトの谷本さんの声が聞こえます。

「何よ!あなたは気にならないっていうの!」

「モチ気になるわ!でもその考えが甘いついのよ!」

「何が甘いついよ!じゃあどうやって確かめるの!」

「ふふふ、君たちは私たちが何者か忘れていてのではないかね?」

『へ?』

谷本さんの言葉に近くで聞き耳を立ててた人たちが全員疑問の声を上げました。でも何者かって…?

「人間?」

「違う」

「生徒？」

「違う！」

「ISが使える？」

「惜しい！」

「分かった！女！」

「そう、私たちは女なのよ！」

ぐつと手を握って力説する谷本さん……一体それがどう関係する
んでしょう？

「私たちは女！男がやったら犯罪なことも女がやったら許されるこ
とがある！」

???

関連性が全く分からないんですが……

「そんなマシユマロを置くなんてまどろっこしいことをしなくても
……」

ま、まさか…

「直にあの胸にダイヴすればいいのよ！」

や、やっぱり………！！

「そ、それってまずいんじゃない？」

で、ですよね。やっぱりまずい…

「なに言ってるの！女同士で胸の触りあいなんてスキンシップだよ！」

「そつよ！ならあなたはマシユマロで満足してればいいわ。私たちはあのへヴンへ挑戦する！」

「わ、私もマシユマロなんて嫌よ！直にいくわ！」

「うむ、その意気やよし！」

あああああ！何故かドンドン感化しています！

「オールハイルおっぱい！」

「「「「「オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！」「」」」」」

へ、変態が…変態さんが一杯います。火付け役は私だったとしても…これはなんというか

『オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！』

うわああああああ！何か周りの人が更に感染しています！とりあえず声を抑えてください！声を…

『オールハイルおっぱい！オールハイルおっぱい！』

「どうやら貴様らには元気が有り余っているようだな…」

そりゃあれだけ騒げば織斑先生が気づくのは当然なわけで。

全員の首がギギギと機械のような音を立ててそこに立っている般若を見ました。

予想通り…いえ、これは予想外です。肩を震わせながらいつもの顔からは想像できない笑顔を浮かべ、額にはしっかりと青筋を浮かべた織斑先生がそこにいました。

『オールハイル織斑！オールハイル織斑！』

今更変えても遅いわけで！

「貴様ら全員グラウンド100週をくれてやろう。そうだな、制限時間は3時間もあれば十分だろう」

『……………』

ちなみにIS学園のグラウンドはISが十分活動できるようにと一周5km。つまり100週は500kmであり500kmを3時間で走るためには時速170？を出さないと間に合わないわけで…貴方たち人間じゃねえ！状態になるわけですね。

「時間内に走れなかった奴にはもれなく私が鍛えなおしてやろう。どうだ、嬉しいだろう？」

『サ、サーイエッサー…』

織斑先生の言葉が終わった途端、アリーナの一部に何かが落下しました。

「あんだねえ！何ポンポン回避先読まれてるのよ！…」

「鈴さんこそ無闇に突っ込むのがいけないのですわ！」

「セシリアだってポンポンビット出すじゃない！エネルギー切れ早いし！」

落ちてきたのはセシリアさんと鈴さんでした。どうやら山田先生の勝利のようです。

なんというか…どっちも代表候補生だけあつて的確に弱点を言い当てているので余計評判を落としているような…

言い合いを続ける二人を織斑先生がいつものように出席簿で叩いて黙らせました。痛がつてる二人は当然IS装備ですけど何か？

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

後でセシリアさんたちに記録映像見せてもらいましょう。そうしないとダメな気がします。

「よし、それでは実習を始める。専用機持ちは6人だな。では6人7人のグループに別れる。専用気持ちがリーダーとなってやること。いいな？」

あの…そのやり方だと…

予想通り大半の人が一夏さんとデュノアさんに文字通り突進。
織斑先生がしまったという顔をして面倒そうに額を指で押さえな
がら言いました。

「まったく…出席番号準で一人ずつ各グループに入れ！」

日本には『鶴の一声』ということわざがあると言いますがまさしく
それでしよう。今まで統率性の無かったクラスの皆さんが一斉に
分かれまます。その時間一分ジャスト。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を1班1体取り
に来てください。数は『打鉄』、『リヴァイヴ』が3機ずつですか
ら、好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

珍しく皆さんが山田先生の声にも茶々を入れずに従っています。
やっぱり実力を見せるというのはそれだけ自信を生むんでしょうね。

「ではこの班は『リヴァイヴ』ということですよね？」

『異議なし』

「ないよー」

最後誰？…つてのほほんさんでしたか。妙に間延びしてたから誰かと思いましたよ。

何人かに手伝ってもらって『ラファール・リヴァイブ』を持ってきます。

ちなみにISは専用機じゃないと待機状態には持つて行けないので訓練機などではカートで運ぶわけです。

そしてそのカートは何と人力。しかも重量が滅茶苦茶なんですからここは動力が欲しいところですよね。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISの開放通信で山田先生の声が聞こえました。

「じゃあ出席番号順で装着と起動と歩行まで行きましょう」

『はい！』

「はい」

のほほんさんがいると場が和むというか緊張感がなくなるというか…これも一種の才能ですね。

ちなみにISの装着までは皆さん授業でやっているので問題なく行けるのは確認済みです。

「えっと、一番出席番号が早いのは…」

「ん、私」

「岸原さん。じゃあどうぞ」

岸原さんから順に装着、起動、歩行、解除まで問題なく進みます。ちなみに一夏さんの班が途中でISが立った状態で解除してしまうというアクシデントもありました。そういう場合は運んでもらうか踏み台を探すしかないので一夏さんお姫様抱っこで運んでいました
が…

周りから怨嗟、憎悪、嬌声と言った声が上がったのは私の気のせいじゃないはずです。

最後はのほほんさんですね。

「カルカルー、よろしくねー」

「は、はあ…では装着から…」

カルカル。これがのほほんさんが私につけたあだ名です。まあ…いいです。もう慣れました。

周囲を見るとボーデヴィツヒさんの班意外はほぼ最後の人のようですね。ボーデヴィツヒさんの班は会話すらないようでお通夜状態です。ご愁傷様です。

今上手いこと言いましたかね？

はっ！

いけないいけない。一夏さんのセンスが移っている気がします。

「お、お〜…」

「へ？」

ガシャン！

「はわぁ！」

不穏な声に振り向いた瞬間のほんさんが転びました。
世界転んだ人格好ランキングでいったら間違はなく一位を取れる
くらいの転びっぷりでした。そんなものあるかどうか知りません
けど。

しかも当然ISを装備した状態で…
って…姿勢制御システムがあるのにどうやってら転ぶんですか！？

「えへへへー…ごめんー、カルカルー」

「け、怪我は…ありませんよね？」

「うん、大丈夫」

ほ…それなら大丈夫ですね。

「なら立ってもう一度歩行をしましょう」

「おっけー、任せてー」

のほんさんはゆっくりとESを立てせてもう一度歩行を…

「おろろろろ？」

フワフワ

「はわわわわー」

ヨタヨタ

ガシャン！

「ふむむむー」

転びました。

だからどつちやってるんですか！

3 - 2 (後書き)

連投二回目ってことで！

激しくギャク回になってしまった…どうしてこうなったし…

原作でなかったのほんさんIS装着ってことでこんな話考えてみました。

のほん党の自分としては可愛さが際立たせられたかなと…！

誤字脱字、表現の矛盾の指摘があればよろしくお願いします。

評価、感想をもらえたら作者がプールから上がって『超気持ちいい

！』って言います！

原作設定のコーナー

二回目のこのコーナー。今回はIS学園実質的最高指導者！立てば軍人、座れば侍、歩く姿は装甲戦車と形容されるこのお方だあ！

??? 「一年一組担当兼茶道部顧問、織斑 千冬だ」

うおおおおおおお！千冬様あああああ！結婚してk

バシーン！！

千冬「黙れ、さもなければ死ね」

.....

千冬「よろしい。では今日はISバトルと実戦の違いを説明する」

うすー！よろしくお願いします！

千冬「ISバトルは文字通りISを使った試合の事を指す。相手のシールドエネルギーを0にすることで勝敗が決定する。バリアーを貫通するだけの攻撃をつければ大なり小なり実体ダメージを受けるが、まあ怪我はすることがあっても絶対に死ぬことはない」

なるほど。弟の一夏さんはよく実体ダメージを受けてますけど、それはバリアーを貫通する攻撃を受けているからなんですな。

千冬「うむ、奴の相手にしているのはどれも第3世代のISだ。普通はISのアサルトライフルでも中々バリアーは貫通しない。相手にダメージを与えるための武装や弾丸も存在するが、まあそれも戦闘を有利に進める戦略と言えるだろう」

では実戦との違いは？

千冬「基本的には変わらん。だが実戦はシールドエネルギーが0になっても戦いは続く。つまりシールドエネルギーが切れてからダメージを受ければ、待っているのは確実な『死』だ。いくらISスーツが丈夫だからといって敵ISの武装に耐えられるわけではない。ISの武装には全て最終安全装置がかかっているが、それを解除することは実戦を意味する。使うときは十分注意するように」

な、なるほど。それすなわち戦争ということですね。

千冬「その通りだ。そしてシールドエネルギーの切れたISの装甲

というのは脆い。既存の兵器には遅れを取らないだろうが、IS同士の戦いではあつという間に撃墜されるだろう。そうならないように私たち教員がIS学園で基礎を教えている」

流石現役教師。分かりやすい説明、ありがとうございました。

千冬「貴様も精進しろよ作者」

うっす！では今回はこの辺で！

何かまともに終わったな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849x/>

IS《インフィニット・ストラトス》 - オーストラリアの代表候補！？

2011年12月24日11時19分発行